

平成28年度

老人保健事業推進費等補助金

老人保健健康増進等事業

**認知症の人の視点を重視した
生活実態調査及び
認知症施策の企画・立案や
評価に反映させるための
方法論等に関する調査研究事業**

報告書

目 次

はじめに

事業要旨

第1章 事業概要.....	1
1. 事業の背景.....	1
2. 事業の目的.....	1
3. 事業の方法.....	2
1) 年間スケジュール.....	2
2) 検討委員会の設置と開催経過.....	3
3) ワークショップ(WS)の概要と開催経過.....	4
4) 全国自治体調査の概要と実施経過.....	7
5) パイロット調査の概要と実施経過.....	7
6) 報告会の開催.....	8
第2章 結 果.....	9
1. 認知症の本人調査と施策への反映に関する全国調査.....	9
1) 調査概要.....	9
2) 都道府県調査概要.....	10
3) 市区町村調査概要.....	19
2. パイロット調査.....	51
1) 実施概要.....	51
2) 施行経過と結果.....	54
(1)ワークショップの開催.....	54
(2)地域別実施結果:本人ミーティングの開催から開催後の結果の反映.....	56
(3)本人ミーティングの開催から開催後の結果の反映に関する全体集約.....	84
3. 報告会.....	88
1) 当日プログラム.....	88
2) 参加者の声～アンケートより.....	89

第3章 考 察.....	93
1. 全国の実態からみた自治体における本人調査と施策への反映のあり方	93
1) 自治体における「本人視点の重視」について.....	93
2) 自治体における本人調査の実施状況について.....	94
3) 市区町村が感じる本人調査とそのための方の必要性.....	94
2. パイロット調査から見えてきた本人ミーティングの可能性.....	95
1) 各自治体での自治体での実行可能性:本人ミーティングの多様な展開方法	95
2) 各自治体における導入のしやすさ:地域にあるものを活かした負荷が少ない方法	97
3) 本人ミーティングを通じた多面的成果の可能性.....	97
第4章 ガイドの作成.....	101
1. ガイドのねらいと役立つガイドを作成するための要件.....	101
2. 作成方法 ～全国調査とパイロット調査の結果をもとに.....	103
3. ガイドの構成と主な内容.....	104
第5章 全体総括.....	105
1. 本年度事業を通じて明らかになったこと.....	105
2. 本事業において本人・家族の立場で参画した検討委員からの提案.....	107
3. 提言.....	111
資料編.....	117
1. 自治体調査 調査票 (都道府県用 調査票・市区町村用 調査票).....	119
2. ワークショップ(全2回)で使用した資料・シート.....	133
3. パイロット調査で使用した資料・シート.....	138
4. 本人ミーティングの実施状況報告に使用した文書・シート.....	142
5. 報告会 案内チラシと配布資料(抜粋).....	144
6. ガイド(本人ミーティング開催ガイドブック).....	188

はじめに

「認知症になってからも希望と尊厳をもって暮らし続けることができ、よりよく生きていける社会を創り出していくこと」。これは2014年10月11日に発足した「日本認知症ワーキンググループ」が掲げた目的である。それは2015年1月27日に政府から発表された認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)に大きなインパクトを与えており、その基本目標とされる「認知症高齢者等にやさしい地域づくりの推進」の根幹を形成する基本理念と言っても過言ではなからう。

この言葉に触発されて、私たちは、2015年度より2年間にわたって、「認知症の人の視点を重視した生活実態調査及び認知症施策の企画・立案や評価に反映させるための方法論」を明らかにするための研究事業を実施した。

昨年度の研究では、検討委員会と作業部会を立ち上げて議論を積み重ね、方法論の一つとして本人ミーティングを提案し、6地域でパイロット調査を実施した。本人ミーティングとは、本人が主体となって、出会い、思いを語り、意見を述べ、政策に影響を与え、地域づくりに参画することを目的とする会議である。このような会議の実施は6地域すべてで実現可能であることが確認されたが、そのような地域には、①社会とのつながりをもつ“居場所づくり”の取り組みがあること、②そのような場所につながることを支援する人(パートナー)がいること、そして、③認知症と共に生きる本人の声に耳を傾けようとする人々がおり、それを施策に反映させようとする人々がいること、それが本人ミーティングの実現を可能にする条件になっていることが示された。

上記の結果を受けて、本年度は、全国の自治体を対象に本人の視点を重視した生活実態調査(本人調査)と施策への反映に関する取り組みの実態を把握するための調査を行うとともに、パイロット調査の実施地域を10地域に増やし、それらを総合して、本人調査と政策への反映のあり方や方法論上のポイントをわかりやすく解説した小冊子を作成した。本報告書はそれらをまとめたものである。

本報告書が、認知症の有無に関わらず、障害の有無に関わらず、希望と尊厳をもって暮らし続けることができる社会の実現に寄与することができれば幸いである。

平成29年3月

認知症の人の視点を重視した生活実態調査及び認知症施策の企画・立案や評価に
反映させるための方法論等に関する調査研究事業 検討委員会 委員長

東京都健康長寿医療センター研究所 研究部長 栗田 圭一

事業概要

目的

1. 認知症の人の視点を重視した本人調査(以下、本人調査)について、全国の自治体/地域での実施を推進するため、地域の実情を踏まえ、方法論を提示する。
2. 本人調査に関する全国自治体調査や先行地域の取組みの結果等を、認知症の本人の声を認知症施策の企画・立案や評価に反映させるための方法論を提示する。
3. 本人調査の取組み経過や施策への反映の先行事例のポイントや本人の声を集約した手引き・事例集を作成し、全国の自治体/地域へ普及をはかる。

方法と内容

1 本人を含む委員会を設置 :調査や施策反映の「あり方・方法論」を合議

- 認知症の本人、家族組織、医師、ケア関係者、行政職員、地域活動関係者、メディア、学識経験者の計15名から成る委員会を設置。
- 本事業の進め方や調査結果を多角的に合議(全3回)
 - ・第1回(平成28年8月):パイロット調査の進め方、本人調査・自治体調査のあり方について合議。
 - ・第2回(平成28年11月):ワークショップ(第一部)に出席し、本人調査の実施・施策への反映のあり方を討議。
 - ・第3回(平成29年2月):自治体調査結果・パイロット調査結果をふまえ、成果物や市町村展開について合議。

2 全国自治体調査の実施・データ集約・整理

- 本人調査に関する現状把握の実態調査を全都道府県・全市区町村を対象に実施。
- 回答率は、都道府県100%。市区町村54.6%(950)。回答を集約・整理し、今後、本人が参画しながら、全国の自治体/地域で実施を推進する基礎資料とし、手引き等へ反映した。

3 ワークショップ(WS)の開催 :継続地域と新規地域との情報共有・相互効果

- 「本人調査」の有効な一手法であることが確認された「本人ミーティング」の今後の普及をはかるべく、パイロット調査に取り組む10地域でワークショップを開催。継続6地域と新規4地域の本人、支援者が一堂に会し、情報共有・意見交換し、各地での取組みへ反映。
- WSは2回開催(平成28年8月、11月)。1地域3~4名。

4 パイロット調査の実施・データ集約・整理

- 目的:①多様な地域・実施主体で試行し、実行可能性・有効性を拡充する知見を集約、②「本人の声等の活かし方」を把握し、施策等への反映のあり方の検討、③今後の取組み・施策に活かす手引き等の作成へつなげる
- パイロット調査の実施地域と実施主体:
 - ・継続:仙台、国立広域、町田、富士宮、大阪、大牟田。
 - ・新規:北見、上田、兵庫県広域、綾川町。
 - ・本人が集まる場を地域で開催する多様な主体が実施。

5 全国への普及:報告会、手引き・事例集の作成

- 全国に速やかに普及を図るために報告会を開催した。平成28年2月。参加者238名。アンケート結果を集約し、成果物へ反映した。
- 事業成果を、手引き・事例集へ反映した。

事業の主な結果

1. 全国自治体調査の調査結果

全国自治体調査の回答で、本人視点を重視して施策を進めているのは、都道府県で約7割、市区町村で約5割、人口規模が大きい自治体ほど本人視点を重視する傾向がみられた。本人の体験や必要なことを把握する本人調査の平成28年度までの実施状況は、都道府県で61.7%、市区町村で12.1%。市区町村の78.6%が「今後本人調査が必要」と回答し、「具体的な進め方や内容が知りたい」が9割を占めた。

2. ワークショップ実施の結果(主な点)

本人調査の一手法として本人ミーティングの普及を図る一貫として、すでに取組んでいる継続地域(6)と新たに取組む新規地域(4)の関係者が情報や意見交換を行うワークショップを2回開催したところ、新規地域は先行地域から本人調査を実施するためのプロセスや留意点を具体的に伝授してもらうことができ、また継続地域は新規地域に触れることで継続した結果を地域に活かすことの重要性を再確認する等、ワークショップは双方にとってのメリットが大きいことが確認された。

3. パイロット調査の結果(主な点)

10地域が地域特性等に応じた企画・準備を行って開催した結果、本人ミーティングは多様な実施主体・多様な場・参加者の多様な参加ルートで開催しうる実行可能性が確認された。本人ミーティングを開催した結果、参加した本人に意欲や会話、行動面でプラスの変化が確認され、同時に、アンケート調査や個別聞き取り調査では把握が難しい認知症の当事者ならではの体験内容、生きづらさの実情、願いや希望、必要としている支援のあり方等が把握された。各地域で結果の活かし方が検討/実践され、多様な人々(本人、家族、地域の人、交通機関・企業、医療・介護関係者、権利擁護関係者等)への反映のあり方が明らかになった。以上の全体結果を、本人ミーティングの一連のプロセスとポイントを抽出した手引き・事例集(ガイドブック)に反映した。

4. 全国自治体調査の調査結果

今年度事業の結果の速やかな普及を図るために開催した報告会には238名の参加があり、アンケート結果では「参考になったことがあった」が96.3%、「自分の立場でやってみたいことがあった」が82.5%で、本人ミーティングを各地域で実行・推進していく上で一定の効果があることが確認された。

考察(主な点)

「全国の実態からみた自治体における 本人調査と施策への反映のあり方」

1) 自治体における「本人視点の重視」

・認知症の本人の視点重視の施策のあり方や本人調査への自治体の関心の高さ:

回収率は、都道府県100%、市区町村54.6%。

自由記述の回答箇所に多数の記述が寄せられた。

・認知症の人の視点を重視した取組みに自治体が着手: 「認知症の人の視点を重視して事業等を進めている」は、都道府県68.1%、市区町村48.1%、等。

認知症施策が内実を伴ったものとなる大きな転換期。

・格差の懸念、すべての自治体での展開を:

本人視点を重視した施策を推進している自治体とそうでない自治体で、施策全般の進捗・内実の格差拡大を懸念。人口規模の小さい自治体では、情報量の不足、住民の意識・価値観・地域文化の影響も予想
→各自治体にあった柔軟なやり方を

2) 自治体における本人調査の実施状況

・より施策に反映できる調査結果をうるために、本人ミーティングの方法を自治体が導入する必要性が示唆:

本人調査の実施状況は、都道府県61.7%、市区町村12.1%。ただし、若年性への調査等、対象に偏りも。

調査方法は都道府県の72.0%、市区町村の38.6%がアンケート調査。基本統計の把握としての意義は大きい、当事者の体験やニーズにあわせた施策を創出する調査に至っていたか、危惧もみられた。

3) 本人調査とそのための方法の必要性

市区町村の78.6%が「今後本人調査が必要」と回答。「具体的な進め方や内容が知りたい」が9割。都道府県も、何らかの情報や技術支援の機会を求めるが9割超。

→都道府県や市区町村の求めに応えるために、本人ミーティングの方法論の普及を図る意義は大きい。

パイロット調査から見た本人ミーティングの可能性

1) 各自治体での実行可能性:多様な展開方法

本人調査の一手法である「本人ミーティング」に焦点をあて、10地域でパイロット調査を行った結果、多様な人口規模、実施主体、開催の場での実行可能性を確認。今後、各自治体で普及を図る上で、選択肢を広げられた。各自治体で大きな課題になっている「参加者を確保」も認知症専門医療機関・かかりつけ医等の医療機関、行政や地域包括支援センターの相談窓口、認知症カフェ、介護事業所、サービス付高齢者向け住宅、地域食堂等、多様なルートで参加者がつながれることが確認された。

2) 各自治体における導入のしやすさ:

「従来のアンケート調査等よりはるかに軽量で実施できる」「以外と手間がかからなかった」「特別の予算がなくても、地域にあるものをつないでやれた」等の声あり。本人ミーティングは、地域にある資源を基盤にしながら、少人数の本人の集まりをつくる方法であり、コスト・時間・労力で余裕がない中でも、比較的とりくみやすい(導入しやす)方法であると確認された。

3) 本人ミーティングを通じた多面的成果の可能性:

・本人が、主体性・自立性を発揮し、伸ばす
・本人同士ならではの関係を活かし、ポテンシャルが引き出される

・参加した関係者の認知症の人や支援へのイメージや認識を大きく変え、主体性を高める機会になる

・取組みの拡充や施策に反映できる点が豊富にみつか

結論

自治体の認知症施策担当者、地域支援の関係者へ

本事業を通じて、次のことが明らかとなった。

・本人視点を重視した自治体が増える中での、本格的な本人調査の必要性

・本人重視の施策や支援を効率的に促進するための本人ミーティング

・今後の課題:自治体の関与や支援への期待、本人ミーティングと様々な資源サービスとのつながりの拡充「パートナー」の増加の継続的推進、等。

提言

本人ミーティングについて、 地域に情報発信し対話を

本人ミーティングのことを、それぞれの立場からつながりのある人に伝え、本人同士が出会い、語り合う中で、多様な可能性が広がることについて、話し合ってみることを提言したい。ガイドが役に立つだろう。

少人数からでも、本人ミーティングをスタート

本人が数人集まれば開催可能である。どのような立場の人からでも始めていける。ぜひ機会を。

「声を聴く」ことを、あらゆる事業、取り組み の出発点に

本人が声をあげられるのに、周囲からは「もうあまり話せない」、「話は無理」、とみなされてしまっている人が少なくない。

本人ミーティングの実施の有無にかかわらず、相談や医療、介護現場、行政が行う各種調査、行政窓口等、あらゆるところで「声を聴く」ことの重要性を浸透させ、あたりまえの水準へ。

認知症施策担当者が本人の声を聴き、 本人視点の重視の内実の理解を

本人の声を聴くことが重要なのは、専門職だけではない。本人ミーティングの場ではなくても、認知症の人がおられる現場に事務職の人でも1回でも出向いてじっくりと話を聞く機会をつくることが求められている。

自治体の認知症施策の委員会等の委員に 認知症の本人を

認知症の人の声が反映されないままの施策や事業では、本人視点を重視しているとは言えないであろう。行政自体が本人の声を聴くという姿勢を示していくことが、本人の視点を重視した、やさしいまちづくりを大きく進展させると考えられる。

第1章 事業概要

1. 事業の背景

認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）で掲げられた「認知症の人の意思の尊重」、「認知症の人の視点の重視」は、「認知症高齢者等にやさしい地域づくり」を推進していくために極めて重要な点である。それを具体的に推進するために、認知症の人の視点を重視した本人調査及び調査を認知症施策の企画・立案や評価に反映させるための好事例の収集や方法論の研究が急務となっている。

その一環として平成27年度に実施された、全国6地域でのパイロット調査に基づく研究事業（東京都健康長寿医療センター 栗田委員長）を通じて、認知症の本人同士による話しあいの場（以下、「本人ミーティング*」とする）の重要性と多様な実施主体による本人ミーティングの実行可能性が確認された。また、より多様な地域での展開のあり方の追究と、施策への反映の方法論を充実させていく必要性が課題として挙げられ、昨年度の知見を踏まえて本事業が着手された。

*本人ミーティングとは

認知症の本人が集い、本人同士が主になって体験や生きづらさ、希望、必要としていること等を語り合い、自分たちのこれからのよりよい暮らしや暮らしやすい地域のあり方を一緒に話し合う場

2. 事業の目的

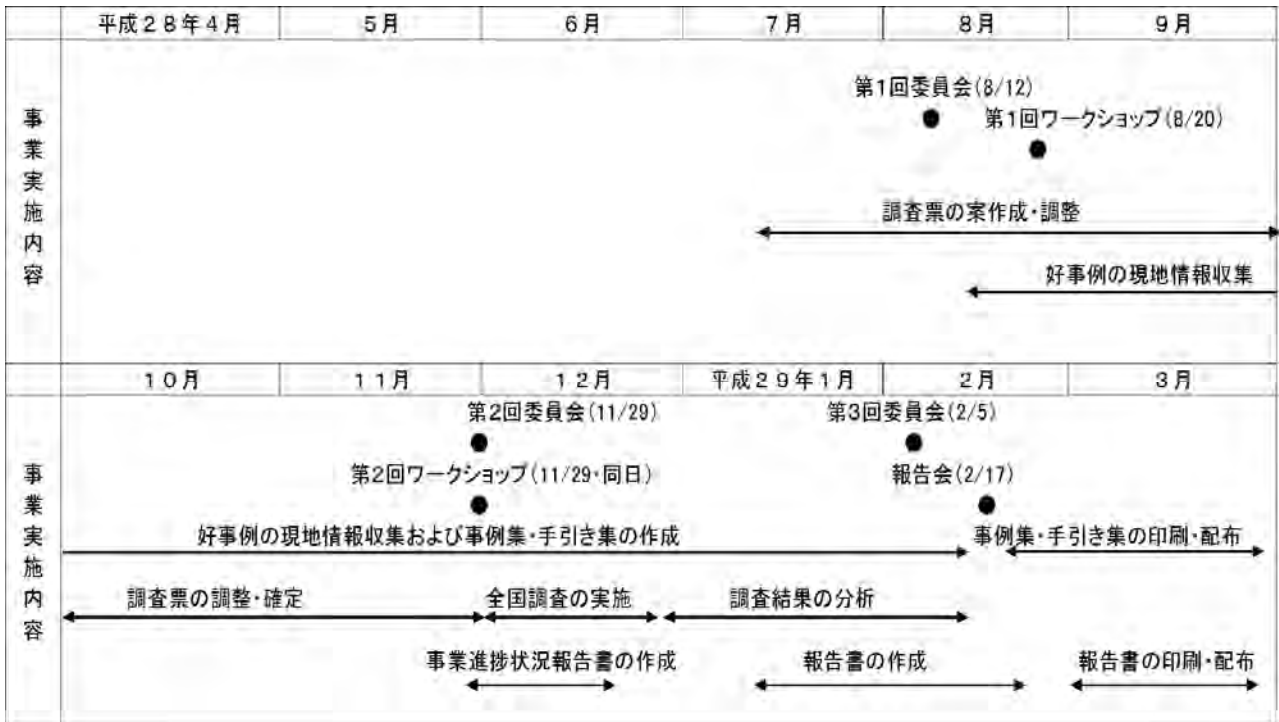
本調査研究事業の目的は、次の3点である。

1. 認知症の人の視点を重視した本人調査を、今後、本人が参画しながら全国の自治体/地域で実施していくことを推進するために、全国の本人調査に関する実態調査ならびに先行地域の取組の方法や経過、課題等に関する情報収集と討議を行い、自治体/地域の実情を踏まえた本人調査に関する方法論を提示する。
2. 1. の調査結果ならびに先行地域の詳細な情報と討議結果をもとに、本人の生活実態や声を施策に反映していくための一連の方法論を提示する。
3. 本人調査の取組み経過やその結果の施策への反映方法の好事例の実際やポイントをわかりやすくまとめた手引きと本人の声を集約した冊子等を作成し、全国の自治体/地域へ普及をはかる。

3. 事業の方法

- 本調査研究事業の実施にあたって、認知症の及び有識者から構成される検討委員会を設置し、本事業の進め方や結果に関する検討を行った。
- 認知症の人の視点を重視した本人調査を、今後、本人が参画しながら全国の自治体/地域で実施していくことを推進するための基礎資料をうるために、全国の都道府県及び市区町村を対象に本人調査に関する現状を把握する実態調査を実施した。
- 「本人調査」として有効な手法であることが確認された「本人ミーティング」に焦点をあて、より多様な地域・実施主体での検討・普及をはかるためのワークショップを開催するとともに、昨年度からの継続地域および今年度からの新規地域合わせて10地域において本人ミーティングに関するパイロット調査を実施し、その実行可能性と有効性、ならびに施策への反映状況の把握、事例の集約を行った。
- 本調査結果をもとに、認知症の人の視点を重視した調査の一手法である本人ミーティングのあり方及び施策への反映のあり方について全国に速やかに普及を図るために報告会を開催した。

1) 年間スケジュール(全体)



2) 検討委員会の設置と開催経過

[検討委員会構成] *は検討委員長 (計15名・敬称略・五十音順)

氏名	所属・役職
栗田 主一 *	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 自立促進と介護予防研究チーム 研究部長
稲垣 康次	静岡県富士宮市役所 産業振興部観光課
大谷 るみ子	大牟田市認知症ライフサポート研究会 研究会代表
川村 雄次	NHK制作局 文化・福祉番組部 チーフディレクター
木之下 徹	のぞみメモリークリニック 院長
繁田 雅弘	首都大学東京健康福祉学部 作業療法学科 人間健康科学研究科 作業療法科学域 教授
高見 国生	公益社団法人 認知症の人と家族の会 代表理事
徳田 雄人	NPO法人認知症フレンドシップクラブ 東京事務局代表
永田 久美子	認知症介護研究・研修東京センター 研究部長
古川 歌子	東京都町田市役所 いきいき生活部高齢者福祉課 地域支援係 担当係長
藤田 和子	日本認知症ワーキンググループ 共同代表
堀田 聡子	国際医療福祉大学大学院 医療福祉研究学科 教授
前田 隆行	NPO法人町田市つながりの開 理事長
森 俊夫	京都府立 洛南病院 副院長
山崎 英樹	医療法人社団清山会 いずみの杜診療所 医療福祉グループ代表

ワークショップ委員

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 研究員 宮前 史子

オブザーバー

厚生労働省 老健局総務課認知症施策推進室 室長補佐 川島 英紀

厚生労働省 老健局総務課認知症施策推進室 専門官 延 育子

事務局

一般財団法人長寿社会開発センター 国際長寿センター 大上 真一

NPO法人認知症当事者の会 渡辺 紀子

[開催経過]

第1回検討委員会

日時：平成28年8月12日（金）18時～20時30分

場所：東京八重洲ホール

内容：パイロット調査の進め方、本人調査のよりよいやり方・あり方について
全国自治体調査について

第2回検討委員会

日時：平成28年11月29日（金）第一部 13時～16時（ワークショップ 同時開催）

第二部 16時～17時

場所：東京八重洲ホール

内容：ワークショップ（第一部）に同席し、第二部でワークショップから見えてきた本人調査（本人ミーティング）の実施のあり方や施策への反映のあり方、課題に関する討議の実施

第3回検討委員会

日時：平成29年2月5日（日）14時～16時30分

場所：東京八重洲ホール

内容：自治体調査結果およびパイロット調査結果について
今年度成果物（ガイド、報告書）について
市町村への展開について

3) ワークショップ（WS）の概要と開催経過

本調査研究事業の実施にあたっては、認知症の本人を含む下記の方々から構成されるワークショップを設置した。

ワークショップには、本人調査の一手法である本人ミーティングを既に継続的に実践している6つの組織・活動チームと、これからこの取組みを始めようとする、または既にそうした取組みの素地がある4つの組織・活動チームからそれぞれ、認知症の本人と家族・支援者関係者が参集した。

先行的に取り組んだ6地域と、あらたに取り組んだ4地域が情報共有しながら、本人調査及び施策への反映のよりよいあり方に関する討議を行った。

開催回数は全2回で、第2回は検討委員会の第2回と同時開催とした。

[ワークショップ参加メンバー]

敬称略。都道府県コード順。各回参加は3名ずつ。参加したすべての方を掲載

北見市／北海道

舩川 壽美子 元・家庭裁判所調停委員（現在も認知症の人の相談をうける）
矢久保ゆかり 北見市高齢者住宅生活相談員
青山 由美子 有限会社エーデルワイス

仙台市／宮城県

丹野 智文 宮城の認知症をともに考える会・おれんじドア実行委員会
若生 栄子 宮城の認知症をともに考える会・おれんじドア実行委員会
今田 愛子 宮城の認知症をともに考える会・おれんじドア実行委員会

国立広域（国立市・立川市）／東京都

間瀬 由紀子 国立市在宅療養相談室（医療法人社団新田クリニック受諾事業）
馬場 美香 国立市在宅療養相談室（医療法人社団新田クリニック受諾事業）
三森 幸 中西クリニック
小森 由美子 NPO法人地域生活サポートセンター

町田市／東京都

青山 仁 DAYS BLG！
杉本 欣哉 DAYS BLG！
奥 公一 DAYS BLG！

上田市／長野県

中村 竜也 社福）ジェイエー長野会 小規模多機能型居宅介護 上野の家
臼田 富子 社福）ジェイエー長野会 特別養護老人ホームローマンうえだ
櫻井 記子 社福）ジェイエー長野会 特別養護老人ホームローマンうえだ
石井 利奈 上田市福祉部高齢者介護課支援推進係

富士宮市／静岡県

渡辺 和夫 富士宮認知症フレンドシップ等
望月 昌宏 富士宮市役所福祉総合相談課 地域支援係
赤池 好子 富士宮市地域包括支援センター

大阪市／大阪府

石橋 淳一 NPO法人認知症の人とみんなのサポートセンター「タック」
沖田 裕子 NPO法人認知症の人とみんなのサポートセンター「タック」
山下 久美 大阪府福祉部高齢介護室 介護支援課 地域支援グループ

兵庫県広域

八木 司朗	若年性認知症とともに歩む ひょうごの会
土橋 光伸	若年性認知症とともに歩む ひょうごの会／介護老人保健施設青い空の郷
岸田 彰範	兵庫県社会福祉協議会 ひょうご若年性認知症生活支援相談センター
岩木 久敏	兵庫県社会福祉協議会 ひょうご若年性認知症生活支援相談センター
亀山 美矢子	兵庫県健康福祉部高齢社会局 高齢対策課 地域包括ケア推進班

綾川町／香川県

志度谷 利幸	綾川町ほっと歓伝え隊
志度谷 久美	綾川町ほっと歓伝え隊
塩田 哲也	綾川町役場健康福祉課
川崎 孝至	綾川町役場健康福祉課 地域包括支援センター
増田 玲子	綾川町役場健康福祉課 地域包括支援センター

大牟田市／福岡県

成清 和子	ぼやき・つぶやき・元気になる会
永江 孝美	社会福祉法人東翔会 高齢者総合ケアセンター サンフレンズ
木村 薫	大牟田市中央地域包括支援センター

[開催経過]

第1回

日時：平成28年8月20日（土）14時～17時

場所：東京八重洲ホール

内容：昨年度の取組みの振り返りとその後について（6地域からの情報を共有）
グループワーク「地元でじっくり話し合う機会をつくるための作戦を考えよう」

第2回

日時：平成28年11月29日（金）13時～16時（第2回検討委員会 同時開催）

場所：東京八重洲ホール

内容：この事業がめざすこと（検討委員（本人）から）

今年度の各地の動きについて

グループワーク「各地を参考に、自地域の取組みをよりよいものに」

本人グループ、支援者グループに分かれて

4) 全国自治体調査の概要と実施経過

本事業では、自治体・地域における「本人ミーティング」等本人調査に関する取組みや施策への反映の現状、今後のあり方に関して、全国の自治体を対象に「認知症の本人調査と施策への反映に関する全国調査」を実施した。(結果は第2章)

(1) 対象

全国都道府県(47)、及び全市区町村(1,741)

(2) 方法

○都道府県：認知症担当部門へ調査票(電子ファイル)をメール添付にて送付、メール送付にて回答を得る。

○市区町村：都道府県を通じて、認知症担当部門へ調査票(電子ファイル)をメール添付にて送付、メール送付にて回答を得る。

(3) 調査期間(調査票回答収集期間)

平成28年12月～平成29年2月初旬

5) パイロット調査の概要と実施状況

昨年度事業において「本人調査」の一手法としての有効性が確認された「本人ミーティング」に関して、より多様な地域・実施主体で試行を行い、実行可能性と有効性、ならびに施策への反映状況の把握、事例の集約を行った。

実施地域は、ワークショップに参加した10地域。地域ごとに企画立案を行い、下記の日程で本人ミーティングを開催。開催に至る(企画・準備)経過、開催当日の方法や開催結果、開催後の活かし方等に関する一連の情報を収集・集約した。なお、新規の全4地域及び、継続の6地域のうち随時継続開催している4地域(国立広域、町田市、大阪市、大牟田市)を除く2地域については、本人ミーティング開催当日あるいは開催後に、現地調査を実施した。

[現地調査の実施経過] ◆は前年度からの継続6地域、◇は今年度新規の4地域

◇北見

日時：平成29年3月5日(日)13:00～15:30

場所：有限会社エーデルワイス 地域食堂「きたほっと」

◆仙台

日時：平成28年6月7日(火)10:30～12:30/11月13日(日)15:40～17:00

場所：仙台市市民活動サポートセンター / 仙台市戦災復興記念館

◆国立広域

日時：本人ミーティングを継続開催。主催者からの報告・聞取り

場所：医療法人社団つくし会 新田クリニック やがわデイサービスセンター

◆町田

日時：本人ミーティングを継続開催。主催者からの報告・聞取り

場所：特定非営利活動法人町田市つながりの開 DAYS BLG！

◇上田

日時：平成28年10月24日（月）／11月7日（月）いずれも14：00～15：00

場所：上田市・ローマンうえだ小規模多機能型居宅介護上野の家

◆富士宮

日時：平成28年12月5日（月） 13：30～15：00

場所：富士宮駅前交流センターきらら

◆大阪

日時：本人ミーティングを継続開催。主催者からの報告・聞取り

場所：NPO法人認知症の人とみんなのサポートセンター「タック」

◇兵庫広域

日時：平成28年9月26日（月）11：00～13：00／平成29年2月1日（水）13：00～15：00

場所：日山ごはん（古民家定食屋） ／兵庫県福祉センター

◇綾川

日時：平成29年1月17日（火） 13：30～15：30

場所：綾川町地域包括支援センター えがお調理室、多目的研修室

◆大牟田

日時：本人ミーティングを継続開催。主催者からの報告・聞取り

場所：地域交流拠点コムーネ

6) 報告会の開催

本事業の報告会を下記のとおり開催し、当日参加者を対象に報告会終了後に参加を通じて得られたこと等に関するアンケート調査を実施した。（当日資料は、資料編）

日時：平成29年2月17日（金）10：30～15：30

場所：有楽町朝日ホール（東京）

参加者：認知症の本人、家族、介護・看護・医療、研究者、報道、行政など

総勢 238 名

第2章 結果

1. 認知症の本人調査と施策への反映に関する全国調査

1) 調査概要

認知症の人の視点を重視した本人調査を、全国の自治体/地域で実施していくことを推進するための基礎資料をうるために、全国の都道府県及び市区町村を対象に、自治体・地域における「本人ミーティング」等、本人調査に関する取組みや施策への反映の現状、今後のあり方に関する「認知症の本人調査と施策への反映に関する全国調査」を実施した。

(1) 対象

全国都道府県（47）、及び全市区町村（1,741）

(2) 方法

○都道府県：認知症担当部門へ調査票（電子ファイル）をメール添付にて送付、メール送付にて回答を得る。

○市区町村：都道府県を通じて、認知症担当部門へ調査票（電子ファイル）をメール添付にて送付、メール送付にて回答を得る。

(3) 調査期間（調査票回答収集期間）

平成28年12月～平成29年2月初旬

(4) 回答率

○都道府県：全47都道府県から回答を得た（回答率100%）。

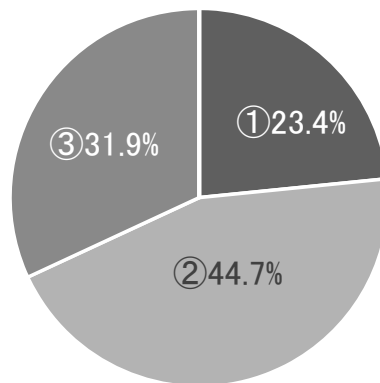
○市区町村：950市区町村から回答を得た（回答率54.6%）。

2) 都道府県調査結果概要

主な設問の集計結果を以下に示す。

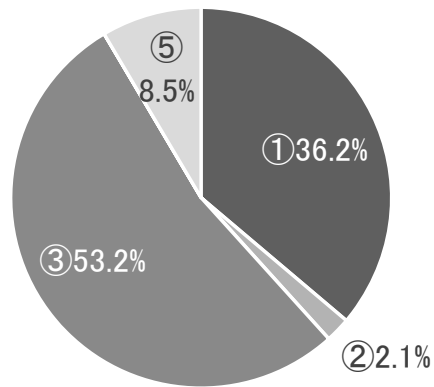
- (1) 新オレンジプランには「認知症の人の視点の重視」が掲げられているが、本人の視点を認知症施策にどのように位置付けているか

項目	数	%
① 認知症施策の基本方針として「本人の視点」を掲げ、事業を進めている	11	23.4%
② 基本方針には掲げていないが、事業の実施においては「本人の視点」を重視して進めている	21	44.7%
③ 基本方針・事業ともに、まだ「本人の視点」を重視するには至っていないが、認知症施策担当部署内では、「本人の視点」を重視することへの共通理解が図られている	15	31.9%
④ 認知症施策担当部署内で、「本人の視点」を重視することへの共通理解は図られていない	0	0.0%
⑤ その他	0	0.0%
計	47	100.0%



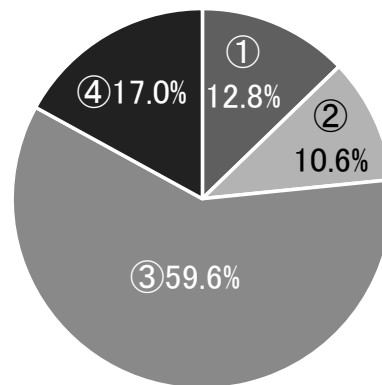
- (2) 認知症担当者と、自治体内(地元)の本人との関わりについて

項目	数	%
① 本人と直接関わり、本人の体験や本人が必要としていることを聞くようにしている。	17	36.2%
② 本人と直接関わることはあるが、本人の体験や本人が必要としていることはあまり聞いていない。	1	2.1%
③ 本人の体験や本人が必要としていることを直接聞く機会はないが、関係者を通じて知るようにしている。	25	53.2%
④ 地元の本人の体験や本人が必要としていることは、直接的にも間接的にも聞いていない。	0	0.0%
⑤ その他	4	8.5%
計	47	100.0%



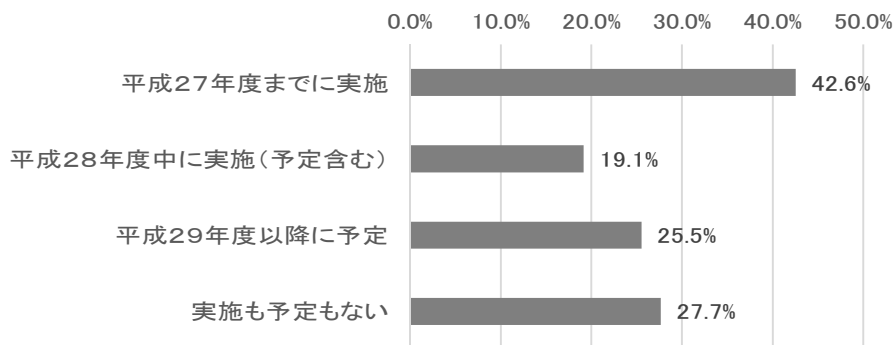
(3) 認知症施策等に関する行政の委員会や検討会等に、本人が参画しているか

項目	数	%
① 実際に委員会等に入ってもらい、本人の意見を聴いて、施策や事業等に活かしている。	6	12.8%
② 会議に本人を招いて話をしてもらったことはあるが、委員としての参画はない。	5	10.6%
③ 委員会等への本人の参画や、本人を招いて話をしてもらうことは、まだない。	28	59.6%
④ その他	8	17.0%
計	47	100.0%



(4) 都道府県が実施主体となって、本人の「体験」や本人が「必要としていること」を把握するための調査の実施、または実施予定があるか

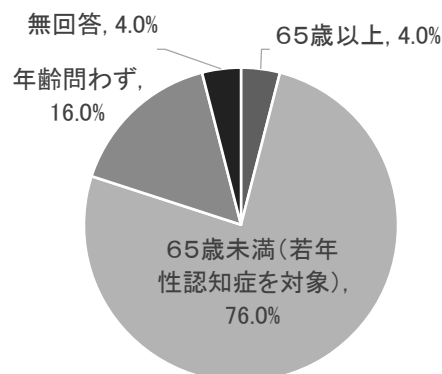
項目	数	%
平成27年度までに実施	20	42.6%
平成28年度中に実施（予定含む）	9	19.1%
平成29年度以降に予定	12	25.5%
実施も予定もない	13	27.7%



(5) これまでに実施した、または実施予定の本人調査について

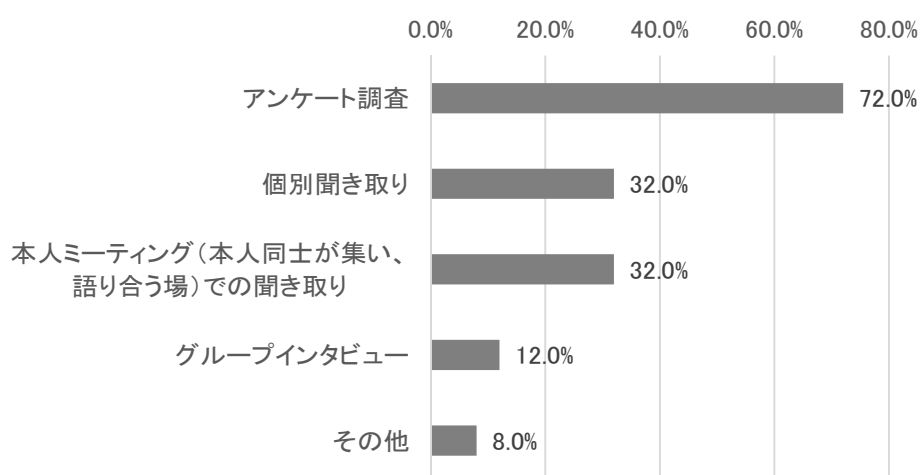
①本人調査の対象年齢（複数回答：N=25）

項目	数	%
65歳以上	1	4.0%
65歳未満（若年性認知症を対象）	19	76.0%
年齢問わず	4	16.0%
無回答	1	4.0%
計	25	100.0%



②本人調査の方法（複数回答：N=25）

項目	数	%
アンケート調査	18	72.0%
個別聞き取り	8	32.0%
本人ミーティング（本人同士が集い、語り合う場）での聞き取り	8	32.0%
グループインタビュー	3	12.0%
その他	2	8.0%

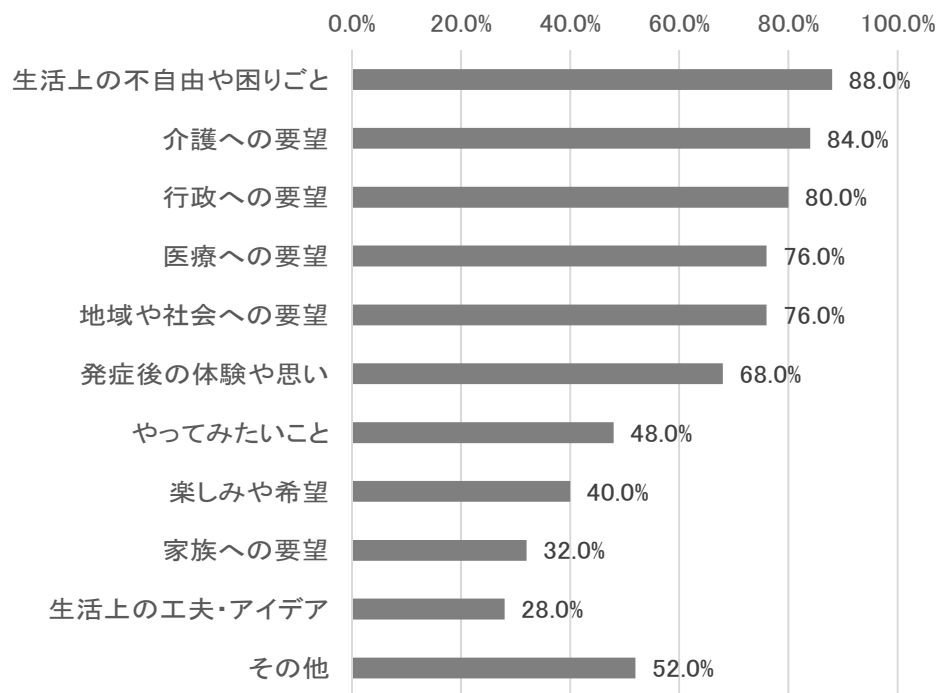


③本人への依頼方法（記述回答）

医療機関やケアマネ、事業所等を通じて依頼（11） ※医療機関のPSW等または県職員が医療機関または自宅でアンケート調査のほか、当該担当者を通じて、対象者へ手渡しで調査依頼。 一次調査を経て、該当者のある組織へ二次調査票を渡して実施のほか、第3次調査(同意を得られた家族を対象とした訪問聞き取り調査、など)
認知症の人と家族の会の支部等を通じて（4） ※うち1は、つどいの場に出向いて実施
医療機関を通じて依頼（3）
市町村の協力を得て、介護保険認定審査会資料により把握しているものに依頼
県から直接依頼、協力行政機関(市町村担当課、包括支援センター等)を通じて依頼等
認知症カフェ・つどいにて
若年性認知症支援コーディネーター及び各市町包括支援センター等から依頼
支援者(若年性認知症生活支援相談センターで当事者グループ「たちあげ」を通じて依頼
若年性認知症交流会参加者に依頼

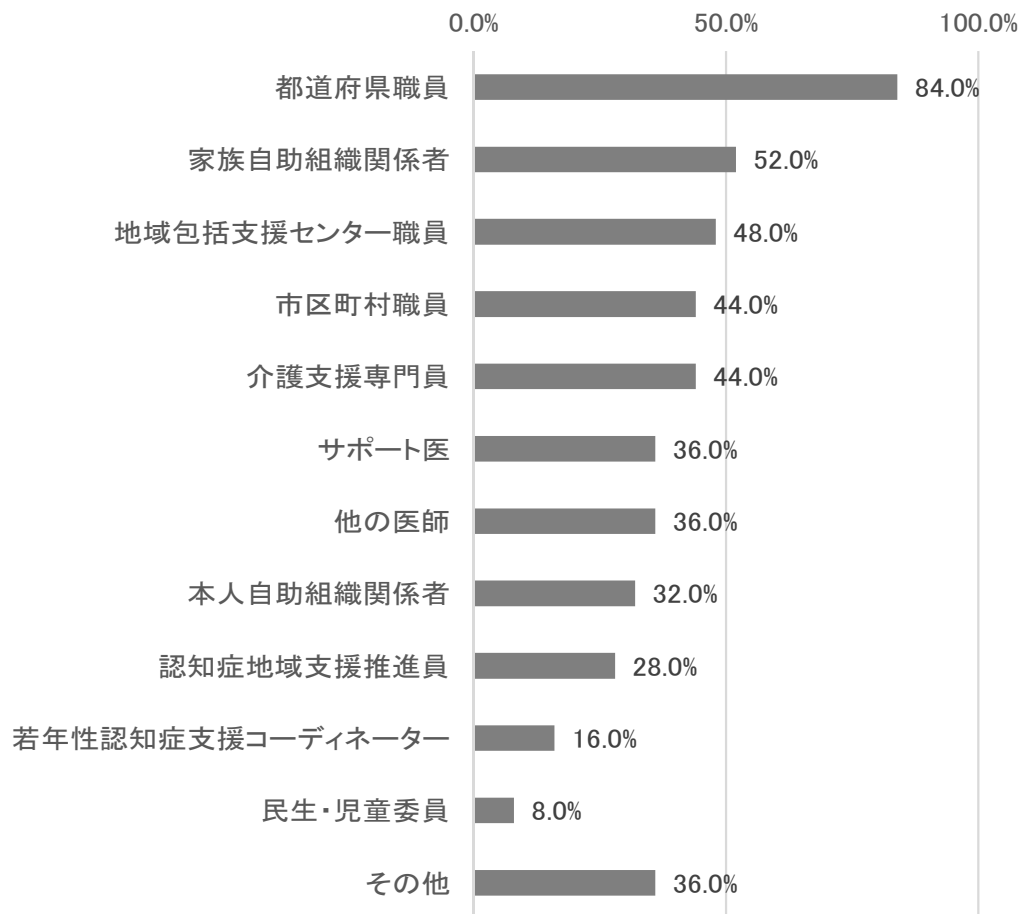
④本人調査での主な把握内容（複数回答：N=25）

項目	数	%
生活上の不自由や困りごと	22	88.0%
介護への要望	21	84.0%
行政への要望	20	80.0%
医療への要望	19	76.0%
地域や社会への要望	19	76.0%
発症後の体験や思い	17	68.0%
やってみたいこと	12	48.0%
楽しみや希望	10	40.0%
家族への要望	8	32.0%
生活上の工夫・アイデア	7	28.0%
その他	13	52.0%



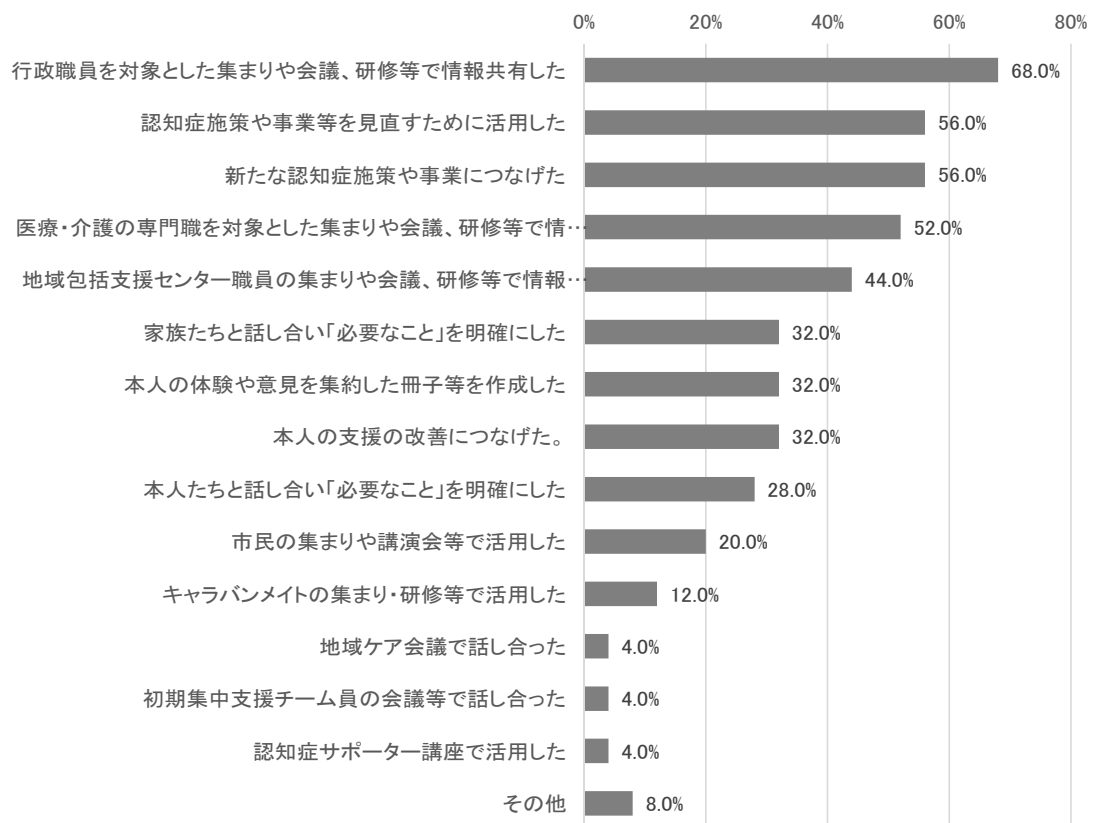
⑤把握に関与した人の立場（複数回答：N=25）

項目	数	%
都道府県職員	21	84.0%
家族自助組織関係者	13	52.0%
地域包括支援センター職員	12	48.0%
市区町村職員	11	44.0%
介護支援専門員	11	44.0%
サポート医	9	36.0%
他の医師	9	36.0%
本人自助組織関係者	8	32.0%
認知症地域支援推進員	7	28.0%
若年性認知症支援コーディネーター	4	16.0%
民生・児童委員	2	8.0%
その他	9	36.0%



(6) 本人調査の結果を受けて、それをどのように活かしたか（複数回答：N=25）

項目	数	%
行政職員を対象とした集まりや会議、研修等で情報共有した	17	68.0%
認知症施策や事業等を見直すために活用した	14	56.0%
新たな認知症施策や事業につなげた	14	56.0%
医療・介護の専門職を対象とした集まりや会議、研修等で情報共有した	13	52.0%
地域包括支援センター職員の集まりや会議、研修等で情報共有した	11	44.0%
家族たちと話し合い「必要なこと」を明確にした	8	32.0%
本人の体験や意見を集約した冊子等を作成した	8	32.0%
本人の支援の改善につなげた。	8	32.0%
本人たちと話し合い「必要なこと」を明確にした	7	28.0%
市民の集まりや講演会等で活用した	5	20.0%
キャラバンメイトの集まり・研修等で活用した	3	12.0%
地域ケア会議で話し合った	1	4.0%
初期集中支援チーム員の会議等で話し合った	1	4.0%
認知症サポーター講座で活用した	1	4.0%
その他	2	8.0%



(7) 本人調査の実施や、本人の意見を行政施策に活かす過程で、得られたこと

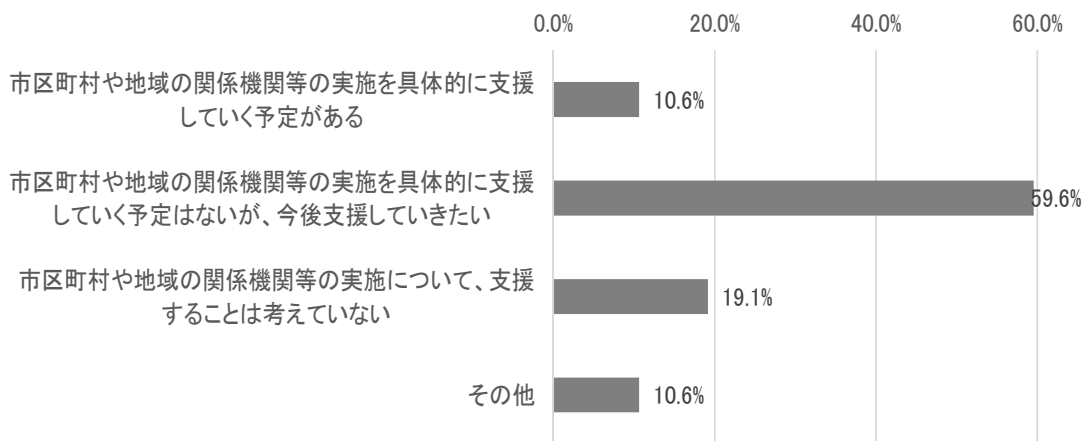
若年性認知症の実態調査の結果から、サービスは主として高齢者が対象であり、若年の方が利用しづらいことが分かったため、若年性認知症の人に適した専用サービスのプログラムを作成し県下の事業所に提供した。さらに、若年性認知症の人と家族への支援のためのパンフレットを作成し、市町村・地域包括支援センター、家族会、企業、医療機関等への配布や、関係相談支援機関への研修会等を実施している。
必要な情報がなかなか本人には届いていないということがわかった。
本人が直接意見を述べることで、現状や課題が具体的となり関係機関の理解や支援につながりやすい。
現在、調査中
若年性認知症の人の多様な意見を聴く中で、施策につなげる責務を感じた。

(8) 本人調査の実施や、本人の意見を行政施策に活かす過程で、課題になったこと

協力していただける御本人・御家族の確保が課題だと考えます。
若年性認知症対策は、若年性認知症の理解促進、若年性認知症に特化した専用サービス・専用施設、相談窓口の一本化や積極的な情報提供、家族の生活の変化に対する対応等様々な課題があること。
本人調査とは別のケースだが、成年後見制度に対する意見交換では、当事者の方から「自分たちの権利を奪う成年後見制度を推進するということは受け入れがたい」という意見があり、国の方向性と当事者の思いの間で板挟みになることがある。
社会の認知症理解が進まないと当事者が声をあげにくい。本人の声を施策へ生かすためにも「認知症にやさしい地域づくり」が必要。
若年性認知症の人への支援は多様であり、一律のサービスでは個々のニーズに対応できない。また、支援対象者数が少ない状況において、効果的・効率的な施策を予算化していく必要がある。

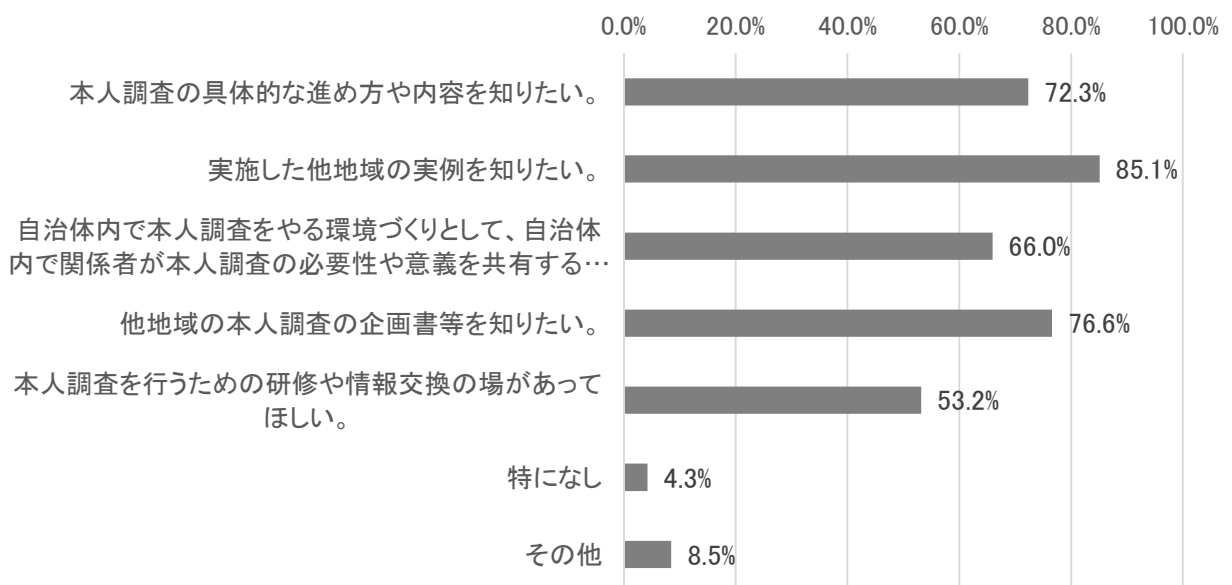
(9) 市区町村や地域の関係機関等での本人調査の実施への支援について（複数回答）

項目	数	%
市区町村や地域の関係機関等の実施を具体的に支援していく予定がある	5	10.6%
市区町村や地域の関係機関等の実施を具体的に支援していく予定はないが、今後支援していきたい	28	59.6%
市区町村や地域の関係機関等の実施について、支援することは考えていない	9	19.1%
その他	5	10.6%



(10) 本人調査について知りたいことや必要なことについて (複数回答: N=47)

項目	数	%
本人調査の具体的な進め方や内容を知りたい。	34	72.3%
実施した他地域の実例を知りたい。	40	85.1%
自治体内で本人調査をやる環境づくりとして、自治体内で関係者が本人調査の必要性や意義を共有するための、資料がほしい。	31	66.0%
他地域の本人調査の企画書等を知りたい。	36	76.6%
本人調査を行うための研修や情報交換の場があってほしい。	25	53.2%
特になし	2	4.3%
その他	4	8.5%



3) 市区町村調査結果概要

(1) 都道府県別市区町村回答数と市区町村数に対する回答率

都道府県名	市区町村数	回答数	回答率
北海道	179	95	53.1%
青森県	40	26	65.0%
岩手県	33	29	87.9%
宮城県	35	17	48.6%
秋田県	25	16	64.0%
山形県	35	18	51.4%
福島県	59	30	50.8%
茨城県	44	32	72.7%
栃木県	25	17	68.0%
群馬県	35	16	45.7%
埼玉県	63	40	63.5%
千葉県	54	31	57.4%
東京都	62	35	56.5%
神奈川県	33	11	33.3%
新潟県	30	17	56.7%
富山県	15	9	60.0%
石川県	19	6	31.6%
福井県	17	8	47.1%
山梨県	27	20	74.1%
長野県	77	26	33.8%
岐阜県	42	30	71.4%
静岡県	35	26	74.3%
愛知県	54	40	74.1%
三重県	29	3	10.3%
滋賀県	19	9	47.4%
京都府	26	13	50.0%
大阪府	43	27	62.8%
兵庫県	41	22	53.7%
奈良県	39	11	28.2%
和歌山県	30	11	36.7%
鳥取県	19	8	42.1%
島根県	19	9	47.4%
岡山県	27	16	59.3%

広島県	23	10	43.5%
山口県	19	15	78.9%
徳島県	24	13	54.2%
香川県	17	6	35.3%
愛媛県	20	16	80.0%
高知県	34	8	23.5%
福岡県	60	30	50.0%
佐賀県	20	13	65.0%
長崎県	21	12	57.1%
熊本県	45	39	86.7%
大分県	18	17	94.4%
宮崎県	26	9	34.6%
鹿児島県	43	20	46.5%
沖縄県	41	18	43.9%
全国	1741	950	54.6%

(2) 人口階級別回答数・回答率と全回答数(950)に占める割合

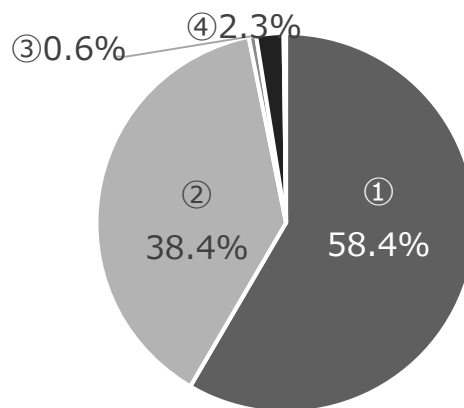
人口規模区分	市区町村数 ※	回答数	回答率	全回答数に占める割合
50万以上	35	24	68.6%	2.5%
20万以上50万未満	94	66	70.2%	6.9%
10万以上20万未満	153	102	66.7%	10.7%
5万以上10万未満	262	173	66.0%	18.2%
3万以上5万未満	243	141	58.0%	14.8%
1万以上3万未満	442	229	51.8%	24.1%
1万人未満	512	215	42.0%	22.6%
計	1741	950	54.6%	100.0%

※内訳は、総務省統計局「平成27年国勢調査」速報集計より事務局調べ

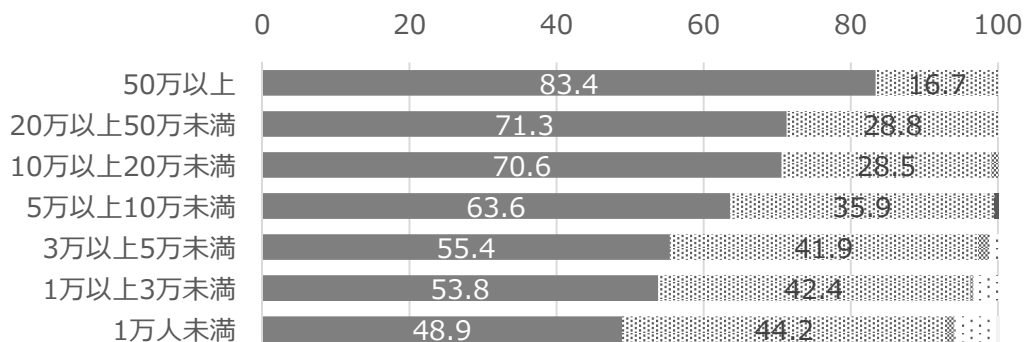
(3) 新オレンジプランには「認知症の人の視点の重視」が掲げられているが、本人の視点重視についての考えは

<全体集計>

項目	数	%
①新オレンジプランに掲げられる以前から重要だと考えていた	555	58.4%
⑥ 新オレンジプランに掲げられたことで重要だと考えるようになった	365	38.4%
⑦ 新オレンジプランに掲げられたことは知っているが、それほど重要だと考えていない	6	0.6%
⑧ 新オレンジプランに掲げられたことを知らなかった	22	2.3%
⑨ その他	1	0.1%
無回答	1	0.1%
計	950	100.0%



<人口階級別>

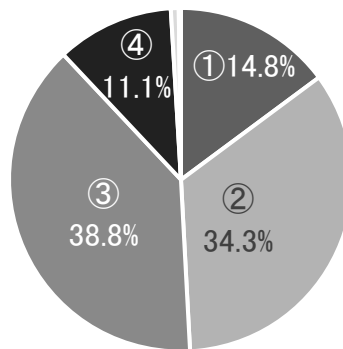


- 新オレンジプランに掲げられる以前から、重要だと考えていた。
- ▨ 新オレンジプランに掲げられたことで、重要だと考えるようになった。
- ▩ 新オレンジプランに掲げられたことは知っているが、それほど重要だと考えていない。
- ⋯ 新オレンジプランに掲げられたことを知らなかった。
- その他
- 無回答・無効

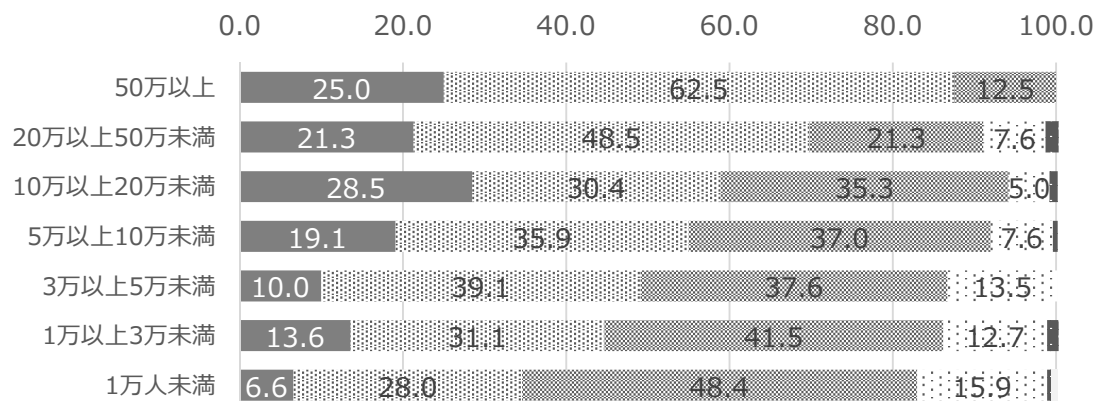
(4) 「本人の視点」を認知症施策にどのように位置付けているか

<全体集計>

項目	数	%
①自治体として認知症施策の基本方針として「本人の視点」を掲げ、事業を進めている	141	14.8%
②自治体の基本方針には掲げていないが、事業の実施においては「本人の視点」を重視して進めている	326	34.3%
③自治体の基本方針・事業ともに、まだ「本人の視点」を重視するには至っていないが、認知症施策担当部署内では、「本人の視点」を重視することへの共通理解が図られている	369	38.8%
④認知症施策担当部署内で、「本人の視点」を重視することへの共通理解は図られていない	105	11.1%
⑤その他	7	0.7%
無回答	2	0.2%
計	950	100.0%



<人口階級別>

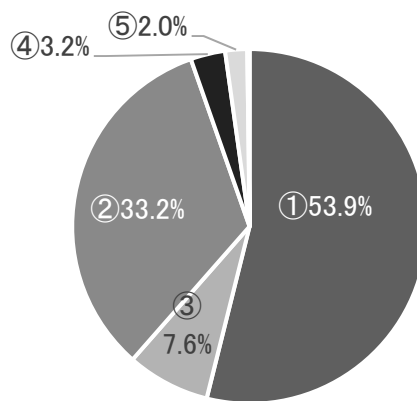


- 認知症施策の基本方針として「本人の視点」を掲げ、事業を進めている。
- ▨ 基本方針には掲げていないが、事業の実施においては「本人の視点」を重視して進めている。
- ▩ 基本方針・事業ともに、「本人の視点」重視には至っていないが、担当部署内では、共通理解が図られている。
- ∴ 認知症施策担当部署内で、「本人の視点」を重視することへの共通理解は図られていない。
- その他
- 無回答・無効

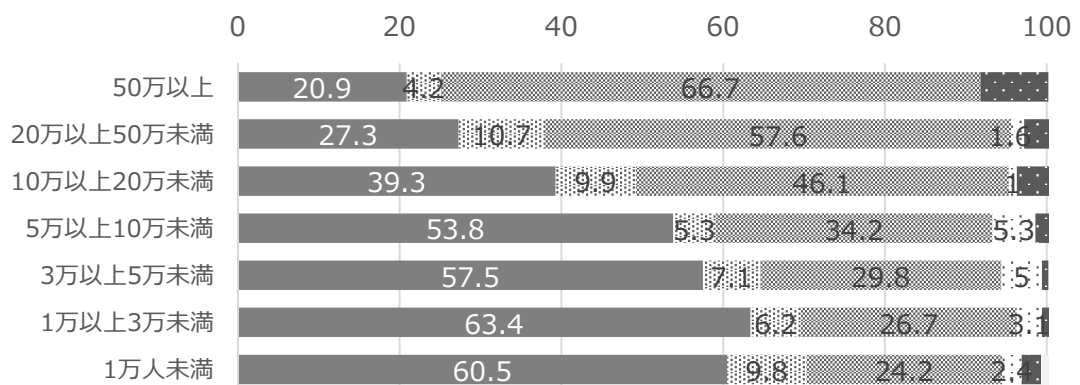
(5) 認知症施策担当者と自治体内（地元）の本人との関わり

<全体集計>

項目	数	%
①本人と直接関わり、本人の体験や本人が必要としていることを聞くようにしている	512	53.9%
②本人と直接関わることはあるが、本人の体験や本人が必要としていることはあまり聞いていない	72	7.6%
③本人の体験や本人が必要としていることを直接聞く機会はないが、関係者を通じて知るようになっている	315	33.2%
④地元の本人の体験や本人が必要としていることは、直接的にも間接的にも聞いていない	30	3.2%
⑤その他	19	2.0%
無回答	2	0.2%
計	950	100.0%



<人口階級別>



- 本人と直接関わり、本人の体験や必要としていることを聞くようにしている。
- ▨ 本人と直接関わることはあるが、本人の体験や必要としていることはあまり聞いていない。
- ▩ 本人の体験や必要としていることを直接聞く機会はないが、関係者を通じて知るようになっている。
- 地元の本人の体験や必要としていることは、直接的にも間接的にも聞いていない。
- その他
- 無回答・無効

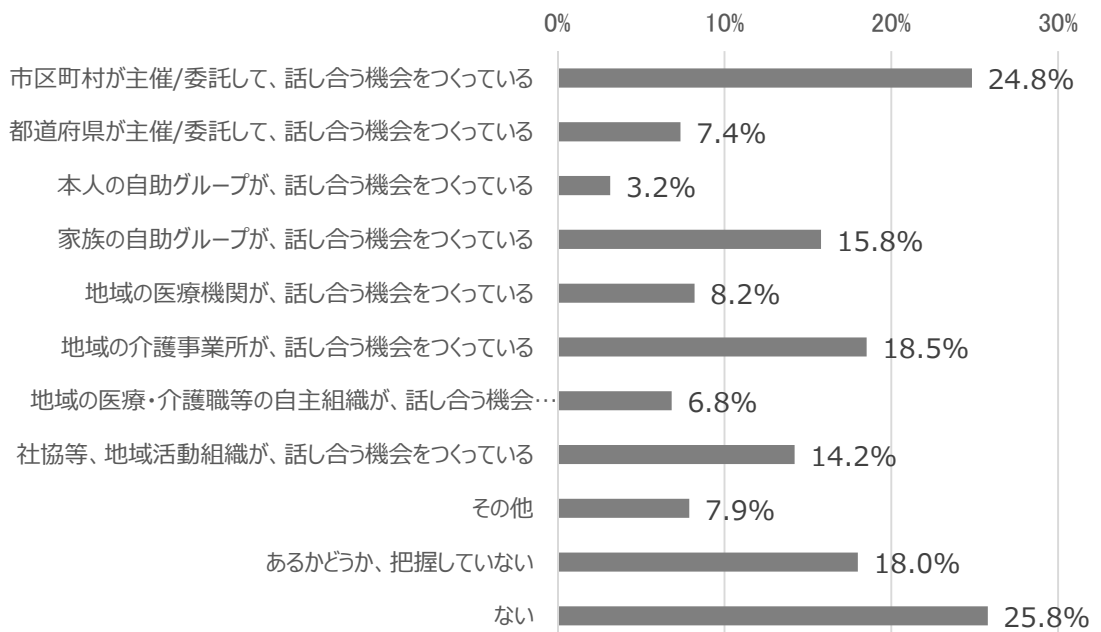
(6) 本人が集まり、本人同士で自らの体験や必要なことを話しあう機会があるか
(複数回答)

何らかの話し合いの機会があると回答した市区町村は、474 (49.9%) であった。話し合いの主催/実施者別に見た結果は以下の通りである。

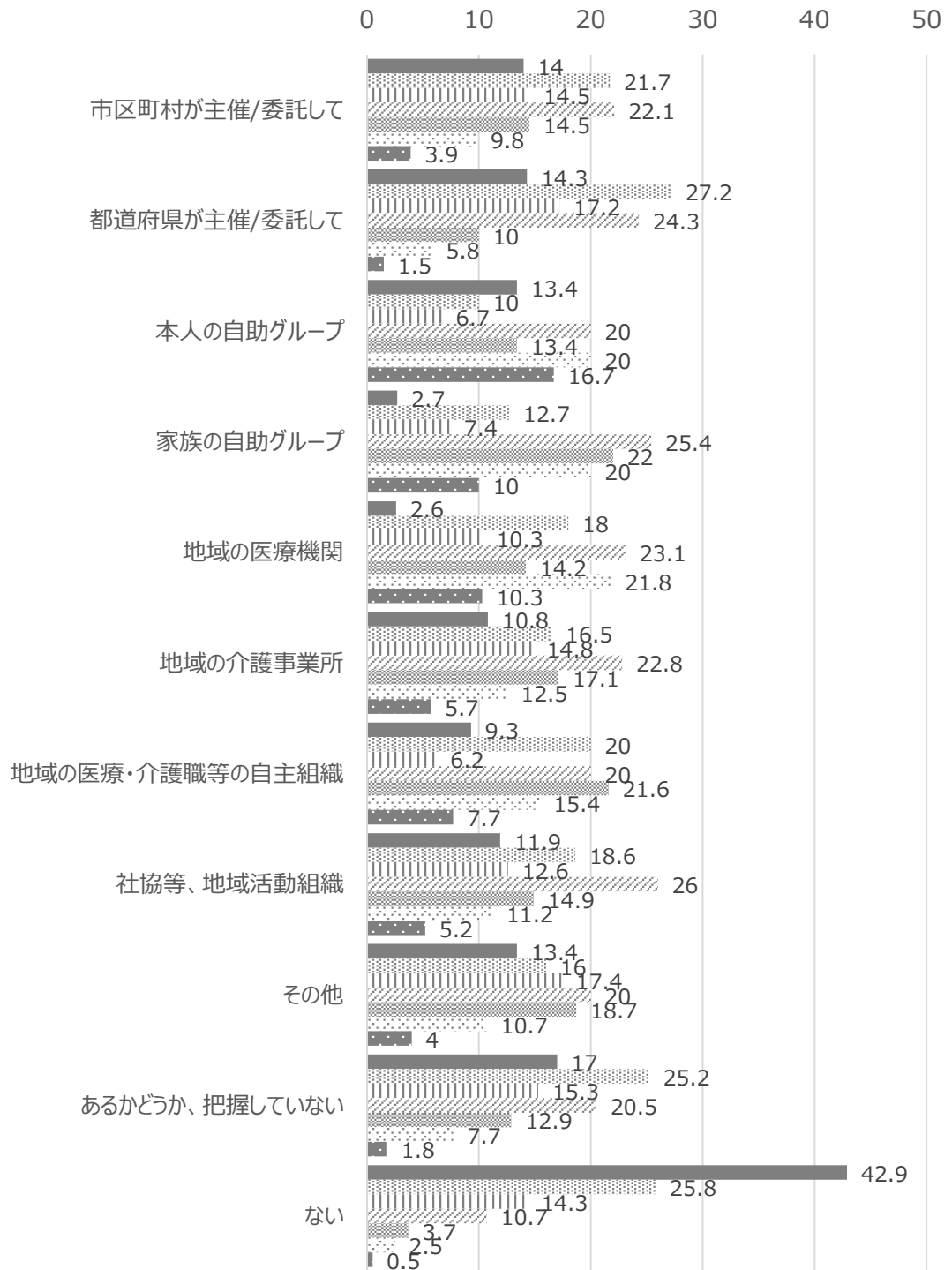
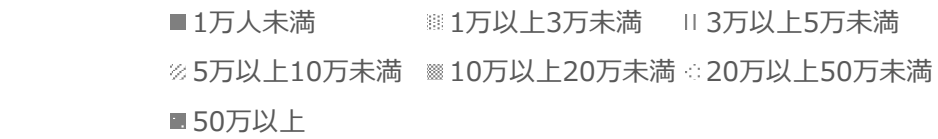
<全体集計>

N=950

項目	数	%
市区町村が主催/委託して、話し合う機会をつくっている	236	24.8%
都道府県が主催/委託して、話し合う機会をつくっている	70	7.4%
本人の自助グループが、話し合う機会をつくっている	30	3.2%
家族の自助グループが、話し合う機会をつくっている	150	15.8%
地域の医療機関が、話し合う機会をつくっている	78	8.2%
地域の介護事業所が、話し合う機会をつくっている	176	18.5%
地域の医療・介護職等の自主組織が、話し合う機会をつくっている	65	6.8%
社協等、地域活動組織が、話し合う機会をつくっている	135	14.2%
その他	75	7.9%
あるかどうか、把握していない	171	18.0%
ない	245	25.8%
未回答	60	6.3%



<人口階級別>

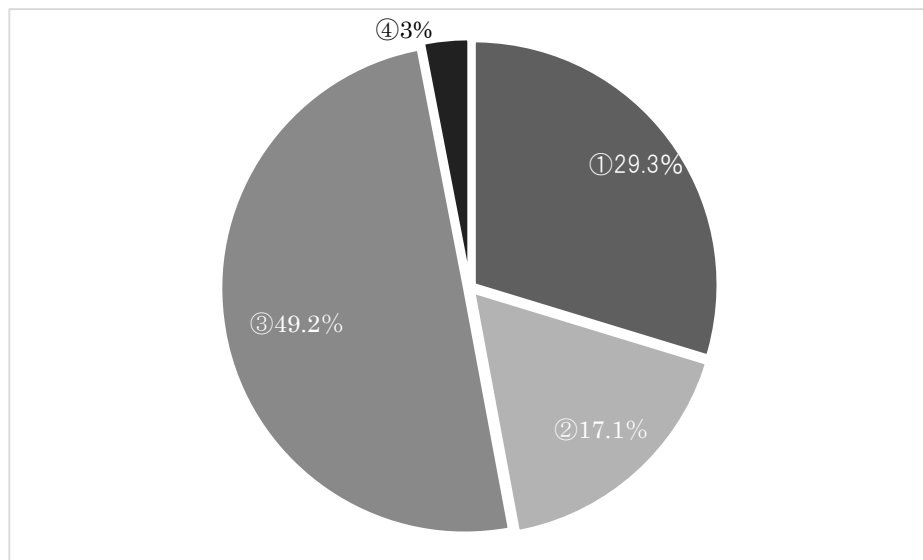


(7) 本人が集まり、本人同士で自らの体験や必要なことを話しあう機会に参加したことがあるか

<全体集計>

N=474 (本人同士で話し合う機会あり、と回答した市区町村数)

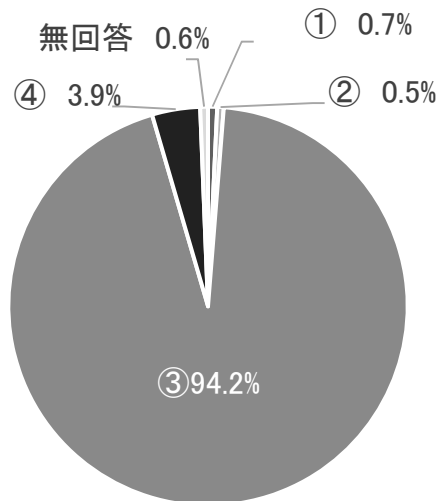
項目	数	%
①そうした機会には積極的に参加するようにしている	139	29.3%
②(積極的ではないが)参加したことはある	81	17.1%
③参加したことがない	233	49.2%
④その他	14	3.0%



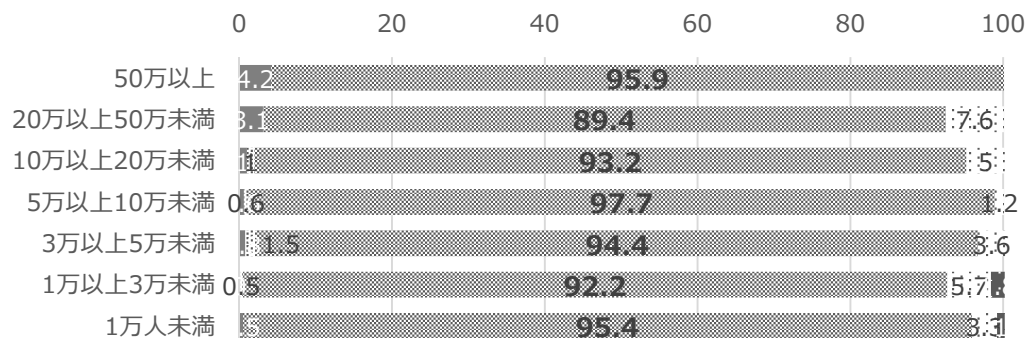
(8) 認知症施策等に関する行政の委員会や検討会等に、本人が参加しているか

<全体集計>

項目	数	%
実際に委員会等に入ってもらい、本人の意見を聴いて、施策や事業等に活かしている	7	0.7%
会議に本人を招いて話をしてもらったことはあるが、委員としての参画はない	5	0.5%
委員会等への本人の参画や本人を招いて話をしてもらうことは、まだない	895	94.2%
その他	37	3.9%
無回答	6	0.6%
計	950	100.0%



<人口階級別集計>



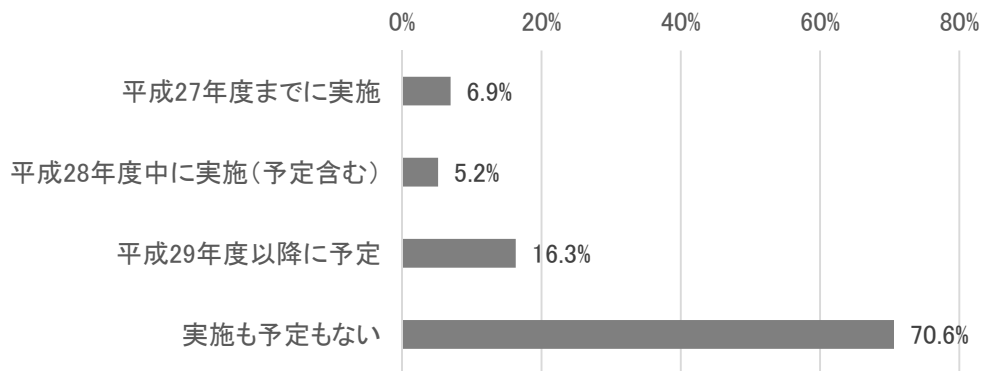
- 実際に委員会等に入ってもらい、本人の意見を聴いて、施策や事業等に活かしている。
- ▨ 会議に本人を招いて話をしてもらったことはあるが、委員としての参画はない。
- ▩ 委員会等への本人の参画や、本人を招いて話をしてもらうことは、まだない。
- ∴ その他
- 無回答・無効

(9) 本人の「体験」や本人が「必要としていること」を把握するための調査の実施、または実施予定があるか

<全体集計>

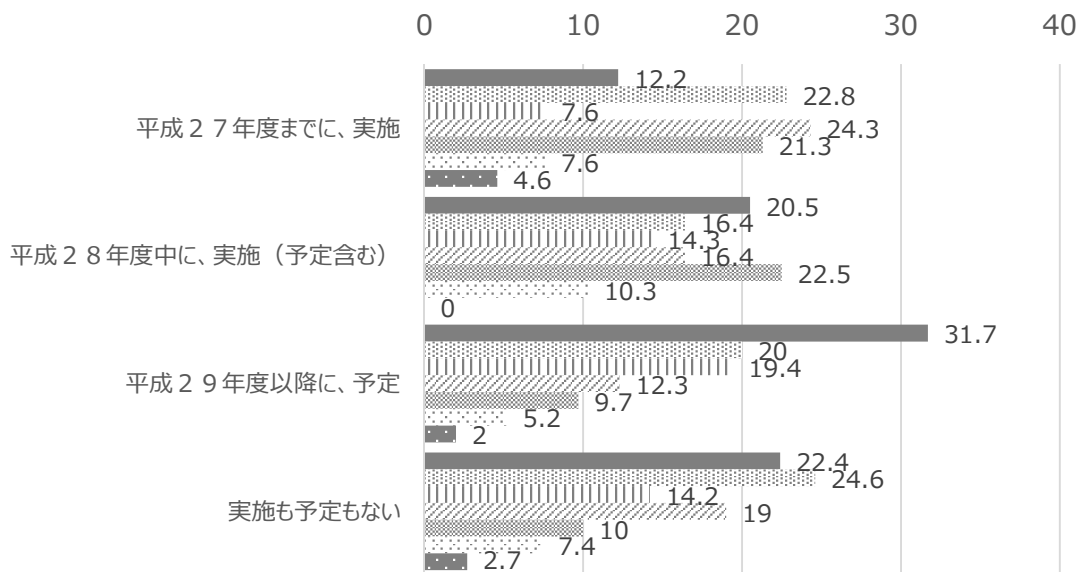
N=950

項目	数	%
平成27年度までに実施	66	6.9%
平成28年度中に実施(予定含む)	49	5.2%
平成29年度以降に予定	155	16.3%
実施も予定もない	671	70.6%
未回答	9	0.9%



<人口階級別集計>

■ 1万人未満 ▨ 1万以上3万未満 ▧ 3万以上5万未満 ▩ 5万以上10万未満
 ▦ 10万以上20万未満 ▤ 20万以上50万未満 ■ 50万以上



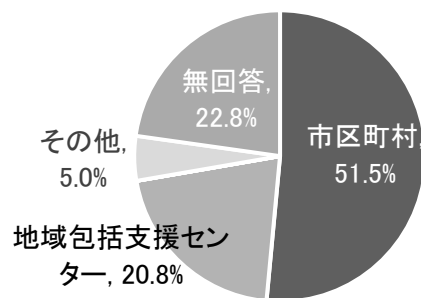
(10) これまでに実施した、または実施予定の本人調査について

<全体集計>

① 実施主体

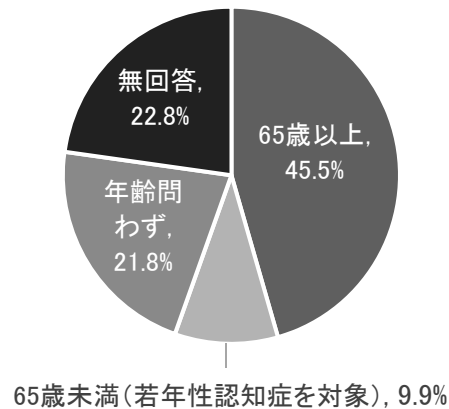
N=101 (すでに実施、あるいは予定している
回答の市区町村中、回答のあった市区町村)

項目	数	%
市区町村	52	51.5%
地域包括支援センター	21	20.8%
本人の自助組織	0	0.0%
家族の自助組織	0	0.0%
その他	5	5.0%
無回答・不明	37	22.8%
計	101	100.0%



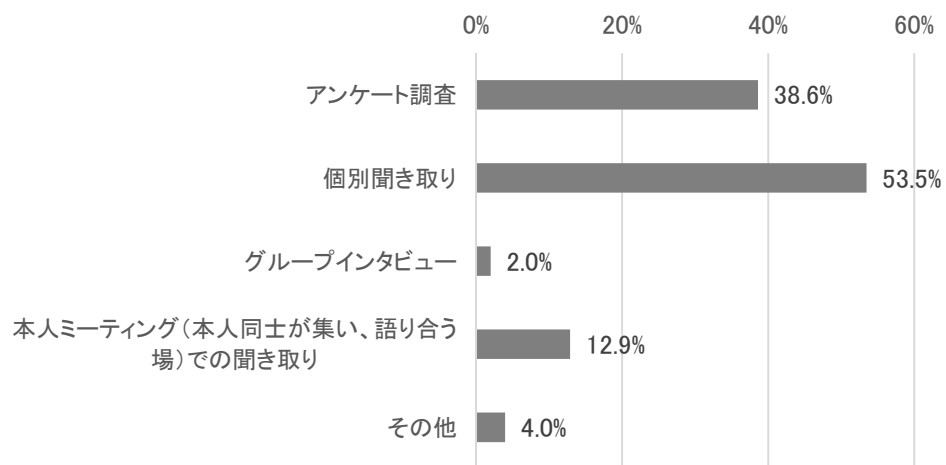
② 対象年齢

項目	数	%
65歳以上	46	45.5%
65歳未満 (若年性認知症を対象)	10	9.9%
年齢問わず	22	21.8%
無回答	23	22.8%
計	101	100.0%



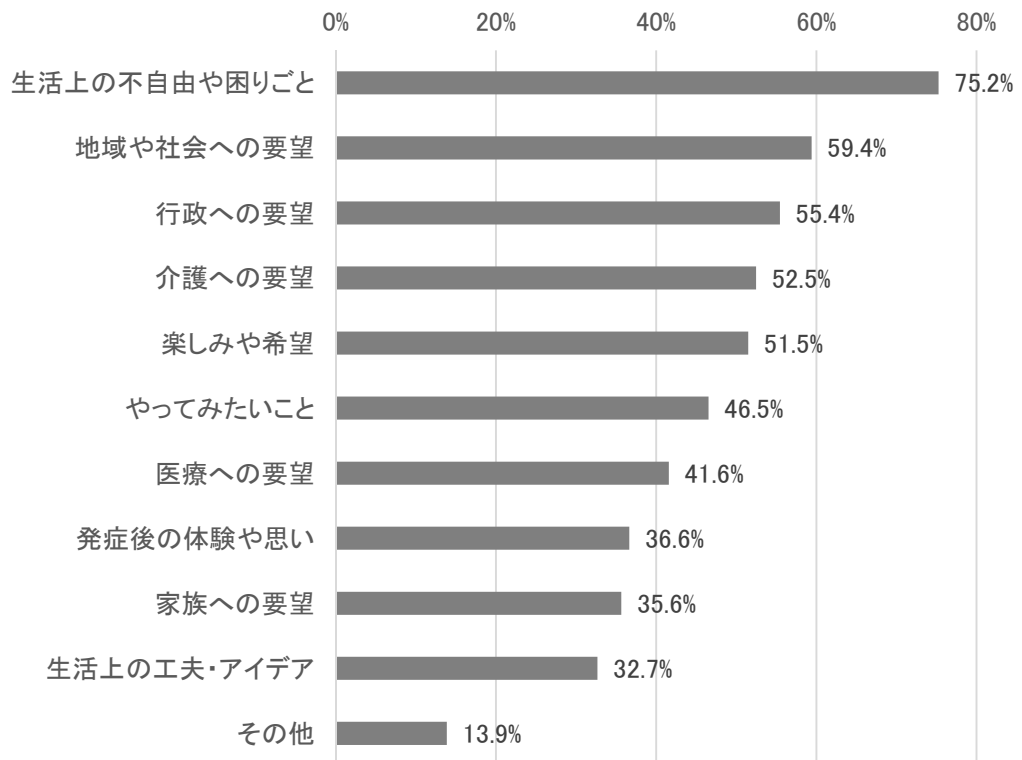
③実施方法（複数回答：N=101）

項目	数	%
アンケート調査	39	38.6%
個別聞き取り	54	53.5%
グループインタビュー	2	2.0%
本人ミーティング（本人同士が集い、語り合う場）での聞き取り	13	12.9%
その他	4	4.0%



③主な把握（調査）内容（複数回答：N=101）

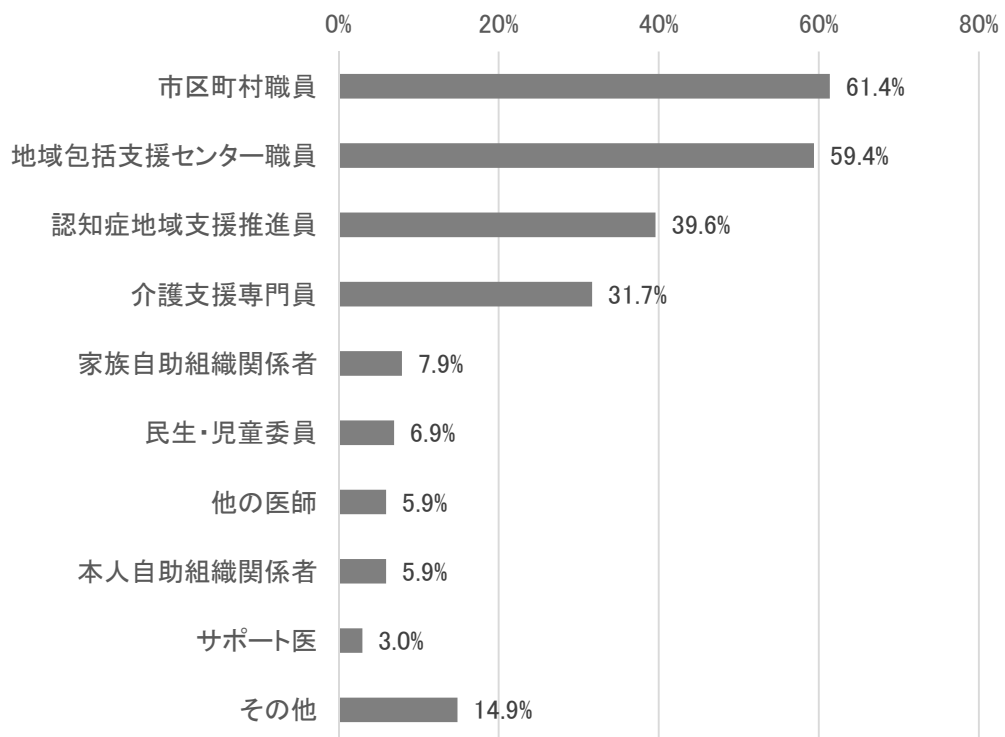
項目	数	%
生活上の不自由や困りごと	76	75.2%
地域や社会への要望	60	59.4%
行政への要望	56	55.4%
介護への要望	53	52.5%
楽しみや希望	52	51.5%
やってみたいこと	47	46.5%
医療への要望	42	41.6%
発症後の体験や思い	37	36.6%
家族への要望	36	35.6%
生活上の工夫・アイデア	33	32.7%
その他	14	13.9%



② 把握（調査）に関与した人の立場（複数回答：N=101）

N=101

項目	数	%
市区町村職員	62	61.4%
地域包括支援センター職員	60	59.4%
認知症地域支援推進員	40	39.6%
介護支援専門員	32	31.7%
家族自助組織関係者	8	7.9%
民生・児童委員	7	6.9%
他の医師	6	5.9%
本人自助組織関係者	6	5.9%
サポート医	3	3.0%
その他	15	14.9%

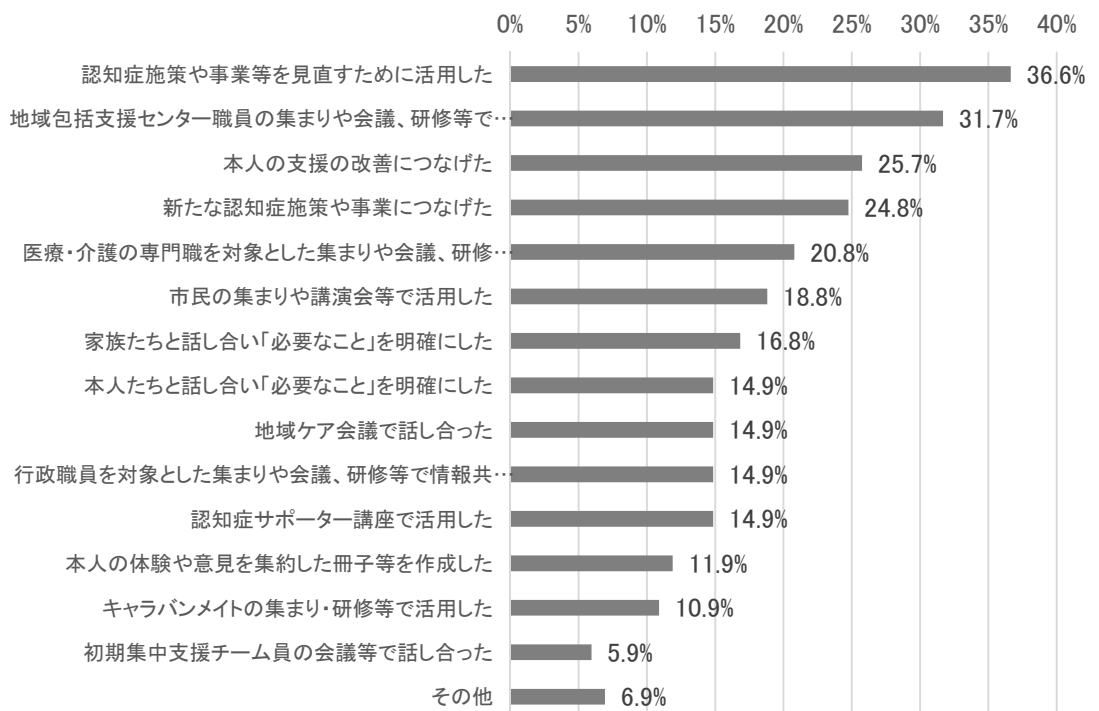


(11) 本人調査実施後の活かし方（複数回答）

<全体集計>

N=101

項目	数	%
認知症施策や事業等を見直すために活用した	37	36.6%
地域包括支援センター職員の集まりや会議、研修等で情報共有した	32	31.7%
本人の支援の改善につなげた	26	25.7%
新たな認知症施策や事業につなげた	25	24.8%
医療・介護の専門職を対象とした集まりや会議、研修等で情報共有した	21	20.8%
市民の集まりや講演会等で活用した	19	18.8%
家族たちと話し合い「必要なこと」を明確にした	17	16.8%
本人たちと話し合い「必要なこと」を明確にした	15	14.9%
地域ケア会議で話し合った	15	14.9%
行政職員を対象とした集まりや会議、研修等で情報共有した	15	14.9%
認知症サポーター講座で活用した	15	14.9%
本人の体験や意見を集約した冊子等を作成した	12	11.9%
キャラバンメイトの集まり・研修等で活用した	11	10.9%
初期集中支援チーム員の会議等で話し合った	6	5.9%
その他	7	6.9%

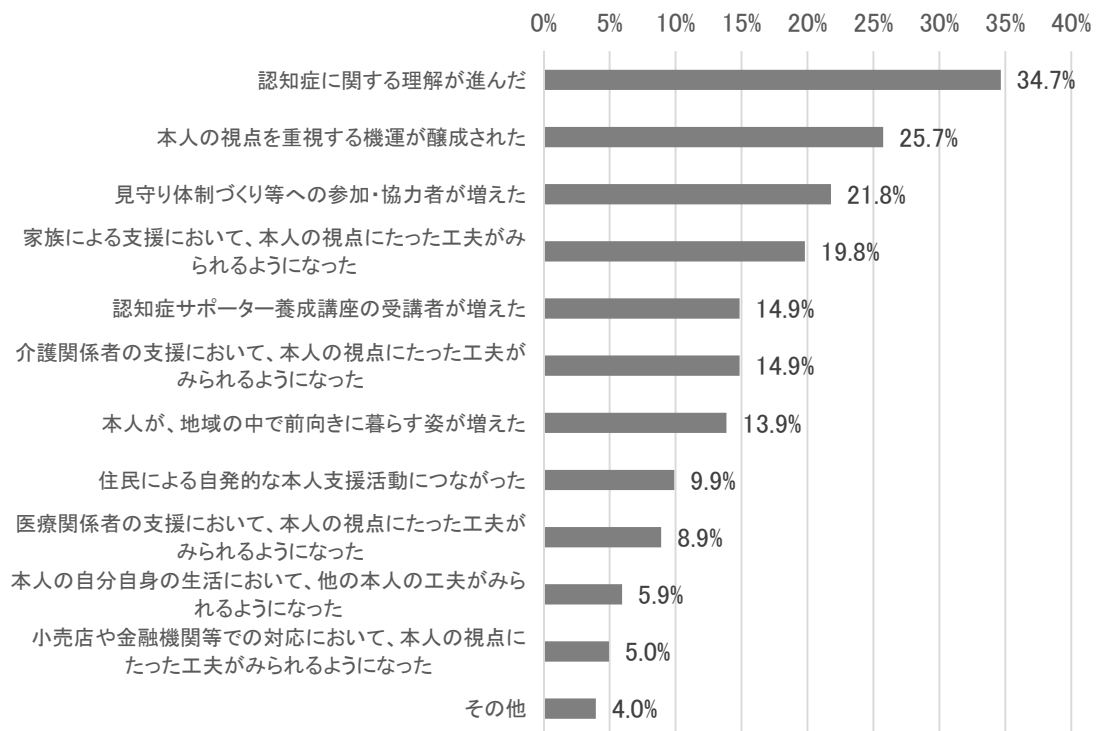


(12) 市民や支援関係者、認知症の本人・家族の変化（複数回答）

<全体集計>

N=101

項目	数	%
認知症に関する理解が進んだ	35	34.7%
本人の視点を重視する機運が醸成された	26	25.7%
見守り体制づくり等への参加・協力者が増えた	22	21.8%
家族による支援において、本人の視点にたった工夫がみられるようになった	20	19.8%
認知症サポーター養成講座の受講者が増えた	15	14.9%
介護関係者の支援において、本人の視点にたった工夫がみられるようになった	15	14.9%
本人が、地域の中で前向きに暮らす姿が増えた	14	13.9%
住民による自発的な本人支援活動につながった	10	9.9%
医療関係者の支援において、本人の視点にたった工夫がみられるようになった	9	8.9%
本人の自分自身の生活において、他の本人の工夫がみられるようになった	6	5.9%
小売店や金融機関等での対応において、本人の視点にたった工夫がみられるようになった	5	5.0%
その他	4	4.0%

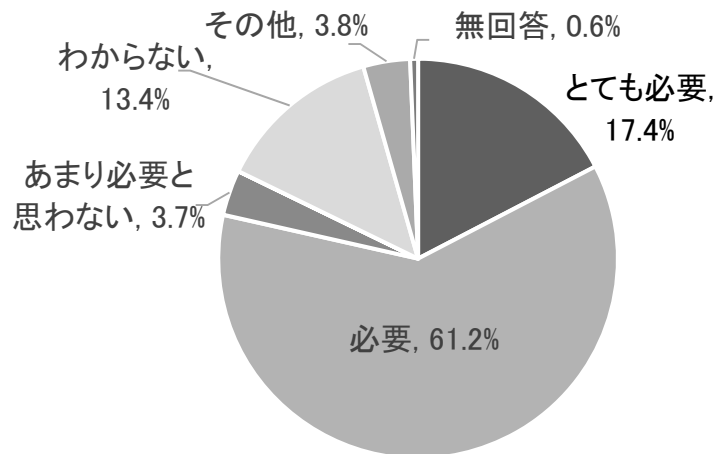


(13) 調査や活かす過程で課題になったこと (記述回答)

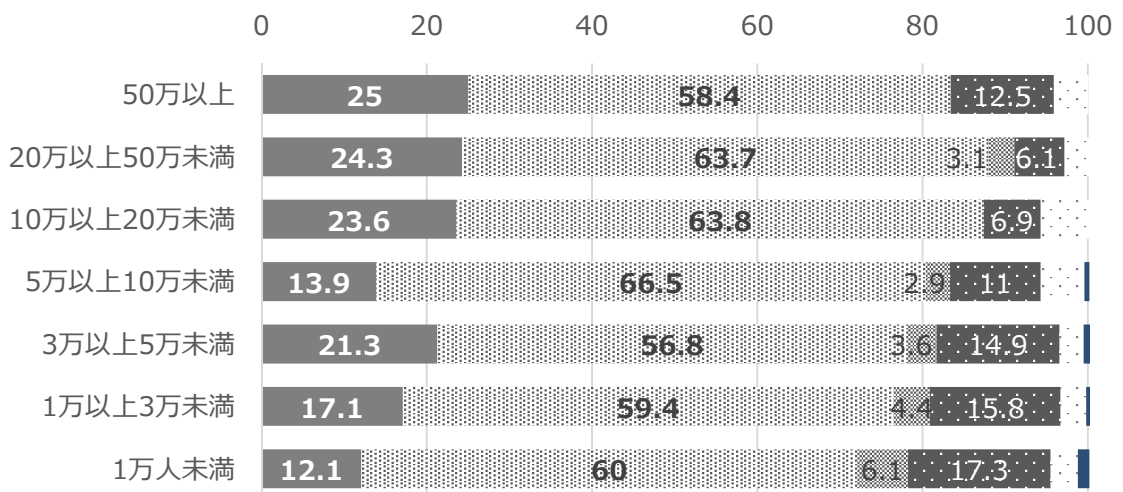
記 述
認知症に関する偏見が残る部分も多く、福祉につながりにくいこともある。
日常生活圏域ニズ調査を毎年実施して、高齢者の状況把握に努めているところですが、どの年度の調査でも30%~40%程は回収できていない状況にあります。きちんと回答して、その結果、身体機能等の低下が見られると判定される方より、むしろ、未回収の方の中にこそ、日常生活に深刻な問題を抱えている方が存在しているのではと危惧しています。
本人や家族の生の声を重要視したため、集計にかかる業務量が多く、分析が不十分であったと感じている。自由記載ではなく、選択肢での回答にするなど、調査の有効な方法についての事例を知りたい。
調査対象者が少数である。
本人調査に当たり、分かり易い設問を考えなければならない。
今後本人の意向を事業に反映していくため、不明。
本人から話を聞き出すことが難しいため、家族会や関係機関からニズを把握するようにしている。
本人自身が萎縮して語らず、結局家族の意向優先となる場合がある。 本人の意向を家族や周囲が認められない場合があり、調整に苦慮した。(例:本人は老人会の旅行に行きたいが、周りは面倒見切れないという)
69歳以下の認知症者の調査を実施しているが、通所サービスは高齢の利用者と一緒のため、若年の方が利用を嫌がるケースが多い。若年者専用の施設又は日があるとよい。若年者では障害者年金や医療制度について介護者や医療機関等で知らずにいることが多く、利用できずにいる。
本人、家族からの十分な理解と同意が得られない。
地域づくりはすぐに成果が出ないので様々な取組が必要となる。
介護保険給付だけでは充足できないサービスも求められている。介護保険サービスだけでなく、インフォーマルサービス等細やかな支援を開発したり、充足させていく必要がある。家族介護者は8割の方が介護負担を感じている。家族の介護負担が軽減できる家族支援も必要である。
関わりを持つ担当者レベルでの学習が必要。そしてその学習を共有し、課題の整理が必要。更に町民への普及啓発の推進や計画に生かすことが大切である。
1人暮らしでもあり、家族の方は遠方で心配されている。本人の意思の尊重と家族の意見の違いをどう受け止めて支援していくか、これからも課題である。
認知症の方をささえる家族の中には、本人を外に出したくない、見られたくない、相談をしにくいといった方々がおられることがわかった。
・本人の思いは具体的に聞けるが、困っていることが言えない、分からない、ために、本人視点に立った支援をどうすべきか悩む。また周り(地域)からの情報は多く入ってくるため、本人のできないことは分かるが、本人は生活で困っていないため、できないことと困っていないことの溝(?)を埋めることが支援者として必要なか迷うことも課題。 ・在宅での生活を望む方にその生活を維持するためには支援なくしては在宅での生活が維持できないことが予測されるため悩みながら関わっている。 ・本人の視点重視で支援しようとしても家族がいる方で家族が無関心な場合、地域の支援がなかなか得られないことが課題。

(14) 施策や事業を進めていく上で、本人調査が必要だと思うか
 <全体集計>

項目	数	%
とても必要	165	17.4%
必要	581	61.2%
あまり必要と思わない	35	3.7%
全く必要と思わない	0	0.0%
わからない	127	13.4%
その他	36	3.8%
無回答	6	0.6%
計	950	100.0%



<人口階級別集計>



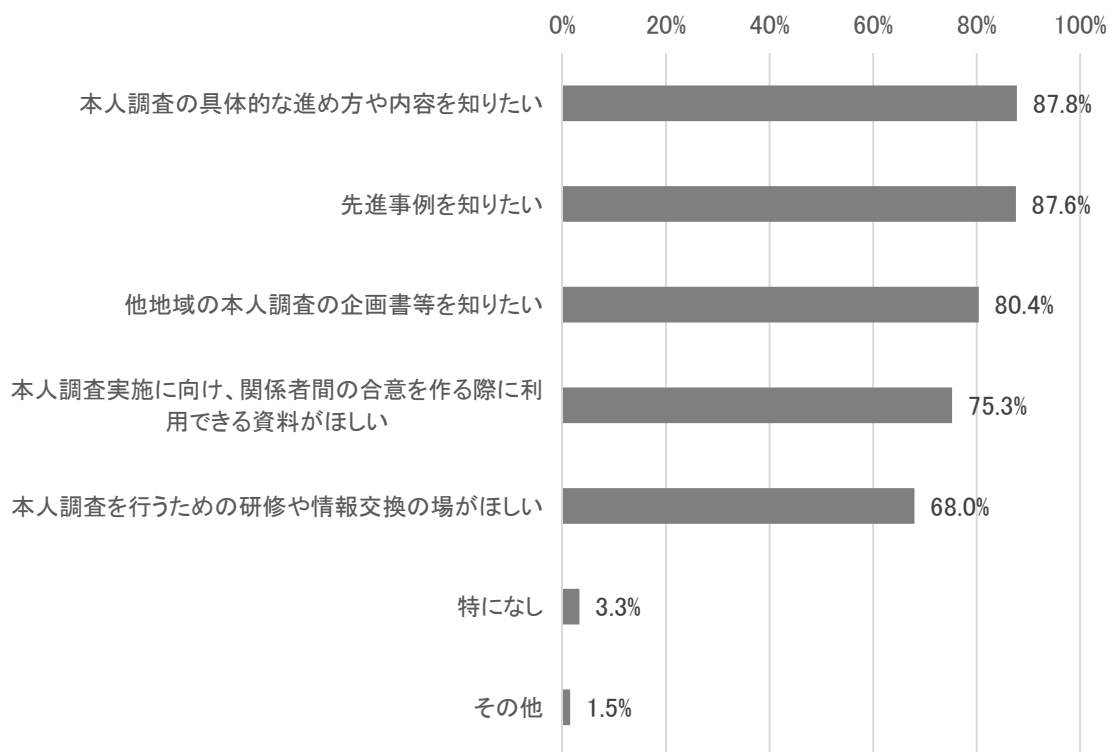
■とても必要 ■必要 ■あまり必要と思わない ■全く必要と思わない ■わからない ■その他 ■無回答・無効

(15) 本人調査について、知りたいことや必要なこと（複数回答）

<全体集計>

N=950

項目	数	%
本人調査の具体的な進め方や内容を知りたい	834	87.8%
先進事例を知りたい	832	87.6%
他地域の本人調査の企画書等を知りたい	764	80.4%
本人調査実施に向け、関係者間の合意を作る際に利用できる資料がほしい	715	75.3%
本人調査を行うための研修や情報交換の場がほしい	646	68.0%
特になし	31	3.3%
その他	14	1.5%



(15) 本人の意志の尊重や本人の視点重視を進めていくために、取り組んでいること、取り組もうとしていること(記述回答)

「本人の意志の尊重や本人の視点重視を進めていくために、取り組んでいること、取り組もうとしていること」の問いに対し、339の回答が寄せられた。これらの回答を意味内容に応じて分類した結果、以下の19項目に分類された。

- (1) 行政担当者・行政内部での本人視点の重視、認識の共有
- (2) 本人視点を重視した施策の企画・立案
- (3) 認知症施策の委員会・会議等への本人の参画
- (4) 本人の視点・声を重視した生活実態・ニーズの把握(本人調査)
- (5) 本人が声を出す・発信する(聞く)場づくりやその環境づくり
- (6) 本人同士が集まり話し合う場作り
- (7) 若年性認知症の人同士が集まり話し合う場作り
- (8) 本人が地域で活躍する機会づくり
- (9) 本人視点や声を重視した啓発活動や認知症サポーター養成講座
- (10) 本人の視点や声を重視した認知症ケアパス
- (11) 本人の視点・声を重視した地域ケア会議
- (12) 本人の視点・声を重視した認知症初期集中支援事業
- (13) 本人の視点・声を重視した認知症地域支援推進員活動
- (14) 本人の視点、声を重視した認知症カフェ
- (15) 家族会等の取組みにおける本人視点の重視に関して
- (16) 本人の視点・声を重視したSOSネットワークづくり
- (17) 本人視点・声を重視した相談・個別支援
- (18) 本人の視点・声を重視した専門スタッフの対応力向上
- (19) 先行事例・情報の共有

市区町村の認知症施策の担当者が、施策の企画立案、実態やニーズ把握、そして認知症施策全般の多様な事業において認知症の人の視点を重視しながら具体的な動きをとっている、あるいは取り組もうとしていることが確認された(次ページ以降の網かけ欄を参照)。

一方で、本人視点の重視の重要さは認識しているが、地域や関係者の認識がまだそこまでにはいたっていない、あるいは本人視点重視での取り組む上での具体策が分からない、等の課題も示されていた(次ページ以降の白欄を参照)。

なお、本人視点で調査や事業を展開した先進例を知りたいといった声も寄せられていた(19項目目を参照)。

網かけ欄：すでに取り組んでいること(予定含む) 白欄：取り組もうとしていること
 ことや現状の課題

(1) 行政担当者・行政内部での本人視点の重視、認識の共有
自治体内の認知症支援に係る関係者で、認知症支援の現状・課題・方向性等を深める会議を始めている。
この調査で、本人視点の重視、調査の重要性を再認識しました。推進員間で共通認識を持ちたいと思います。
事業に取り組むにあたって、本人の視点に合ったものにしていこうと考えている。また、今後は、認知症カフェなど身近に本人家族が参加できるものから、本人の視点を取り入れた事業の展開も検討している。
認知症の方自身の意見の尊重はとても大切だと思いますが、支援者が家族の意向重視となっている傾向があるので、本人同士が集まり、意見を集約できる機会をもち、施策を考えていかなければいけないと思いました。
若年性認知症の活動に参加したり、本人と話す機会はこれまでもあるが、家族の意見ばかりを聞いて本人たちの意見を具体的に調査する体制ではなかったため、今後は意識して計画的に行う機会を作っていきたいと思います。
本調査に回答することで、本人の意思や視点を調査し施策に活かしていくことの必要性を感じたので、今後の事業として検討していきたい。
他部署との連携をはかり、他施策で認知症の人やその家族にメリットがあるものについて情報を整理し、関係機関に周知をはかったりウェブサイトに掲載できるよう今後取り組みたい。
認知症に関する理解を深めるための担当者レベルでの学習を深める、その学習の共有が必要
認知症に講演会などはあるが、行政職として取り組むべき課題等に関する研修会を充実して欲しい。
(2) 本人視点を重視した施策の企画・立案
今年度、市で「総活躍のまちづくりプロジェクト」という事業を実施しており、その重要な柱として認知症の方も「総活躍分の1人」となれるよう、本人視点に立ったまちづくりを進めています。また、その活躍する本人を支援する方たちも「総活躍分の1人」として、市民誰もが活躍できるまちの実現を目指しています。
早期発見・早期診断推進事業(認知症疾患医療センターのアウトリーチチームとの訪問)、認知症初期集中支援事業の実施に際して、本人視点のアプローチを重視している。かかわる包括職員にも事業(現場)や研修を通して伝えている。
平成25年度より認知症の方の権利擁護を強化していくことを目的に、見守りボランティアや生活支援員の養成を市民後見推進事業のなかで実施している。
本人の意思を重視した支援には、財源・社会資源およびマンパワーが必要と考えるも、当町にはそのどれもが限られていることから、本人の意思を100%叶える事ができないのが現状である。そのような環境の中でできることとして、住民のマンパワーを高めることが必要と考え事業展開を計画している。
今後、認知症の人やその家族が自らの言葉で語る会議を開催し、認知症の人やその家族の視点を認知症施策の企画・立案や評価に反映していく予定。
平成28年度より地域包括支援センター(認知症地域支援推進員)による、包括圏域内の認知症者を把握し見守りや、支援(おしごとカフェ等)を行っている。平成29年度からは、把握した認知症の方で、支援が難しいような方には、認知症初期集中支援チームへつなぐような仕組みづくりを考えている。また、成年後見人制度や若年性認知症などの整備が今後必要であるため、長期的な整備計画を立てる必要があると考えている。
事業に取り組むにあたって、本人の視点に合ったものにしていこうと考えている。また、今後は、認知症カフェなど身近に本人家族が参加できるものから、本人の視点を取り入れた事業の展開も検討している。
本人の意思を尊重するためには、本人が意思決定ができる機会を増やし、環境を整えることが重要であるとする。そのためには、早期発見・早期治療で意思決定できる期間を増やし安定したものにすること、家族や地域住民など多くの人が認知症への正しい理解と対応を知り本人を支えられるよう施策推進をしていくことが必要である。
現在は、認知症への理解を住民に深めてもらう事業に軸足を置いて実施しており、本人の視点重視の施策取り組みは、次年度以降、認知症地域支援推進員が配置された段階で検討したいと考えている。

本人や家族の思いや意見を施策に反映できるような場をつくっていききたいと思っています。
今後の生活支援や新たな施策を検討する上でも総合相談等様々な場面で、本人またはその家族から話を伺うように努めたい。
本人からの相談内容や、意見を集約できる仕組み作りを今後行いたい。
急性憎悪期に至る前に支援できる仕組みを町内の関係機関と作っていくことが必要だと感じています。
認知症の早期発見、早期対応で本人の思いを残された力があるうちに支援する事で、本人が自分らしく地域で生活し続ける見守り(地域づくり)をしていきたい。
(3) 認知症施策の委員会・会議等への本人の参画
本市で実施している認知症対策推進会議においては、委員として本人に参加いただいている。また、認知症ケアパス作成の際にも、ワーキングメンバーとして医療・介護関係者のほかに本人も参加いただき、本人視点を反映したケアパスを作成した。
市の認知症施策検討委員会(仮称・未設置)への出席を検討する。
認知症に関する施策を検討する会議に、認知症本人や家族に参加いただき、生活実態や要望等、ご意見を言える場を作りたいと考えている。
認知症高齢者等を支える基盤づくり検討会」を医療・保健・福祉・介護関係者で年6回開催し、認知症の方が地域で暮らすための情報共有及び検討を行っている。まずは、その場に家族や本人が参加するよう検討することは可能である。
認知症の方との関わりの深い民間の専門職や家族の意見を伺いながら認知症施策を展開している。今後、この会議に認知症本人の参加を検討する。
今後行政で行う認知症施策推進検討会等に、できる限りご参加いただけるよう働きかけていきたい。
認知症支援について検討する会議の中で、当事者の思いや言葉を伝えてもらう機会を作ったが、本人ではなく、担当ケアマネから伝えてもらった。
高齢者福祉計画及び介護保険事業計画の策定において、家族会の参画をお願いしている。
認知症対策検討会への家族会の代表の参加。
家族の意見を取り入れる取組みを始めたばかりであるため、今後、本人の意見を取り組むことを進めていきたい。
行政主導の会議等の場へ本人やその家族の参画の場はないが、認知症ケアパス養成講座の一部にて家族の声を聞いていただく機会を設けているが、必ず参加いただけるとは限らない。
本人の視点から事業や施策を考える事は必要だと思うが、事業の企画や参画に参加していただくことは困難な場合が多い
(4) 本人の視点・声を重視した生活実態・ニーズの把握(本人調査)
市内の本人会議をヒアリングしてニーズを把握している。
医療機関と連携した本人ミーティングを開催
本人ミーティングを今年初めて開催。不安の中で取組み始めたが、実施する中で出てくるものがあり、当事者からヒントや勇気をもらった。
地域連携型認知症疾患医療センター及び大学等と連携し、まずは診断を受けた後の本人ミーティング等の場を作り、その場に市も関わることで本人の声を聞く機会を持ちたいと考えており、現在調整中である。
認知症当事者の集いの開催(予定)。認知症当事者の声の反映、市認知症ビジョンへの反映、認知症ケアパス改訂内容への反映を予定。
認知症施策への本人の参加を検討中である。本人の意思の尊重などインビュー調査を行い、新たな社会資源や社会参加の場づくり、働く場の創出等を検討していきたいと考えています。

<p>(今年度、実施予定)認知症の人と家族にアンケート調査をおこなう。アンケート結果をもとに、認知症地域支援推進員及び地域包括支援センターが中心となって地域7会議や勉強会等を展開し、関係機関や関係団体(町内会、老人会等)とともに地域における課題を分析し、「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」を推進する。</p>
<p>県若年認知症ネットワーク会議において、鳥取県若年認知症実態調査が行われ、それに協力している。先般一次調査は終了し今後二次調査で本人から聞き取りも実施される予定がある。</p>
<p>若年認知症の方の調査結果をもとに、若年認知症の方等が役割を持ち活躍できる居場所として「仕事の間」への支援を行っている。</p>
<p>今年度、高齢者ニーズ調査を実施し、現在集計中。対象者に認知症の方も含まれており、生活の様子や意向を把握できるようにしています。結果を町の認知症施策に活かしていく予定です。</p>
<p>各生活圏域で関係専門職とのアクションミーティングを実施し、その中で、本人や家族の意見を聞くことが大事だ、必要だと関係者から声があがる中で、本人の思いを聞いていきたいと考えている。</p>
<p>現行サービス利用者の実態把握(訪問等)で、当事者と家族の意思等を確認している</p>
<p>認知症地域支援推進員を全地域包括支援センターに配配置し、地域の実態を把握するよう努めている</p>
<p>当市では、民間有志で活動している推進組織に行政の認知症担当者が認知症地域支援推進員と一緒に委員として参加・支援しています。委員として参加することで本人及び家族の思いやご意見の聴取に努めています。</p>
<p>予防教室の参加者からどんなサービスが必要か聞き取りをしている。</p>
<p>介護予防ケアマネジメントにおいて本人の意志を確認、尊重して個別ケースを中心に展開していく</p>
<p>まだ、数人のケースにしか聞き取りができないが、まずは本人が意思を発信できるよう、周囲の理解を促す取り組みが必要と思う。</p>
<p>対象を認知症の本人に特化したものではないが、介護保険事業計画の見直しに際し、認知症に関する内容を含むアンケート調査を実施している。</p>
<p>町内精神科医療機関では、認知症治療に力を入れていますが、物忘れ相談の際は、相談の中で利用者の思いを聞き寄り添い、一緒に来られたご家族の思いもきくようにしています。</p>
<p>介護の認定調査の際、本人の状態や状況を把握するよう努めている。</p>
<p>認知症カフェや認知症の参加者に、地域の中でどんなサービス・しくみがあるといいか聞き取り。</p>
<p>当町に認知症カフェ等の必要なサービスの需要がどの程度あるのか、本人や家族、事業所から個別の聞き取り調査を実施している。</p>
<p>学習会、家族会、認知症カフェなど、本人および介護者の集いの場に参加し、現状把握している。</p>
<p>若年性認知症の方や家族の集いを行っているが、その集いの中で本人の意向や思いを確認。</p>
<p>若年性認知症の人と家族の交流会を実施する中で、本人の意思、視点等に関する内容を把握するように努めています。その中で把握したものについては、関係機関等にフィードバックできるように努力しています。</p>
<p>家族会へ参加し、情報収集をおこなっている。</p>
<p>個別のケースに対し、情報提供を受けた場合は個別訪問を実施し本人の意見等を傾聴し、予防や日常生活に必要なことを相談し援助している。今年度中にマイワート(意思表示帳のようなもの)の完成に向けて、地域7会議の場や地元総合病院とも連携し、検討中である。</p>
<p>認知症の人が自分の思いや希望を記載できる「(〇〇市)カズ手帳」の普及をはかり、本人が暮らす経過にそって情報・ニーズを共有。</p>
<p>今後、ご本人やその家族の方のニーズを把握し、町の認知症施策の推進に取り組みたいと考えている。</p>
<p>今後は本人調査を行い、その結果を施策やサービスなどにつなげていくことは大変重要なことだと考えています。</p>

医療にも介護にもつながっていない潜在的な認知症の住民が多々存在しているので、そうした方々の拾い上げや適切な治療やサービスにつながるように地域住民や医療機関などと連携して把握し、支援に取り組みたい。
物忘れ健診など、ご本人と直接会ってお話する機会を大切に、ご本人やご家族のニーズを把握し、今後の事業実施に反映していく。
平成29年度に認知症総合支援事業実施要綱を策定し、認知症初期集中支援事業や認知症地域支援・ケア向上事業を実施していく予定です。これらの事業を実施していく中で、本人調査は大切であると思いますので、今後は、具体的な先進事例などの検討が必要と考えています。
個別聞き取りやアンケートなどの実施。内容や対象の把握方法など詳細については今後検討していく。
聞き取り等によるニーズ調査を行い、事業に反映させていきたいと考えている。
家族会や認知症カフェへ足を運び、現状に対する思いを聴きつつ、本人や家族の希望がどういったところにあるかを把握したうえで、施策化していければと考えている。
今後のとり組みとして、本人や家族が集える場（例えば認知症カフェ等）を立ち上げて、本音で話せて、行政としても直接思いを聴ける場を設けたい。
認知症カフェに参加し、ご本人様との会話を通じて、意向を伺うことはありますが、具体的に意見としてまとめる作業は実施していないため、今後検討していきたい。
認知症カフェでの様子や意見を参考にしたいと思っている。
グループホームやデイサービスを利用している認知症のある方に対して、必要と考えるサービスについてアンケートや聞き取りを実施したいと考えています。
今後、アンケート等を取ることで、ご本人が望んでいる事業を稲敷市認知症総合支援事業協議会において、検討し取り組んでいきたいと考えています。
まず当事者の把握が必要。当事者の把握は、介護保険サービスおよび相談で把握しているのが現状である。そのため、認知症の人の発症からサービス利用までの空白期間時にどのように把握するかが課題と考えている。そのため、他市町村や県担当者等に確認し情報収集をしていく。
当市においては、郵送方式で日常生活圏ニーズ調査を実施していますが、どの年度の調査でも30%~40%程は回収できていない状況にあります。きちんと回答して、その結果、身体機能等の低下が見られると判定される方より、むしろ、未回収の方の中にこそ、日常生活に深刻な問題を抱えている方が存在しているのではと危惧しています。今後、在宅介護支援センターなどの協力を得ながら、こういった未回収の方に対する追跡調査などを行っていきたくと考えています。
今後は、自治体内の本人が話したり、役割を持って活躍できる場をつくりたいと考えているため、本人のニーズを把握する必要がある。
認知症本人調査の有効性が把握できた段階で、先進事例等に倣って調査等を実施し、対策を検討したい。
村は、各種保健活動を通じて、保健師が認知症を患う前からの生き方を把握しているので、認知症の早期発見・治療・サービス利用・家族支援・関係機関への情報提供などに支援を行っている。病気をみるのではなく、その人の生き方を知り、対応するようにしている。しかし、世代交代になると、本人調査も必要なのかと考えている。
地域包括支援センターで訪問した際に、本人や家族の状況や意志等を確認しているが、あくまでも1ケースとしての状況確認であり、認知症施策に特化した調査はしていない。本人の意思や視点を尊重することは大切だと思うが、現状としては対応しきれていない。
現在は地域支援推進員が中心となって相談業務を行ったり、認知症カフェに関わる中で直接本人と話しをして認知症の方の思いを汲み取るようにしている。そのニーズを蓄積し、今後の事業に反映していきたいと考えている。
認知症個別事例の整理から町の課題を考える。事例のまとめと共有化が必要。
個別に相談のあった方には面接をしているが、個別での対応に終わっている。
本人の意向等は現在個別に相談を受け訪問し聞き取り支援をしているが、本人調査としての明確な位置づけ・調査票の作成はできていない。

本人への聞き取りは、一部しか行えていません。現在は、認知症の家族の会を立ち上げ、家族の立場からの意見や要望などを聞いています。政策に反映できるまでには至っていませんが、今後も積み重ねていきたいと考えています。
個々のケース対応の際には、本人の思いを聴き確認するように心掛けているが、今後、認知症対策を行う上で認知症本人の意見が生かされる取り組みをどのように取り入れていくかは未定で関係者が具体策を学ぶことからである。
本人の意思の尊重・本人生育・生活歴が、認知症の方を支援していくうえで重要であるということは、市が中心に取組んだ研修会や医療連携等における症例検討会等で認識はしているが、「調査」という形式が、必ずしも必要であるということに繋がらないと今は感じており、当面は今まで取組んできた方法で施策を考えていくと思います。
認知症の人を含め支援を必要とする人が何を求めているかを把握することは、重要な事と考えている。
元気な時から、本人の意思をあらかじめ把握する方法がないか関係機関と協議する
より必要とされる支援を検討し施策に反映させるために、本人調査に取り組みたいが、認知症の本人をどこから把握し実施すればいいのか、まず第一歩が分からない。
区内の本人の把握を進める必要があると思う。
カンガアウトしている本人の把握ができていない。
(5) 本人が声を出す・発信する(聞く)場づくりやその環境づくり
本人と地域が交流できる場を増やす取組みや地域づくり、また本人自らが思いを伝える講演会などを企画・運営することを引き続き実施していきたい。今後は本人や当事者が施策へ提言できる会議やワーキングチーム等の立ち上げなども検討していきたい。
認知症市民フォーラムや認知症サポーター養成講座の際に、認知症当事者の方に来ていただき、自分の体験談や思いを話してもらう機会を設けています。
若年性認知症の当事者、ご家族の想いを知る機会を何度か設け、当事者とその家族からのメッセージをメインとした「若年性認知症講演会」を昨年12月に開催しました。市民、医療・介護の関係者等約400人の参加がありました。
今年度は3月に本人と介護者を招いたワークショップを計画。
認知症サポーター養成講座において、認知症の正しい理解の普及を進めておりますが、まだまだ『認知症の方には自覚がない』と思っている方が多いのも事実です。共に助け合い地域で暮らすことを実現するためには、認知症の方自身がどんなことに困り、支援を必要と考えているか、その声を集め、発信することも重要であると考えます。
本人に講演していただけるような機会や環境を作り、本人の口から直接本人の生き方、QOLの向上を訴えていただき、講演を聴いた方々には真に認知症本人の人権について考え、さらに支援を実行できる機会を創造したい。
認知症の方が、自分の状況を周りに伝えることに対してまだまだ抵抗があるので、本人の会や本人の話聞く場を作りたい。
市民向けの普及啓発として「認知症講演会」を開催しているが、今年度は、「支え合おう～地域で暮らしていくために～」をテーマとして、認知症の人を介護している家族や、その他本人を支えている関係者(民生委員、ケアマネ)を登壇者として招き、認知症と診断されたときの本人の状況や家族の体験について話していただいた。
当事者の声を聞くことは大事だが、まだ、場の設定までには至っていない。場の設定をするにしても家族の理解が得られるか課題(まだ地域に知られたくないという思いが家族にある場合が多い)
現在実施している認知症サポーター養成講座を充実させ、サポーターを地域に増やすことで、周囲が認知症に対しての理解をし、本人が発信しやすい環境を作る。
(6) 本人同士が集まり話し合う場作り
平成29年1月から試行的に、「認知症当事者の集いの場」を開催予定である。
本人や家族が集える場を設置し、話し合ったり、相談し合ったりする他、本人の意見を聴く機会を持っていけるよう取り組みたい。
本人と交流し、「本人会」の立ち上げや運営に協力したい。本人の意志を尊重した支援策を提供できるよう、活動していけるよう取り組みたい。
認知症の告知を受けた本人の思いを、当事者同士で話し合える場を作りたい。

認知症を抱えた方が自身の体験を語る場を作ることで、本人同士が情報交換したり、周囲の理解を得る機会にしたい。
本人同士が集まり交流していただく場をつくり、そこに認知症施策担当者も参加をしたい。
当市では、まだ、本人同士が話し合う機会がないので、そういった場を作っていこうと考えている。
本人が参加して話し合えることができる場を作っていきたい。
介護者家族の集まりは行っているが本人の集いの場はこれから
年に6回、若年性認知症の本人と家族のつどいを県と圏域内市町村で開催しているが、当市からの参加者は少ない状況です。
(7) 若年性認知症の人同士が集まり話し合う場作り
若年性認知症の方や家族の集いを行っているが、その集いの中で本人の意向や思いを確認。(再掲)
若年性認知症の人と家族の交流会を実施する中で、本人の意思、視点等に関する内容を把握するように努めています。その中で把握したものについては、関係機関等にフィードバックできるように努力しています(再掲)
今後、若年性認知症当事者・家族の交流・情報交換(就労支援等)の場の立ち上げなど
(8) 本人が地域で活躍する機会づくり
本人がキャバパン・メイト連絡会に入っている。
特に診断されて初期の方には、認知症サポーターの活動登録を進めている。活動登録することによって、認知症に関する知識を得ることや地域の方と交流することにより、ネットワークを築くことができるため。
若年認知症の方の調査結果をもとに、若年認知症の方等が役割を持ち活躍できる居場所として「仕事の間」への支援を行っている。(再掲)
認知症のご本人が活動できる場所の確保をしていきたい。
軽度者が就労や社会参加できる場を作りたい。
就労の場づくり
障害施設などを活用した就労の場が出来たらと考える。
(9) 本人視点や声を重視した啓発活動や認知症サポーター養成講座
町では年1回「認知症町民講座」を開催し、認知症の当事者や家族、関係機関が思いを語ったり代弁する機会を設けています。毎年参加者からの反響があるため、テーマを替えながら今後も継続して行きたいと考えます。
認知症当事者の方に講師にきていただき、認知症講演会を実施。実際に当事者の声を聞き、認知症とよりよく生きることを考えることで認知症になっても安心して生活できる地域を市民と一緒につくっていけるよう取り組んでいる。
市民を対象にした認知症に関する普及啓発の機会に、本人の意志の尊重や本人視点の重視に関する内容を組み込んでいく。
昨年度から、若年性認知症の本人をお呼びして講演会を開催している。
認知症の本人の声を表出できる機会づくり(講演会やフォーラム、カフェ等)を実施。地域、企業等社会全体の認知症理解へ広がり期待
地域の見守りボランティアの学習会で、本人とその家族に体験談を話してもらい、認知症の理解を深めてもらった。
28年度は当事者を招いての講演会を開催。民生児童委員や福祉関係者、警察、消防等の地域支援関係者を対象として意識を深めた。
認知症の理解普及の講演会や、地域77個別会議等で、本人・家族に話して頂く機会が増えている。
平成28年度、認知症サポーター養成講座にご本人を招いて当事者の視点から認知症についてお話しいただいた。今後も本人視点の施策に取り組んでいきたいと思うが、必ずしもご協力いただけるご本人がいるとは限らないこと、症状の進行によりご協力いただけなくなるなどがあることなどが課題と考える。
認知症カフェ等に認知症の当事者を迎え、全ての方を対象とした講演会を実施している。
今後、認知症の啓発講演会に本人や家族を講師として招くことを検討中。

認知症カフェにご本人に参加してもらい、“思い”を語ってもらう場としていきたい。そのためには、もっと地域へ推進していく必要があることから、今後地域へ出て普及啓発をしていく予定にしている。
今年度開催予定の認知症セミナーに認知症の本人を講師としてお迎えし、市民の方にも本人の視点を知っていただく機会を設ける予定。
現在は、認知症体験者養成講座で、本人の言動(本やホームページの記載等)を紹介し、本人の考え等伝え、認知症者への理解を広めるようにしている。
認知症体験者養成講座や認知症関係の講座等でDVDを用い、本人の想いを伝えていくよう心がけている。
認知症体験者養成講座の際に、NHKで作成した認知症キャンペーンのポスター(認知症当事者の声)を紹介している。
地域包括支援センターでは、認知症体験者養成講座を随時開催している。その際に認知症のひとと家族の会のアンケートを基に認知症当事者の意思の尊重や視点をお伝えしている。
より多くの方へ、認知症についての知識と理解を深めていただけるよう、認知症体験者養成講座等を利用し、情報発信し、認知症の方の意思の尊重と、その方の視点に立って考えられる人を増やしていけるよう取り組んでいる。
28年度より認知症体験者上級者養成講座を開催し、認知症の方とその介護者の話に重点をおいた内容にする予定。
本人の意思や視点を重視した関わり方が、専門職だけでなく地域にも広まっていくように、体験者養成講座などを通じて啓発
認知症の本人の意思の尊重・本人の視点重視の地域づくりへの取り組みとして、積極的に認知症体験者養成を地域住民や企業・学校等を対象に実施し、広く認知症の正しい理解を普及できるよう取り組んでいる。
認知症体験者養成講座、認知症カフェ(委託)にて、本人の意思の尊重等を伝えている。
認知症体験者養成講座を実施する際に、対応の違いにより本人がどのように感じるかなどの内容を盛り込んでいる。
平成27年度に当事者のお話を伺う講演会を開催したがその後継続できていない。地域で高齢者を支える意識の醸成のためにもこのような機会を継続していきたい。
体制作りは時間がかかるが、市民向けの講演会や認知症体験者養成講座を通じて、本人の声を届けていきたいと考えている。
認知症体験者養成講座や認知症カフェ等において、介護者の気持ちだけでなく、本人の意思の尊重や、本人の視点を重視した内容も取り入れたい。
「当事者に学ぶ」認知症研修会の開催をしたい。 当事者がどのような支援を望んでいるのか、自分事として考えてもらえるような機会を作りたい。
人材確保(キャラバン隊や認知症体験者)も課題となることから、本人のおもいを聞く場所の拡充や人材を確保していくことが必要と考えている。
認知症に対する啓発活動を広く行っており、本人の意思の尊重や視点重視について理解してもらえる地域づくりに今後も取り組んでいきたいと考えている。また、今後は本人による講演会に取り組みたい。
認知症カフェの体制整備及び調整を進め、地域と認知症の方のつながりを強化する。
一般的な住民への学習や、関係機関への学習を考えています。
認知症の支援体制を進める上で、家族・地域の方々に本人の意思の尊重や本人の視点重視を進めることがまずは大切ということを啓発することから取り組む必要があることを実感しているため、地域住民への認知症支援の普及・啓発を継続して取り組む。
認知症が発症する可能性は誰もがもっており、65歳以上とは言わず中高年期から自身のこととして考える必要があるが、年齢が若いと自身のこととして考えづらい状況がある。家族等に認知症のある人がいると認知症について考えるきっかけはあるが家族の課題として捉え、自身のこととは捉えづらいので、認知症の病状等だけでなく正しい理解の普及・啓発が必要と考える。
これまでも、本人の意思や視点が重要と考え支援を進めてきたが、認知症が進み判断力等が低下する前に必要な準備、備え、支援等について本人から教えてもらいながら、それを市民啓発していきたい。

(10) 本人の視点や声を重視して認知症ケアパス
平成27年度に認知症ケアパスを作成する際に、本人からご意見をいただいた。
認知症ケアパス作成の際に、冊子に本人の作品等を取り入れることを行っている。今後は、どのような手法で施策・事業に協力・参画していただくことができるのかを先進事例等から研究すること。そうした本人を探すことが必要と考えられる。
認知症ケアパスに本人の意思を盛り込む(再掲)
これから作成する認知症ケアパスについて、本人・家族の意見も取り入れ、認知症地域支援推進員と共に、作成する予定。又、その他の認知症施策に対する意見も参考にさせて頂く予定。
ケアパス検討委員会等には高齢者代表の参加頂いています。
わかりやすい認知症ケアパスの充実や社会資源の開発に努めていきたい。
認知症ケアパスの作成などを通じ、本人とその家族が最後まで幸せに暮らせる地域づくりを図る。
(11) 本人の視点・声を重視した地域ケア会議
地域ケア会議等を活用しながら、ご本人の意思を尊重した支援ができるように関係者の話し合いを持つようにしています。
支援計画は、本人の自立支援に向けてのアセスメントを支援者間で検討・共有されるよう、地域ケア個別計画会議を開催し、関係者の意思統一を図っている。その際、本人の意志尊重等についてのおさえを行っている。
地域ケア個別会議等で、本人・家族に話して頂く機会が増えている。
地域ケア会議の中で、本人の想いを伝える機会も設け、地域で認知症の方々を支えるために、自分たちができることを考えました。
出来る限り本人の意思を尊重できるよう、本人と話す機会があれば聞き取り、介護事業所職員から情報を収集したり、本人の家族の意向も聞き取っている。
(12) 本人の視点・声を重視した認知症初期集中支援事業
認知症初期集中支援チームの支援において、本人の意向を確認し、尊重しながら支援しています。
認知症初期集中支援チームが包括支援センターに立ち上がり、丁寧な支援を行っている。包括支援センターと連携して、本人の意思の尊重や視点を重視。
認知症初期集中支援チームを設置し、個別事例に関わる中で本人の困り感・家族の思いを聴取している。
(13) 本人の視点・声を重視した認知症地域支援推進員活動
本人の意思の尊重や本人の視点が重視される、認知症地域支援推進員による住民啓発活動
認知症地域支援推進員が中心となって、個別訪問を軸にした活動を行っている。その中で、本人や家族の視点を重要視している。
認知症地域支援推進員の活動をとおして、認知症の人や認知症に関心のある人が集うことのできる認知症カフェの設置・促進をしている。認知症の人が気軽に相談ができ、専門職とのつながり、本人の得意分野を認知症カフェで発揮することのできるような認知症カフェの運営支援が行えるよう、認知症カフェ連絡会や研修会等を行う。
認知症地域支援推進員を各包括におき、年4回の連絡会を開催して認知症カフェを含めた施策の検討をしている。
認知症地域支援推進員で集まり、必要な取り組みについて検討しており、本人の意志の尊重や本人視点の重視についても視点を置いて検討している。
地域包括支援センター内に認知症地域支援推進員を配置しているので、本人や家族などからの相談窓口として周知を図り支援をしている。
県が実施している調査に認知症地域支援推進員2名が委員として協力している。
認知症地域支援推進員が認知症の人と家族の会へ参加。
今年度、認知症地域支援推進員を配置したので、今後の取り組みを期待するとともに、行政も一緒に進めて行く予定です。

平成 29 年度より、地域包括支援センター内に認知症地域支援推進員の配置と、認知症初期集中支援チームを立ち上げ、専門職でのケース検討をかさねていく予定である。
認知症カフェ登録制度及び開設補助金を今年度から開始しました。来年度は認知症地域支援推進員を中心に、カフェごとの認知症の啓発、本人の意見が尊重される居場所としての市民啓発を行いたいと考えています。
(14) 本人の視点、声を重視した認知症カフェ
認知症カフェ(委託)にて、本人の意思の尊重等を伝えている。
認知症カフェでの本人同士の集いを大切にしている。
「認知症カフェカーブ」を各施設が月 1 回開催している。カフェを通して、認知症ご本人のお話をゆっくり聞かせてもらうことで、本人の想いに寄り添うことから始めている。
今年度から認知症カフェを開始している(5 回開催予定)。カフェの場に本人からも参加してもらっているが、思い等傾聴しながら、来年度の事業に生かしていきたいと考えている。
オレンジカフェを委託して実施。認知症サポーター養成講座をうけたスタッフが常駐し、本人やその家族の休息・交流・情報交換の場となるよう取り組んでいる。
認知症当事者の方に講師にきていただき、認知症講演会を実施。実際に当事者の声を聞き、認知症とよりよく生きること考えることで認知症になっても安心して生活できる地域を市民と一緒につくっていきけるよう取り組んでいる。
又、町内 2 箇所で開催している「認知症カフェ」において、認知症の本人がスタッフを務めるなど、当事者が活動できる場として活用されています。
毎年当事者や家族が語ったり、代弁する「認知症町鶴民講座」開催。反響がある。) 町内 2 箇所で開催している「認知症カフェ」において、認知症の本人がスタッフを務めるなど、当事者が活動できる場として活用されています。
H28 年度より地域や医療機関等に委託して「認知症サポーターカフェ」を開催する予定なので、その中で本人や家族の思いを聞き取り、認知症の事業に活かしていきたいと考えてます。
認知症カフェでは、ご本人や家族の相談できる場所を設けております。
れぞろカフェを委託して実施。認知症サポーター養成講座をうけたスタッフが常駐し、本人やその家族の休息・交流・情報交換の場となるよう取り組んでいる。
認知症サポーター養成講座を受講した方を対象に、フォローアップ講座やステップアップ講座の開催に向けて、地域の中での居場所や支援者を増やせるように内容を検討している。
認知症の方や家族が安心して出かけられる場所である「認知症カフェ」の支援を行っている。
定期的に認知症カフェを開催しており、その際に認知症サポーターによる協力も頂くことを試行的に実施する等しながら、地域の支援者を増やし認知症の方が、その人らしく安心して暮らせる地域づくりを支援している。
本人にとっては馴染み深いふれあいサロンの場が(ボランティアの運営による各集落の居場所として定着している)の場が、認知症カフェの機能をもてるよう、ボランティアや参加者への理解啓発講座を行っている。
認知症カフェにおいて、本人が参加しやすいような内容を検討中(臨床美術や音楽療法など)。
市内にある認知症カフェ(おれんじプラスカフェ)の運営者と認知症カフェ登録を検討している店舗運営者向けに認知症カフェ立ち上げ・運営セミナーを行い、認知症の方とその介護者の要望を伺い、運営者は何ができるのか考える機会を設ける予定。
認知症カフェなどの本人が参加できる場にも、本人の参加があることが少ないため、まず本人が参加できるように周知等行っていく、参加された際に本人や家族への声かけやアンケートなどで意見等を聞き、次回開催の際に意見を取り入れて改善できるようにしており、今後も継続していきたい。
本人参加を促進する認知症カフェの運営を支援している(運営補助金、認知症カフェ運営者のネットワーク化・交流会開催等)。
グループホームを併設した小規模多機能型施設で認知症カフェを平成 29 年度から開催予定で認知症の方や家族の方の集まりの機会をつくって情報交換をした
認知症カフェ事業において、当事者の参加を図り、本人の視点、本人の意思の尊重を育んでいきたい。
平成 29 年度開設予定の認知症カフェの中で家族の支援とともに、本人の視点を重視した取組を図りたいと考えている。

認知症カフェをつくる際に、本人がしたいこと、求めるものと乖離しないよう、本人の意見を聴き、意思や視点を重視したものにしていきたい。
認知症カフェ(家族会)を今年度4年ぶりに開催し、改めて必要性を感じ今後は継続して開催していきたいと考えている。認知症の方本人同士が交流できる場も設けられるよう、認知症カフェを家族会に限定せず企画し開催していきたいと思います。
認知症カフェ事業の内容や場所・開催時間等について、認知症の方やその家族のニーズを捉え、展開していきたいと考えている。
認知症の家族や本人が集える場所(認知症カフェ等)も広めていく。
認知症カフェ等通いの場を増やし、社会参加、情報交換して頂く機会を増やしたい。
認知症カフェの設置推進。交流や専門職との相談の場となると共に、カフェに関わる市民の方の理解の場になると思うため。
個別の関わりのなかで、本人の意向を確認するよう努めている。将来的には、認知症カフェ等で本人のやりたいことが生かせる場づくりが必要と考える。
認知症カフェなどの事業に、企画の段階から本人の参加を要請し、共に実施していく取り組みを検討していきたい。
本人が気軽に立ち寄りよることができる場づくり認知症カフェ
認知症カフェ等、認知症になった方と直接交流できるような機会が作れたらよいと考えています。
認知症カフェで本人や家族の思いを聞き取って行く予定。
今後のとり組みとして、本人や家族が集える場(例えば認知症カフェ等)を立ち上げて、本音で話せて、行政としても直接思いを聴ける場を設けたい。
平成30年度以降、既存の介護者の会をベースに、認知症カフェの開設を検討している。本人やその家族が参加しやすく、意見を取り入れられるようにしたい。
(15) 家族会等の取組みを通じた本人視点の重視に関して
「認知症の人と暮らす家族の集い」を平成28年度より実施している。
この集いは、行政や地域包括支援センター・医師等が行うミニ講座を通して、家族認知症の人への接し方や本人の意思を尊重することへの大切さを学び合ったり、介護で困っている事などを話すことでお互いに励まし合う場となっている。
家族会への参加などを通じて、本人の想いや課題を聞き、事業に反映させるよう努めている。
家族の会などとの連携を図り、介護者の実情や、関わっていく中での課題などをしっかり聴くよう努めている。
今後は、家族会との連携の中で、本人の思いについて聞く場を設けられるよう検討する。
現在は認知症の家族会を実施しており、その会の延長上として、本人も参加できる食事会を実施していければと思う。
これまで、家族の会を通じて、意見を聞くことを行ってきました。しかし、家族の思いだけで推測できる範囲に限られることがわかり、本人の思いや希望を直接聞くことの重要性を認識しています。これは、何かの施策のために改めて聞くというのではなく、日々の活動の中で常に聞いておくことで、より細やかに思いを反映させることが可能となると考えており、今後、どのようにしてこのような機会を持てるのか、検討しているところです。
(16) 本人の視点・声を重視したSOSネットワーク作り
認知症になっても安心して住み続けられる地域づくりを目指すうえで、より認知症を身近なものとして意識してもらうために、例年までは市主体で実施していた認知症高齢者に対する徘徊訓練を、地域の主催で実施している。
本人の視点や声にもとづいてSOSネットワークづくりを実施
(17) 本人視点・声を重視した相談・個別支援
本人の意志の尊重や本人の視点重視のためには、まずは本人と面談し話をする事だと思っています。本人に会ってみたいと何に始まらないし、今後の支援やそれを支える施策も一つ一つのケースを丁寧に対応することだと思っています。
相談対応業務を通しての個別支援や地域の中で、認知症カフェなど認知症の方やその家族が気軽にでかけることの出来る場、意見の言える場づくりを行っている。
総合相談で本人の意向を確認し、尊重しながら支援しています。

認知症の方と面談する際、本人の言葉を引き出すような関わりを心がけている。
色々な症状があり、その方の生きてきた背景や価値観も違うので、できるだけ本人と接して、話や表情を含め、その方をできるだけ受容、傾聴した中で対応していくよう心がけている。
家族と同居されている認知症の方については、面接時、複数の専門職で対応し、家族と本人の話を別々に聞けるようにしている。
小さい自治体であり、認知症ケア以外なかなか本人の視点重視の施策は難しい状況です。ご本人とは直接関わる機会もありますし、個別のケースに丁寧に関わりながら本人の思いも大切にしていきたいです。
個別事例支援の際に本人の思いを大切に支援している。
本人からの相談等があった時に、主訴をしっかり理解して周囲と共通認識できるようにしている。
認知症を患う独居高齢者も多く、当たり前ですが、地域包括支援センターも含め、まずはよく話を聞くよう心がけています。
一人一人の関わりの中で、本人様の意向を聞くよう心がけている。
家族からの相談の場合でも、可能な限り訪問し本人の思いを確認するようにしている
相談があった場合は本人や家族等に話を聞き、状況を把握するようにしている。
相談業務の中で把握する課題を解決していくために、相談内容等の情報共有を密に行っている。
認知症の方にとって、本人自身がその内容を理解し意思を決定し、それを他者に伝達していくことが困難なケースがある。その特性を理解している専門職種がいかに本人の意思を尊重して支援していくかが重要。幸い当町では、自治体における支援=直営包括支援センターによる支援構図(認知症初期集中支援チームも包括内にある)があり、認知症の方に関わるケースは専門職種(ケアマネ、保健師、社福士等)が対応している。クライアントの最善の利益、そのためのアドボカシーの視点をもって対応しております。
当市では昨年度大規模な水害にあい、その後、もの忘れや認知症に関する相談ケースが急激に増えました。医療機関や介護保険制度の利用につなげるため、大学附属病院認知症疾患医療センターの協力を得て医師による訪問活動を行っています。相談ケースも落ち着いてきたので、地域の公民館等をまわって認知症を介護している方や自分自身のもの忘れの相談に対応する相談会を開始しました。
「本人の視点重視」は必要とは感じているが、重症化してから相談に至る事例が多く、現状では介護家族への支援が多くなっている。早期発見・早期対応の啓発とともに、本人の意思や希望を反映した取組みを検討していかなければならないと感じている。
個々の認知症で困っている家族への支援は行っているが、認知症を受け入れ、認知症と共に生きることができる当事者になってもらうための個別支援にとどまっている。
なかなか本人が自分の意思を語ってくれることが難しい。
(18) 本人の視点・声を重視した専門スタッフの対応力向上
町の保健・医療・福祉に携わるスタッフが「本人本位」「認知症の人の視点」について同じようにとらえて対応できるように4回シリーズの人材育成の研修会を実施。受講後に研修会で使用したシート(センター方式)を活用し個別ケース会議に生かすようにしている。研修会は毎年継続し、認知症の人に関わる全ての人たちが同じように対応できることを目指す。
本人の声、本人視点を重視したセンター方式の研修、事例検討
センター方式を活用。事例検討会で活かしている。
ケアマネや介護従事者に対する本人の意思尊重についての研修会を実施
「認知症ケア実践塾」という研修会を開催し、本人の生活歴などを考慮し、プライドを重視した関わりについて認知症の家族や介護事業所の職員が研修会を行った。
パーソナルケアについての研修会等をケアスタッフ向けに開催しています。
医療や介護関係者、地域住民に対し、本人本位のケアの実現のための研修を行っている。
介護保険事業所等のスキルアップを図り、介護サービスだけの知識習得だけではなく、本人の意思に沿った生活や将来設計まで寄り添えるような支援ができる事業所、ケアマネジャー等になるよう支援を進めていく。
介護保険課と連携して、介護の質、改革が必要

<p>家族、ご本人も含めた研修会や検討会の開催を検討する必要性を感じています。</p>
<p>介護施設を対象に認知症の理解を深めるための研修会が必要</p>
<p>デイケアは重度認知症の人を対象にしています。その為、自分の思いや体験などを自身で語る事が困難な事が多い為、デイケア利用前訪問時からゆっくりとご本人から希望や思いを聞くようにしています。それでも、言葉に出来ない事も多い様で、認知症の方の思いを知るためには、ご家族と話、お家の環境、生活状況などを時間を掛け理解し、認知症の方ご本人とご家族に寄り添っていく事が大切と思っています。</p> <p>何に困っているか、どのように過ごしていきたいのか(ご家族はどのように生活してほしいのか)本人・ご家族との良い関係を築きながら丁寧に関わっていく事を強化していこうと考えています。</p>
<p>本人の意思や視点に立った相談支援は根本であり、基本であり、実際にケアにあたる専門職や相談事業所などのスタッフは特に当然のこととして捉えている。そのうえで、本人の視点の重視ということで事業等を展開していくことは、いまさらということにならないかという不安感がある。</p>
<p>本人の意志を尊重する事で本人や周囲に負担や被害が及ぶ場合が多く、運転免許・ケアの拒否・不適切な状態の放置(不潔・栄養不足等)等では本人周囲を守る事が優先される気がします。ケアの最中は、本人のペース、本人の思いに沿う事はもちろん大事ですが…。うまく活用している場面をお教えてください。</p>
<p>数年前に、若年性認知症の方に関わったことがあったが、もともとの職人の技を活かせるようにと地域の作業所に通うきっかけを作ったが、本人の技術を活かせる作業がなく、その作業所で行っている作業実施が主体となり、最終的に作業所に本人を合わせなければならなかった支援を今でも悔やまれる。このことから、本人主体を考える場合、あるものを活用するのも効果を示す場合もあると思われるが、本人の生活の主体を何に置くかが重要であると思ったり、それを受けて自治体や関係者がどこまで踏み込むかが課題。</p>
<p>(19) 本人視点・声を重視した先進事例・情報の共有</p>
<p>市内で取り組んでいる好事例等をまとめ、発表をする機会であったり、周知できるような場を設けたい。</p>
<p>本人調査については、先進事例や他地域の状況等を参考にしながら、今後検討していきたい。</p>
<p>認知症地域支援推進員による本人又は家族のニーズ調査を予定しているが、まだ具体的になっていない。先進事例や資料があれば欲しい。</p>
<p>具体的な取り組みについては不確定ですが、本人の意思の尊重や本人視点の重視は大変重要な点であり、認知症施策を推進していく上で欠かすことができないと考えています。調査項目にもありましたが、本人調査の有効な進め方について具体的な事例をどんどん発信していただきたいと思います。</p>
<p>認知症カフェに参加して、「認知症」という病気はまだ本人がオープンにする、ましてや当事者同士が語り合う場に出てくる、というのはハードルが高いと感じる。認知症の本人が自分の意思を訴え、その内容を施策に生かすことは重要であると思うが、そのために、まだ気持ちの整理がつかずそっとしておいてもらいたいと考えている人達を掘り返すような形で会を設定して出席願うわけにはいかない。結果、声が挙がるのを待つ形になり、積極的に動けていない。先進事例を参考に考えたい。</p>
<p>ご本人の視点を施策に取り入れていくことは非常に重要と感じていますが、どのようにすすめていいかわからないのが現状です。</p>

2. パイロット調査

1) 実施概要

次のような内容で、実施した。

(1) 調査のねらい

次の3点を本パイロット調査のねらいと位置付けた。

- | |
|---|
| <p>①「本人調査」の一手法として「本人ミーティング」に焦点をあて、多様な地域、実施主体で実際に試行し、結果をもとに、その実行可能性、有効性を拡充するための知見を集約する。</p> <p>②「本人ミーティング」後の、「本人の声等の活かし方」についても把握し、施策等への反映のあり方の検討を行う。</p> <p>③上記の情報を集約し、自治体等が、今後の取組みや施策に具体的に活かしていくための情報提供や、わかりやすい手引きの作成につなげる。</p> |
|---|

(2) 調査期間

平成28年8月～平成29年3月

なお、平成27年度からの継続地域/チーム(6)は、平成28年6月以降の取組みの実施分についても把握し分析対象とした。

(3) 参加地域とその概要

<p>○平成27年度からの継続地域/チーム</p> <ul style="list-style-type: none">・仙台チーム(宮城県)・町田チーム(東京都)・国立広域チーム(東京都)・富士宮チーム(静岡県)・大阪チーム(大阪府)・大牟田チーム(福岡県) <p>合計6</p>	<p>○平成28年度からの新規地域/チーム</p> <ul style="list-style-type: none">・北見チーム(北海道)・上田チーム(長野県)・兵庫広域チーム(兵庫県)・綾川チーム(香川県) <p>合計4</p>
--	--

※詳細は次ページ

	北見	仙台	国立広域 (国立・立川)	町田	上田
人口	120,314 人	1,058,128 人	(国立市) 75,452 人 (立川市) 181,440 人	426,978 人	159,128 人
高齢化率	30.4%	22.4%	(国立市) 22.4% (立川市) 23.7%	25.6%	29.1%
実施主体	・地域多職種ネットワーク (介護事業者、認知症疾患医療センター、精神科病院、地域包括支援センター等)	・自主活動組織(本人、認知症の人と家族の会、開業医、初期集中支援チーム員、ケア関係者)	・地域のクリニック (地域連携型認知症疾患医療センター)	・次世代型デイサービス	・総合福祉施設 ・地域住民自主組織
開催場所	地域食堂	市民活動サポートセンター 会議室等	認知症カフェ	通所介護事業所 + 活動の場	事業所内の相談室
参加者	本人 4 人 同席者 3 人 ワザバ(地域包括支援センター、専門職) 6 人 計 13 人	本人 7 人 同席者 4 人 その他 5 人 計 16 人	本人 8 人 同席者 7 人 ワザバ(専門職・行政) 14 人 計 29 人	本人 3~4 名 パートナー(随時)	本人 4 人 同席者 3 人 計 7 人
進行役	なじみの職員(介護職)	本人	在宅療養連携室の職員(看護師)	本人となじみのパートナー(介護職)	なじみの職員(看護師)

	富士宮	大阪	兵庫県	綾川	大牟田
人口	134,164 人	2,691,185 人	5,536,989 人	24,548 人	118,351 人
高齢化率	27.0%	25.3%	27.1%	32.9%	34.7%
実施主体	<ul style="list-style-type: none"> ・行政＋地域包括支援センター ・地域住民自主組織 	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症の本人と家族、その支援者たちを支援する NPO 法人 	<ul style="list-style-type: none"> ・本人グループ ・県の若年性認知症生活支援相談センター（県社協） ・県 	<ul style="list-style-type: none"> ・行政＋地域包括支援センター ・介護予防事業からはじまった住民組織 	<ul style="list-style-type: none"> ・行政 ・認知症地域支援推進員（認知症コーディネーター）
開催場所	アクセスの良い、なじみの交流センター	ふだんの活動場所（通常集まる機会に）	古民家の定食屋	なじみの交流スペース	地域交流拠点（介護事業所等に併設して市が設置）
参加者	本人 5 人 同席者 21 人 計 26 人	本人 支援者 （随時）	本人 8 人 同席者 18 人 計 26 人	本人 10 人 家族 4 人 支援者 7 人 ケアマネ 2 人 行政・地域包括支援センター 10 人 計 33 人	本人 支援者 （随時）
進行役	なじみの職員（地域包括支援センター保健師）	実施主体の代表（看護師）	会の座長（なじみの学識経験者）	なじみの職員（地域包括・社会福祉士）	本人がパートナーと一緒に

※人口および高齢化率は各自治体ホームページより事務局調べ(平成 28 年 2 月現在)

2) 施行経過と結果

(1) ワークショップの開催

10地域から関係者が各3名ずつ集まり、情報交換を行いながら本人ミーティングの開催のあり方やその後の活かし方について話し合うワークショップを2回開催した。なお、各地域からは、可能な範囲で本人が参加をするように調整を行った。

継続地域と新規地域のメンバーを混成したグループを作って、話し合いと全体討議を行った結果、新規チームのメンバーが継続チームのメンバーから、本人ミーティングのねらいや実施のプロセス、具体的な進め方や工夫、やってみての手ごたえ等についての具体的な情報やアドバイスを得る場面が多くみられた。

また、新規地域の本人が、すでに取り組んでいる継続地域の本人と出会い、支えられる一方の立場ではなく、自らも一緒に本人ミーティングを企画・準備していくことの大切さやその可能性に直に触れる機会となっていた。

ワークショップは、新規地域の関係者が本人ミーティングに取り組んでいく上での大きな推進力となり、ワークショップで得たことを参考に、各地域にあったやり方で、次のような3つのステップで取り組みが進んでいった。

- ①企画・準備
- ②本人ミーティングの開催
- ③本人ミーティングで得られたことの活用（取り組みや施策への反映等）
振り返り・レポート

継続地域にとってもワークショップは、他の継続地域と進捗状況や新たな工夫等に関して情報を交換しあえる機会となった。また、新規地域の人たちと話し合う中で、自分たちの取り組み経過を振り返り、本人ミーティングで得られたことを活かしていく必要性を再確認する機会にもなっていた。



継続地域と新規地域の関係者が話し合う



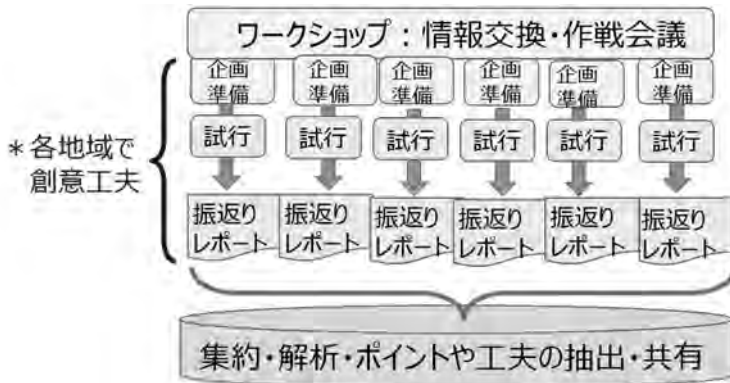
取り組んでいる地域の本人が報告

ワークショップを通じた本人ミーティングのあり方・方法の検討・伝達

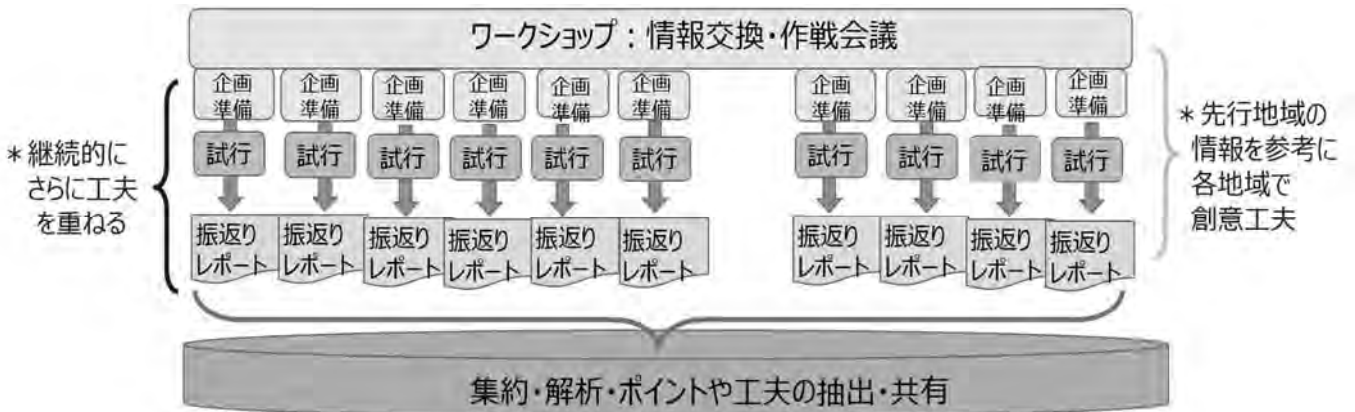
継続6地域

新規4地域

<平成27年度>



<平成28年度>



* 地域別の施行経過・結果は次のとおりである。なお、各地域について特徴や実施状況のほか、各地域の状況にあわせて、経緯をまとめている。

(2) 地域別実施結果：本人ミーティングの開催から開催後の結果の反映

①北見市（北海道）

*新規

<特徴>

- ・介護事業者が中心になり、地域の専門職（認知症疾患医療センターの認知症認定看護師、市内の精神科病院のソーシャルワーカー、地域包括支援センター職員、ケアマネジャー等）と共に事前の話しあいを重ね、小規模のミーティングからスタート。
- ・本人の参加者は、サービス付き高齢者向け住宅で暮らしている認知症の人。加えて開催情報を知った隣市在住の若年認知症の人。
- ・開催場所は、地域の子の立ち寄り場・相談の場となっている「地域食堂」。
- ・近所の住民が、当日の差し入れ等でさりげない支援をしてくれた。
- ・和やかな中で本人同士の活発な話し合いが行われた。
- ・振り返り会では、参加した医療職が普段の医療サービスの見直しの必要性を提起したり、本人から出た小さな願いをかなえるための活動を、職場をこえて一緒にやってみよう等、地域支援にとともに取組むきっかけができた。

<実施までの経緯>

サービス付き高齢者向け住宅の居住者の中で認知症を発症する人たちが増えてきており、その人たちが今後も地域の中で安心して暮らし続けられるため支援のあり方が課題になっていた。そのために何が必要で、何をするかをサービス関係者だけで決めずに本人同士が率直に語る声をよくきいてみよう、ということになる。で地域でふだんからつながりを育てていた多職種ネットワーク（介護事業者、認知症疾患医療センター、精神科病院、地域包括支援センター等）が実施主体となり本人ミーティングを開催することになった。

開催場所は、参加する本人たちが気軽に参加しやすいように、また、開催後も地元での交流が生まれることをねらって、住民にとってなじみの場となっている地域食堂「きたほっと」とした。



開催場所となった地域食堂きたほっと

『誰でも集え、きてほっとする食堂』を作りたい、と地域の介護職と住民が自主的に設立・運営。おいしい食事につながり、気軽な相談の場となっている。

<当日にむけた企画・準備の主な点>

○参加しやすく、話しやすくなるための工夫

いきなり話し合いではなく、参加候補の本人たち（サービス付高齢者向け住宅で暮らしている人で認知症を発症していて医師の診断を受けている人）が得意としていて、乗り気になりそうなことが何かを関係者で話し合う（餃子づくりが案として出る）。

○参加の声かけ

- ・参加候補の本人たちに、なじみの介護職員が参加を声かけ。餃子づくりや本人同士の話し合いについて本人が賛同。家族にも説明し、理解を求めた。
- ・チラシをつくって認知症疾患医療センターの看護師や地域包括支援センター等にも開催を伝える。看護師が疾患センターで告知を受けたばかりで落ち込んでいた若年認知症の人(隣市在住)に開催を伝え一緒に行ってみないかと誘ったところ、本人・家族とも参加を希望。

<当日について：工夫した主な点>

- ・ふだん出合っている本人同士が、もっとじっくり話せる機会を作ろうと、なじみのスタッフが話し合いに加わって、打ち解けた自然な雰囲気を作りつつ、スタッフは口を挟まず、本人同士が話すことに徹した。
- ・話し合いの前に、参加者が自慢の餃子をつくってみんなで美味しくたべながら、自然に話しが弾んだところでスタート。
- ・話合いテーマを「やってみたいこと」に絞って話し合う。
- ・一人だけいつものなじみではない人、しかも年代の違う若年性認知症の人が参加したが、まずはギョーザと一緒に食べることで和んでもらい、他の人たちが話し合うのを聞いてもらいながら、その人が自分も話し出したいと思うタイミングを待つようにした。



本人が得意なこと、やりたいことを最初にやる場面をつくった。

どんどん自分たちで餃子をつくり
会話が自然に始まった。



80代と90代の本人同士で、話が進む
職員は口を挟まず後ろに控える。

「わたしはこう思うの」と話す他の人に
続き、50代の本人も語りだした。

<参加した本人の声(抜粋)>

- いつもはこんなに話さない。座っているだけでなく、普段ももっと話し合えたらいい。
- 小さい頃からいろんな苦勞をしながらここまでやってきた。これからのことを考えている。これからも、お迎えが来る日まで、何とか皆さんと一緒に頑張っていきたい。
- 家族がいなくなつて、寂しい。家のように自由に暮らせて、だけどやさしく助けてくれる今のような場所ありがたい。
- だんだんできなくなつて情けない。だけどできることをやっていると楽しくなる、元気がでてくる。行きたいところに連れていってもらえることが、本当にうれしい。
- (若年認知症の人) やりたいこと・・・あまり考えてみなかったけど・・・バレーボールやってみたい。できる場所があったらいい。

<振り返り会：話したことを地元の取組みや施策等へ反映するアイデア>

本人ミーティング終了後に、引き続き進行役と同席者、オブザーバで振り返りの話し合いを行った。一人ひとりが、本人ミーティングに参加してみたの感想や気づきを語りあい、これからの取組みや施策にどう活かせるか話し合った。



共通して出たのが、本人同士で話し合うと想像以上に生き

活きと語りあうことができ、気づかされることが多いという愕きであり、話された内容を記録にとどめて様々な人にも聞いてもらいたい、伝えていくことで、地域全体での支え合いを具体的に進めていく手がかりがある、という点であった。活かし方について以下のような話し合いがされた。

【他の本人・家族に】前向きになり、一人ひとりがもっと声をだせるきっかけをつくる。

声をだすことが、一緒にいい地域をつくっていくことになることを知ってもらおう。

【地域の人たちに】認知症の人の思いや願い、力を具体的に知ってもらい、ふだんのちょっとした支援を実際につくっていく。輪を広げていく。

【介護や医療の職員に】自分たちが日常の中で本人の声を聞くことの大事さを、具体的に振り返る。本人の意思の尊重、本人視点に立った支援を日常の中で推進する。

【行政、地域包括支援センター】：本人の声を事業や取組みに活かす。「小さい声」でも話し合いの機会をもつ

<今後に向けて>

- 声を無駄にせず、すぐできそうなことをやっという事で一致し、まず若年認知症の人の一言「バレーボールをしたい」を実現させる企画を進めていくことになった。「バレー好きな人が他にもいる」「認知症疾患センターの体育館が活かせる」等、お互い知らなかった情報を共有しながら、立場を越えて一緒に取組むことになる。
- 近隣市町で関心のある人(ケアマネジャー、認知症地域支援推進員等)がいる。今後は一緒に同席してもらい、各地域で本人ミーティングを広げてほしいと考えている。

＜特徴＞

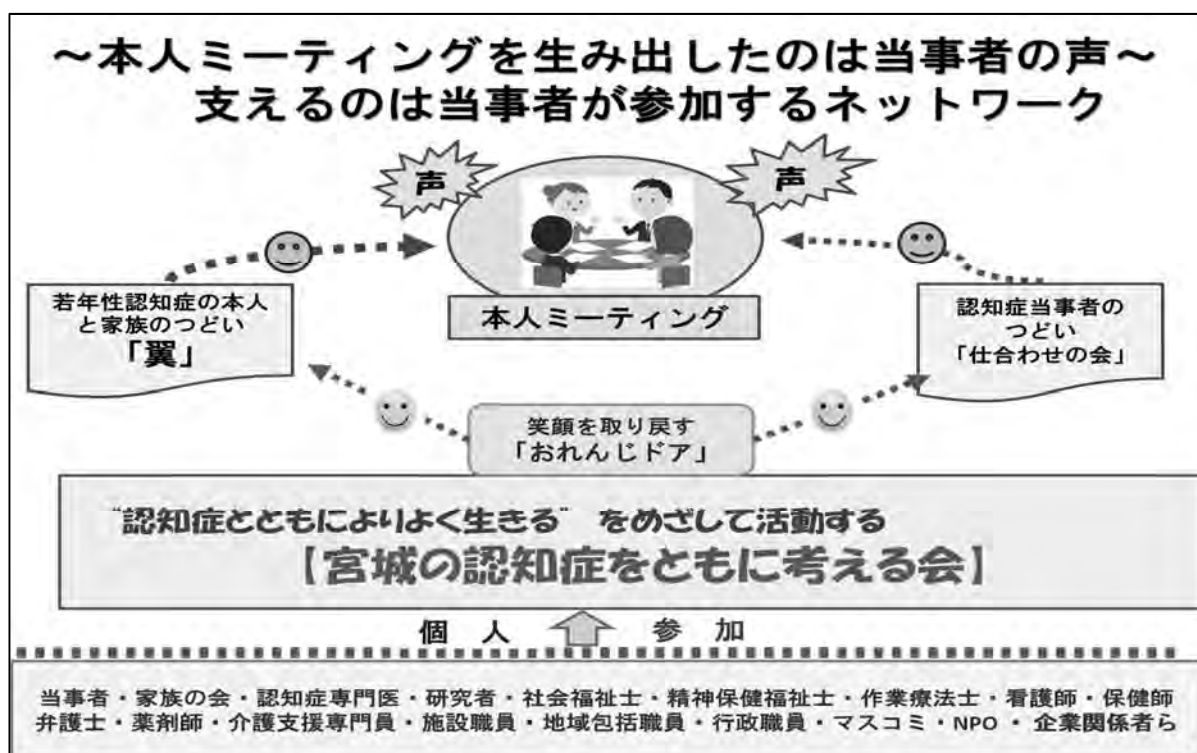
- ・“認知症とともによりよく生きる”をめざして活動する本人と一緒に取組もうという多様な人達の自主組織「宮城の認知症とともに考える会」が実施主体。
- ・「それまであった相談や集いの場に加えて、本人同士が話し合う場が必要」という本人同士の意見で、本人ミーティングがスタート。
- ・本人が、企画から実施、その後に至る活動のすべての過程で中心的な役割を果たしており、パートナーがそれを支持・支援している。
- ・参加者への声かけは、「集める」ではなく「集まる」ミーティングをスローガンとし、本人ミーティングの趣旨を説明し、希望者を募る。
- ・当日の進行役は本人。やってみること・継続することで、進行役を担える他の本人が増えてきている。
- ・本人ミーティングの開催をきっかけに、継続的に取組むための組織「ワーキンググループみやぎ」を立ち上げ、より多くの本人が声を発信し、本人の声をもとに本人が活躍する機会を地域の中で生み出す活動につなげている。

＜実施までの経緯＞

本人、家族のほか、多職種が個人として参加し、“認知症とともによりよく生きる”をめざして活動する「宮城の認知症とともに考える会」が取り組みの土台。この会で取り組む「おれんじドア」（本人による本人のための総合相談窓口）は、認知症の診断を受けた後の不安な時期に希望とつながる「出会い」の場となっているが、そこでの本人が主になることの大事さや本人がやれるという経験を本人ミーティングに活かした。おれんじドアが中心になって、若年性認知症の本人と家族のつどい「翼」や、認知症本人のつどい「仕合わせの会」に声をかけ、相談や集いに加えて、本人同士が意見を出し合う場が必要という話し合いから「本人ミーティング」につながった。

＜当日に向けた企画・準備の主な点＞

- 「集める」ではなく「集まる」ミーティングをスローガンに取り組む。
 - ・本人による本人への「呼びかけ文」を作成。本人・支援者が「本人ミーティング」の趣旨を説明し、参加を希望する人を募る。
 - ・おれんじドアとつながりがある本人のつどいの場で呼びかける。
 - ・家族には支援者から趣旨をよく説明し、本人の参加を後押しする。
- 集まりやすい場所や環境づくり等、本人と一緒に話し合い準備をする
 - ・一人でも多くが集まれ、話しやすくなるために何が必要か、話し合いを重ねながら、一緒に準備を進めた。会場の確保・会計はパートナーが担った。



<当日について：工夫している主なこと>

- ・ミーティングの主役は本人。そのことを伝えるために司会進行は本人が行う。
- ・当日話し合うテーマを参加する人に合わせて絞り込み、シンプルにする。
例：「日々感じている生活のしずらさや困りごと」「生活の希望や願い」
- ・今何を話しているかわかるように、テーマを書いた紙を用意し、掲げる。
- ・うまく言葉が出ない人がいても、じっくりと待つ。
- ・ありのままのことばの記録をパートナーが行う。
- ・家族は本人ミーティングに入らず、別室で懇談する。
- ・パートナーは両方の話合いに同席。

実施例 ※平成27年度の取組みをきっかけに、継続して実施している。

- 【会 場】公共交通機関で本人が行ける駅近くの市民活動スペース等を確保
- 【時 間】午前の1時間30分程度 休憩を挿み終了後に一緒にランチなど。
- 【テーマ】話し合うテーマをわかりやすく紙に書き出して話合いを進める
- <例> 「本人同士の交流は必要か」、
 「どんな場なら行きたいか」
 「医療・介護・行政窓口はどうあって欲しいか」
 「地域・家族の支援はどうあって欲しいか」

<参加した本人の声（抜粋）>

- ・家族がいろいろ言ってくれるのはありがたいが心配のしすぎ。
- ・できることを奪わないでください。失敗しても怒られない環境が大事です。
- ・安心してすごせる居場所が欲しい。
- ・私！認知症ですと言える社会に。
- ・自分が自分でいられる居場所がほしい。
- ・認知症でも一人暮らしの人の話を聞き、自分も自立・自律したいと感じた。
- ・役所に“もんく”ある。認知症施策を作る時に自分たちを入れたら変わるのではないか。私たち本人の声を行政に届ける仕組みが欲しい。



本人同士、家族同士の場に分けたことで、率直な話し合いに

<振り返り> *毎回、本人と関係者が一緒に実施

○本人ミーティングをよりよくするための主な意見

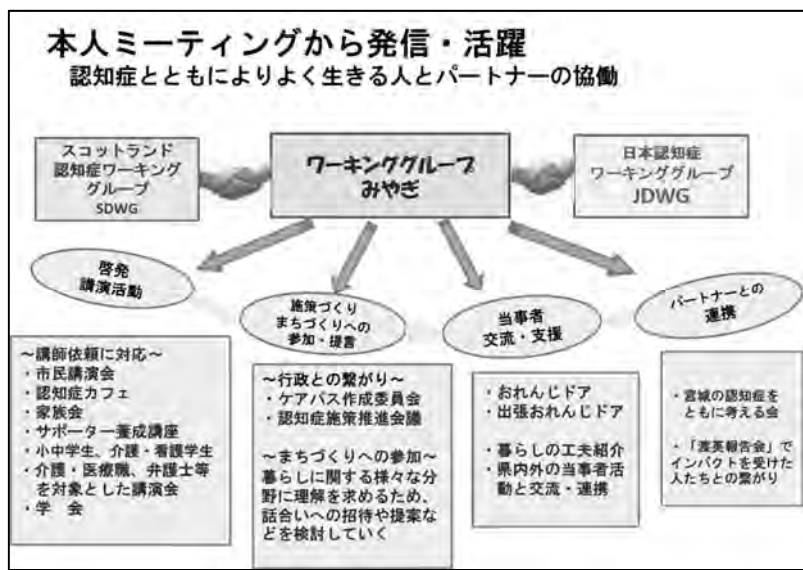
- ・話を深めるにはテーマを1つか2つに絞り、参加者のペースに合わせてゆっくり進行した方がよい。
- ・話し合うテーマを1題ずつボードに示したので参加者がテーマに集中できた。
- ・飲物はお仕着せでなく各自選ぶ方が良かった。
- ・パートナーの同席者は代弁せず、本人の話しを待つことが大切。
- ・休憩時やランチの時の方がリラックスして本音が出やすかった。
- ・ミーティングのまとめとして、話合ったことを参加者に確認した方がよい。

○今後の取組みや施策等へ反映するためのアイデア、意見

- ・本人同士で話し合うことができ、経験に基づく意見や提案をたくさんもっていることが分かり、“本人ミーティングはできる”と確信した。
- ・自分自身のなかに認知症の人への偏見があったと気づかされた。
- ・家族や支援者が本人の代弁をすることは、本人の声を奪い、本人を「話せない人」にしてしまっている。本人が自ら話すことをゆっくり待つことが大事。
- ・現在ある認知症カフェや居場所の多くは、集められる場、楽しい中心の場。本人同士が困っていること、感じていることを話し合い、話合ったことを地域や社会に発信していく場が必要。「つどい」から本人同士の話し合いの場に。
- ・体験を踏まえた本人の声は周囲や社会を変える大きなインパクトがある。
- ・一人の声より、多くの人の声为社会を変えていく力になる。本人ミーティングで出た声を集めて行政に伝え、施策の企画・立案に具体的につなげていく流れを。本人ミーティングのような場を、身近な地域の中でたくさん増やしていく。

<今後にむけて>

- ・単発の活動ではなく、本人同士が出会い、希望を感じながら継続的に話し合う機会をつくり、それをもとに本人とパートナーが協働しながら地域をよりよく変えていく一連の活動の流れを作り、強めていくことが重要。
- ・そのための推進組織が必要であり、仙台では、本人ミーティングに取組んだ本人とパートナー、関係者が中心となって、3月に「ワーキンググループみやぎ」を立ちあげた。地元にいる本人、家族、医師、ケア関係者、行政職員、退職した元保健師等がゆるやかにつながり協働しながら、本人の発信と活躍の機会をすでにある取組みと関連づけて推進していく。
- ・本人ミーティングに取組む他の地域の人たちや国内外の動きともつながりながら、本人の声・視点を重視した地域づくりをより発展させていく。
- ・仙台での本人ミーティングをもとに、平成28年12月から宮城県の事業として県内の本人交流会も始まり、今後は県内各地で本人ミーティングや一連の取組みが普及していくよう協力していく。



写真以外にもたくさんの人たちが、地域でつながり、フットワークよく集まり水平の立場で話し合いながら取組みを進めています

本人を中心に多様な立場の人が自主的に参加し活動を進めている
(認知症の人と家族の会関係者、医師、ケア関係者、行政関係者等)

＜特徴＞

- ・参加者がくつろいで話せるように、普段からなじんでいる認知症カフェの場を活かし、カフェの定例日に継続的に本人ミーティングを実施。
- ・市から委託をうけている「在宅療養なんでも相談室」を核に、相談に来た人を認知症カフェにまずつなげ、カフェの利用者になった人に、普段のカフェのスタイルを崩さない環境での本人ミーティングへ参加を声かけしている。
- ・認知症疾患センターに受診後間もない人や、配偶者の相談に来た家族自身が認知症であることが見つかった人など、比較的初期の人がつながり参加。
- ・認知症カフェを継続実施し、本人ミーティングの開催が蓄積されてきている。業務が多忙を極める中で継続性の難しさを感じながら、続けていくことを大切に、やりながらその工夫を一つ一つ見出している。
- ・市内および近隣市の地域包括支援センターの職員やケア関係者、行政、地域や企業のボランティア等にも声かけし、一緒に取り組む人を増やしている。

＜実施までの経緯＞

地域住民や市内の多職種、行政と共に在宅医療・ケアに長年取り組む地域のクリニックを母体に、グループホームや認知症デイサービス事業を実施してきたが、近年は地域連携型認知症疾患医療センターや初期集中支援事業、在宅療養相談、認知症カフェを受託して取り組んでいる。多様な事業に取り組む中で、サービスメニューを増やしても、提供側の視点でのサービスでは、本人や家族が必要な支援につながることの遅れが解消されず、地域で暮らし続けるための支援の不足が埋まらないことを実感し、本人の視点にたったの見直しや諸サービスの組み立て直しの必要性を強く感じていた。そんな中、本人ミーティングの情報を得て、地元の本人の声をもとに立て直しをしていく必要性を感じ、普段やっている認知症カフェの場を応用すればできるのではないかと考えて取り組むことにした。

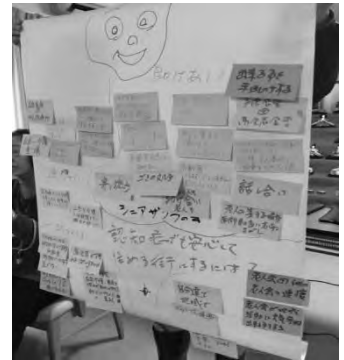
＜当日に向けた企画・準備の主な点＞

- ・認知症に限定しない町中の気軽な相談の場「在宅療養なんでも相談室」をつくり、つながった人を週1回定期開催している認知症カフェ「誰でもよりみち」に誘う。
- ・カフェの場でなじんできた人をカフェの一角で行う本人ミーティングに声かけする流れをつくる。
- ・語ることがややむずかしい人も無理と決めつけず、その人に関わっている専門職等とともに相談しながら本人が参加したいと思うような声かけを工夫。
- ・市内外の専門職、行政関係者に幅広く案内。



<当日の主な工夫について>

- ・カフェの一角(一番奥まった静かなところ)に、本人ミーティングの場所を設ける。
- ・カフェに参加している他の人たちと交わりつつ、自然と本人ミーティングに参加できるように誘う
- ・進行役(相談室のなじみの看護職)が一人ひとりの様子をよくみながら、本人同士が話せるよう問いかける。
- ・本人が語った言葉を付箋紙にメモする(記録係として地域の専門職が参加)。自分で思いを書ける人は自分で書く。
- ・付箋を模造紙に張り出し内容を確認・共有し、何が必要か、一緒に話し合う。



<参加した本人の声(抜粋)>

- 子どもたちを心配させると悪いから、免許を返納した。
- どこに行くにも、家族に車のお願いをしないと出かけられない。家族も都合があるから、お互いに気を使いながら。いつも、まだかまだかと。
- 家族に頼らないでも出かけられるといい。外でちょっと困ることがある。
- 旅行とか趣味とかいろいろやっていた。デイサービスとは別のもっと自由な場があるといい。

<話したことの地元の取組みや施策等への反映、アイデア>

* 出た意見を本人と関係者で検討。

- ・ 駅員さんに、本人の声を届け、認知症サポーターになってもらおう。
- ・ 外出時にサポートしてくれる人を増やす：各職域の人たち、そして小学生、中学生、高校生が認知症サポーターに。
- ・ 本人の意見をもとに掲示物をわかりやすくしていく：商店、トイレ、駅の表示、で乗り換え案内等。
- ・ レジで落ち着いて買い物ができるように、スーパーにスローレーンの提案を。
- ・ 休憩場所や困った時に駆け込める場所をつくる(商店やコンビニなどに知ってもらい、協力をお願いしていく)。
- ・ 駅やスーパーなどで、困ったり迷った時に、誰に尋ねたらいいかすぐわかるように相談にのってくれる店員を決めて、ワッペン等をつけるよう提案する。
- ・ 近隣の駐在所に困った時に助けてもらいたいと、本人と家族から事前に届け出しておく。



<今後について>

市役所・地域包括支援センター職員と一緒に考え、具体策を練っていく。

＜特徴＞

- ・通所介護事業者が実施主体となり、利用者に本人ミーティングの趣旨を呼びかけ、話し合いたいという人たちが参加して、普段からなじんでいる場で継続的に実施している。
- ・座って話すだけでなく、参加者が好きな活動をしたり、働いたり、と一緒に体を動かす中で出てきた本音をとらえ、話し合いで深めている。
- ・話し合いの進行役は、本人が行う。本人たちをよく知るなじみのパートナー（介護職員）が脇で補助をした。
- ・記録もできる本人が行う（職員も補助的に記録。）
- ・出た声を、即、日々の取組みに活かしていくとともに、行政や関係者に本人たちと共に伝えに行き話し合ったり、関係者や市民に本人たちが語る場/聞いてもらう場を積極的に作り、声が実際に活かされる働きかけをしている。

＜実施までの経緯＞

認知症になっても、「ひとりの人間として社会とつながる」ことを実現するために、デイサービスに通う認知症の本人たちが地域の「仕事」に携わり、労働の「対価」として謝礼を受け取る「有償ボランティア」の取り組みを日々実践している“次世代型”デイサービスを拠点に、平成27年度に本人ミーティングを実施。本人たちが普段から本音を語り、それらはある程度わかっているつもりであったが、本人ミーティングでは予想外の声も少なくなく、本人ミーティングを継続的に行っていく必要性を感じた。社会とつながる日々の中で、感じることもたくさんありそのときどき仲間とともに語り合う場面をつくっている。



拠点となっている次世代型デイサービス
DAYS BLG！



普段から本人たちが決め、活動する職員はパートナーとして活動を共にしながら、必要最小限の支援を行う

<当日に向けた企画・準備の主な点>

- ・本人が思い思いの意見を語り、本人同士で「選択して」決めることを本人たちも、デイサービスの職員もあたりまえのこととし、それを日常的に行っている。そのスタイルの延長線上で本人ミーティングを行うことが、本人たちが自然体で語り合える素地となっている。
- ・本人たちが普段の中で悩んだり疑問に思っていること、おかしい・何とか変えな
いと思っていることなどをつぶやいたり、反応したりしている言動にアンテナ
をたて、それらをキャッチした時に、みんなで話し合ってみようと声かけをし、
話したい人たちで話し合うようにしている。

<当日の主な工夫>

- ・普段のなじみの環境や本人同士、本人と職員との関係性を活かして、できるだけ
自然に、そして楽しい雰囲気です。
- ・進行役は、元の仕事で進行役に慣れている本人が行い、参加者にどんどん振って
本人同士が自分たちで話しあうモードを作った。進行役の脇に職員がサブの進
行役としてつき、本人同士で話し合いが進むよう最小限の補助や促しをする。ま
た、進行役自身も話せるように、サブ進行役が進行役へ適時振るパターンを作っ
た。
- ・大事なキーワードが出た場合は、サブ進行役がその言葉をそのまま他の参加者
に振るようにし、本人同士の話し合いが深まるようにした。
- ・言葉の出にくい人も、出るのを待つ。本人の経過や現在の状況をよく知るパートナ
ーがその人が語る呼び水になるような言葉を最小限かける。
- ・記録は、それが得意で書きたい人、書ける人が行う(職員も補助的に記録)。
- ・話し合いの終わりに、進行役とサブが話し合いの主な点をみんなに確認する。内
容によっては、今後どうするか、次につなげる具体的なステップを話し合う。

<参加した本人の声(抜粋)>

- ・働きたい。認知症になってもできないこととできることがある。それを見極
めて働けることができるよう、会社や社会が変わらないといけない。
- ・高い給与を望んでるわけではないので、地域の中に働ける場がかならずあるは
ず。働くことで、役立てることだってあるはず。
- ・楽しくやっていくことが何より。先のことより今日を楽しく、今を味わって生
きる。
- ・医師にあしらわれるようだと言腹がたつ。よく聴いてくれ、役立つ助言がもらえ
るとありがたい。痛みがあって町の医者に行った時、ちゃんと診て治療してほしい。
- ・道に迷いGPSで助けられたこともある。使い勝手のいいものになるといい。
- ・自分たちが町にでることで変わっていくと思う。思ったことは伝えていきたい。

<話したことを地元の取組や施策等への反映、そのアイデア>

- ・「やりたいこと(特に仕事)」を実現していくために、本人たちと町に出向いて声を直接伝え、理解し受け入れてくれるところを一つ一つ開拓している(受け入れてくれる場/働ける場のバリエーションが広がってきている)。
- ・行政や地域包括支援センター等に、本人ミーティングで出た内容を適宜伝え、認知症施策や地域づくり、専門職の対応力向上に活かしてもらっている。
- ・本人ミーティングで語られている声を内部だけのものにせず、広く地域社会の人に発信していくために、市内外のイベントや講演会、セミナー等に本人とパートナーと一緒に出向き、本人が直接語り伝える機会を積極的に作っている。本人が新たな活躍をして自信を高める機会になっている。
- ・本人からでた環境やモノの不都合や不便、こうあって欲しいという意見を関連する職域や企業の人に伝え、改良や開発につなげていってもらっている。

<今後について>

- ・継続すること。
思っていることを、その時はうまく伝えられなかったり、思い出せないことも起こるので、継続的に話し合いを行うことで、真意を語れたり、あいまいだった希望や要望が明確になる。
- ・本人たちが関心の高いテーマについて話し合う。
漠然としたテーマではなく、暮らしの中で感じた身近で具体的なテーマひとつひとつについて本人同士が意見を交わす場面をつくっていく。
社会的に話題となっていることに関心の高い人たちもいる(最近では。本人はどんな体験をし、どう考え、何を必要としているのか、社会的に話題になっていることについて本人同士が話し合う機会を作り、それらをまとめて発信していく)。
- ・本人たちが話し合う場面を直にみてもらい、触れてもらい、話し合う機会を作る
偏見が根強く、発信しただけでは認識が変わらない人たちには、本人たちが語り合う場に招き、普段の活動も含めて実際を見聞きしてもらい、本人たちと直に話し合う場面をつくる。
- ・本人ミーティングを市内や各地のあちこちに増やす
本人ミーティングのような場を自分でも作ってみたいという人に来てもらって実際をみてもらい。
DAYS BLG!の本人たちの中で、本人同士が話し合う機会を他のところにも広げたいと思っている人が、他の地域の集まりに出向いて体験を語ったり、参加できるように後押しや調整をする。
(実際、町田市内では、本人同士が集まって話し合う「本人会議」が自主的に次々と立ち上がっている。)

＜特徴＞

- ・実施主体は地域の総合福祉施設。その中の小規模多機能型居宅介護を利用している人たちに参加を呼びかけ、いつも顔を合わせているメンバー同士が話し合いを行った。
- ・特別に場をもうけなくても、普段からなじみの通いの場で、いつもの雰囲気を活かして気軽に実施した。
- ・いつもの対話をベースにしつつ、本人ミーティングの趣旨を伝え、本人同士が一步深く話し合う機会になった。
- ・本人が介護職員とともに、地元住民の集まる場にでかけて、認知症に関する地域の理解を深める取り組みを検討するなど、地元での新たな展開につながった。

＜実施までの経緯＞

本人ミーティングに関心はあったが、具体的に動き出すきっかけがなかった。第一回のワークショップに参加し、すでに実施している地域からの報告を聞いたことで、やることのねらいややってみるものの意義や成果の大きさを目の当たりにし、自分の地域でもぜひ取り組み、定着させたいと思った。

ワークショップで具体的な運営方法や工夫を具体的に知ることができ、特別なしかけをしなくても、法人の小規模多機能型居宅介護事業を活かし、まずは小さくてもスタートをさせることにした。

＜当日にむけた企画・準備＞

- ・参加者は、小規模多機能型居宅介護事業の利用者として、本人同士が話しやすい雰囲気になるよう、普段からなじみの人たちを候補とした。
- ・参加の呼びかけは、なじみの職員が行い、本人ミーティングの趣旨をわかりやすく説明し、参加してみたい気持ちを確認した。
- ・介護者・家族には書面にて趣旨を説明。本人の言葉をありのまま記録する為、ビデオ撮影する事の了解を頂いた。
- ・進行役を参加者となじみの事業所の管理者、同席してサポートする役として、参加者のことをよく知るなじみの職員がつくこととした。職員間で本人ミーティングのねらいや本人同士が主となる話し合いであることをしっかりと確認しあった。
- ・場所は、リラックスしつつ話し合いに集中できるように、なじんでいる施設の中でも特に静かで、日当たりがよく、くつろげる相談室を使用することにした。

＜当日の主な工夫＞

- ・特別のこととして職員の方が力んで緊張感を与えないように配慮し、いつもの通りの自然体で、リラックスした状況で本人から発言が出るようにした。
- ・通常通りの過ごし方で、昼食後の午睡の後に、相談室へ案内することとした。



小規模多機能型居宅介護事業所内の相談室（日当たりの良い部屋）に、3人掛けソファと椅子を5つ配置。

- ・話し合っている内容が、皆にわかるように、見える場所にテーマを書いて示した。（仙台チームのアイデアを取り入れた）。
- ・本人同士で話が進むよう、本人同士の関わりを大切に見守った。
例：・他の人の話に深くうなずき合い、本人同士で話し合い、いつも以上に深くつながりあっている様子がみられた。
・同じ話題を繰り返す人がいたが、職員は介入しないでいたら、「いいよー」と言ってくれた本人がおり、その一声で他の本人からも「いいよ、いいよ」の声が出て、和やかに話し合いが進んでいった。

<参加した本人の声(抜粋)>

- ・夜がとても不安。困ることがあると(職員に電話をして)夜でも話を聴いてくれるので、一人でも安心して家で暮らせる。
- ・ここがあるとと思うだけで安心。
- ・一人だと不安。一人暮らしの人はみんなそうだと思う。困っていると思う。
- ・不安でどうしようもない日がある。そういう日に誰かがいてくれるといいんだが。
- ・ここに来れる日はいい。(毎日は利用できないので)毎日来れるようだといひ。
- ・通いの日を忘れてしまう。新聞やテレビをみて忘れないように気をつけているけれど、やっぱり忘れる。そういうのを教えてくれると安心。
- ・子供に迷惑かけると悪いので、車の運転免許を返した。外に出れなくなって寂しい、本当に不自由。出かけたたい。
- ・子供には遠慮があつて、なかなか頼めない。出かけられるようになんとか・・・。
- ・(亡くなったりして)友達がいなくなっていく。誰か話し相手がほしい。
- ・地域のサロンで「私の手帳」かいている。私はもう書けないけど、私の「大事なこと」の話を、みんなが涙を流して聞いてくれた。本当にうれしかった。
- ・(通所している)仲間の笑顔で元気になる。仲間が大切。
- ・こうして話せてうれしい。人と話せることが楽しい。
- ・またこんな話合いがしたい。

<話したことを地元の取組みや施策等へ反映するアイデア>

本人ミーティングで出た声を職員間で共有し、声をもとにできること・やれそうなことについて話し合い、動き出せるところから取組みを進めていく。

① 普段から不安についてよく聴き、関わりや支援の見直し・補強

不安を抱えていることをわかっているつもりであったが、本人同士の話し合いで語られた一人ひとりが抱えている不安の深さや暮らしに与えている影響、不安になる場面や内容等を具体的に知ることができた。今回の参加者、そして利用者一人ひとりの不安を見過ごしたり避けずに、不安についてよく聴くこと、そこから暮らしの中で一緒にできること、支援やサービスを見直したり補強すべきことを丁寧に積み上げていく。

② 市や地域包括支援センターと共有し、事業や施策に反映

本人の言葉から、夜間の支援体制、介護サービス利用日以外の谷間の時間への支援、車の運転免許の返納前後の支援、家族支援のあり方など、今ある事業の見直しや強化、新たな支援開発につながる手がかりが多くあった。

また、こうした本人ミーティングの継続的な開催や市内の他地域での開催を行っていくための話し合いを市や地域包括支援センターの人たちと行っていく。

③ 地域の多様な人びとに伝え、一緒に考える機会を

今回本人たちが語った内容を一人でも多くの人に知ってもらおう。一緒にできることを考えてもらう。

地域の住民⇒認知症サポーター養成講座、地域づくりセミナー、敬老会等

例) 免許を返した人を、誰かちょっとした手助けをできないか

医療や介護の専門職⇒研修や会議、集まりの場で

④ 本人が地域の人々に、語る機会を

本人が語った体験や思い、願いを、本人が直接、地域の人に語り、聞いてもらう集まりを開く（小規模でも）。本人が話すことが、地域の人たちの啓発になる。

⑤ 地域で問題とされている人の話を聞く、本人と一緒に相談する

今回のミーティングを通じて、本人のことは本人に聞かないとよくわからない、本人なりの意向があるということが再確認された。

ご近所とのトラブルが起きて地域で問題とされている人に関して、周囲だけで相談したり本人抜きで対応策を考えてしまいがちである。そうした場合こそ、本人の思いや考えていること、願い等をよく聞くようにし、周囲の人にも本人が話す機会をつくり、どうしていくかを一緒に相談しながら進めていくやり方を実践していく。

＜特徴＞

- ・平成27年度の取り組みを経て、市の認知症ケアパスづくりに本人ミーティングを活かすという具体的な目的として掲げ、本人とともにみんなで考える会議を開催。
- ・本人の声をもとに、本人の視点にたった認知症ケアパスのあり方を共に考え、一緒に作っていくために、本人とも交流のあるキャラバンメイトや相談業務に従事する福祉相談センターの職員にも参加を呼びかけた。
- ・話し合いの場だけではなく、市職員と地域包括支援センター職員が、普段から市内の認知症の本人の活動拠点に出向くようにし、本人たちの語りを傍らで聞きながら暮らしの中での思いや意見を具体的につかみ、それらも認知症ケアパスに反映させていった。

＜実施までの経緯＞

市ではこれまでも、認知症の一人の声を大切にしながら支援や地域をつくる取り組みを進めてきていたが、平成27年度の本人ミーティングで本人の声が十分に聴けていないことが課題として浮かび、自分たちのまちの現状にあわせ、平成28年度は「本人・家族の声をきく」という基本に立ち戻る方針を立てた。本人・家族の思いが尊重された認知症ケアパス作成をめざし、7月～8月にかけて、地域包括支援センターが作成したリストをもとに、28名の方へのヒアリングを行った。取りかかりとして、認知症の本人から、認知症の疑い～現在に至る経緯について、個別の進行度合いや年齢層、発症してからの期間などを考慮し、詳しい聞き取りを地域包括支援センター職員が行い詳細な整理を行った。聞き取りを通じて得られた本人の声から、容態が変化し生活に変化が見られるとき共通した悩みや不安を持っていることを知ることができた。

＜認知症ケアパスを作るための会議を本人と共に開催＞

集めた本人の声を認知症ケアパスに具体的に反映していくために、「認知症を伝えるマップをみんなで考える会議」を開催し、本人とともに行政職員、地域包括支援センター職員（認知症地域支援推進員も）、本人とも交流のあるキャラバンメイト、福祉相談センターの職員とで意見やアイデアを出し合った。

＜出た意見と活かし方＞

認知症ケアパスに本人の声をふんだんに盛り込む

○冒頭に、「私(本人)の体験談」を掲載する

- *一般論の知識や資源の紹介ではなく、診断前後から受診や相談につながった体験等、認知症になってから生きていく経過（パス）を、本人

の実体験として伝える。

*前向きに暮らせていけること、実際にそう暮らせていることを、地元の本人の言葉で伝える。

*運転免許を返納後に工夫しながら暮らしている体験など、今、住民や関係者の関心が高いテーマについて、知識だけでなく、生活していく実際やできることを伝える。

○本人からの住民や関係者への願い(声)を、メッセージとして掲載する

例) 散歩や送迎をお願いしたい

一緒に卓球を楽しんでくれる人がほしい

関わってほしい、あいさつや声かけをしてほしい、

見守ってほしい、何かあったら家族に教えてほしい。

*具体的な声を通して、ちょっとした支援の大切さ、できることがあることに気づき、動き出してもらうために。

○紹介する資源の箇所で、その資源に関して本人が体験したこと、思いを掲載

例・医療機関：受診した時に勇気づけられた医師の言葉

悩まずに相談に行こうという本人のメッセージ

・認知症カフェ：人と触れ合い楽しんでいる実際を本人の言葉で伝える

・一緒に楽しめるイベント：本人が参加できる機会が地域にある

○本人の声とともに本人の実際の姿の写真をたくさん掲載

認知症ケアパスの経過にそって、こんにも生き生き暮らしていけることを知ってほしい。*本人、関係者の共通した思い

<本人ミーティングの今後の取組みや施策への活かし方>

○会議室の中だけでなく、本人同士と一緒に地域に出たり、交通機関と一緒に利用したりしながら、戸外で本人ミーティングを開催。

▶地域の実際の環境や人が、本人からみて本当にやさしいか、

やさしい町になっているか、本人同士で点検・評価し、一緒に考える

○本人視点にたったまちづくりを丁寧に、具体的に進めていくための方法

として、様々なテーマや場面で本人ミーティングを開き活かしていく。

○家族の声も十分には聴けていない。家族同士のミーティングも開催していく。



＜特徴＞

- ・ NPO 法人が主催している週 1 回の集まり(の場)で、継続的に話し合いと本人の声を活かした活動を実施。
- ・「仕事をしたい」、「同じ認知症の人と話したい」という共通の目的を持つ人が参加。
- ・この場の存在を、認知症疾患医療センターや医療機関、介護関係者、行政、地域に広く知ってもらいながら、この集まりへつながる流れを作ってきている。また、この場から必要なところへつながる流れもできてきている。
- ・毎回 6 人程度のなじみのメンバーなので、ざっくばらんに、突っ込んだ話し合いがなされている。
- ・進行役は、NPO 法人の運営者(看護師)。参加者の背景や経過、現在の状況をよく知り、話し合いが深まるための呼び水にしている。

＜実施までの経緯＞

認知症の人と家族の支援、本人活動支援、認知症ケア関係者の研修やスーパーバイズ等に継続的に取組んできている NPO 法人「認知症の人とみんなのサポートセンター」が活動母体。若年性認知症の本人や病気や介護などのために離職した人等とともに、生きがいとなる「仕事の間」タックを設立(タックという名称も、本人と話し合って決めた。スウェーデン語で「ありがとう」、「ヨットで帆の向きを変える」という意味もある)。現在、タックでは、週 2 回本人同士が集まり、普段から話し合っているが、話し合いをより集中して行い(深め)、本人の声を集約・発信していくための機会として、継続的に本人ミーティングを実施している。

＜企画・準備＞

○参加者

- ・タックに参加している人たち。若年性認知症の人であり、「仕事をしたい」「同じ認知症の人と話したい」という共通の目的を掲げて、参加を募っている。
 - * 具体的な目的を明確に掲げ続けていることで、参加者が各方面からつながって集まってきやすい。
- ・タックにまず参加し、面識があることを基本にしているが、タイミングによっては、ミーティングの開催間際に相談を受けたばかりで面識があまりない人でもミーティングに誘いそれを仲間と出会い語り合うきっかけにする場合もある。
- ・原則本人のみ。場合に応じて本人をサポートする人が同席する場合もある。



○進行役、アシスタント

進行役は、参加者とこれまでつきあいがあり、関係ができ、普段から相談・支援にのっている看護師（NPO法人の代表）。当日の準備や運営のアシスタントとして、日頃から活動を共にしている認知症ケアの専門職等、毎回数名

○開催場

参加者がなじみのタックの開催場所（大阪市内2か所）。

<当日の主な工夫>

- ・参加者がまず仕事(収入も得る)と一緒にやって、やる気や楽しさを高める。
- ・サポートする人たちが、本人ができることまでやってしまうように。本人達が自分で選んで自分でやり、自主的に参加している意識を失わないように配慮。自分たちの居場所を一緒に作っていくようにしている。
例：会場設営、お茶出し、食べ物や物品の準備等
- ・今、何を話しているのか、何が話し合われているのか、を参加者がわかるようにパソコンにうちこみ、スクリーンに表示しながら話し合う場合もある。
- ・参加者同士が話し合うことを基本に、進行役は一人ひとりが語れて話し合いが深まるように、適宜、問いをなげかけたり、話された内容をみんなで確認しながら、話し合いを進める。
- ・本人たちと相談しながらやり方を考えている。



まずは一緒に、働く。

商品として、くるみぼたんなどを作る。

自然と会話が弾む。



話し合内容をスクリーンに表示
今、何を話すのか、どんな意見が出たか等を参加者に示し
みんなが話しの流れについて
いけるようにサポート

<参加した本人の声(抜粋)>

- ・若年性認知症もあることを知ってほしい。高齢者ばかりの病気ではない。
- ・仕事をしてきたので、仕事がしたい。
- ・できることと、できないことがわかりにくい。
- ・ちょっとしたサポートで、仕事ができるのではないかと思う。
- ・サポートしてもらって仕事を続けたい。
- ・できることがあればやりたいが、みなに迷惑をかけるのではないか。
- ・できないということを感じることも不安。
- ・認知症の人同士で話し合う場所がほしい。
- ・専門家の話も聞きたい。
- ・在職中に診断を受けることを勧めたい。クビにされるのを恐れなくて診断を受けよう。
- ・怖いけど、そこで諦めると、できることもできなくなるから、チャレンジしよう。

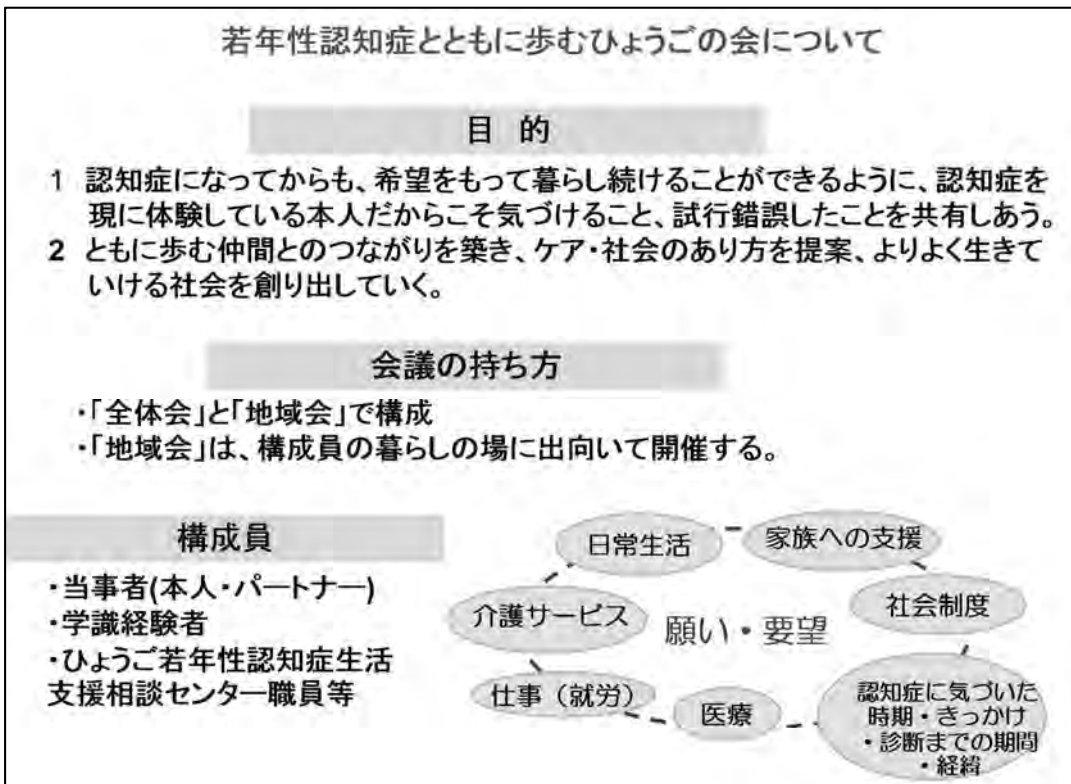
<話したことを地元の取組みや施策等へ反映する実践、アイデア>

- 話し合いの中で出た仲間同士の励ましや他の人へのアドバイスを、まだ仲間につながれていない人に届けるために、メッセージとしてタックのチラシに盛り込み、ホームページにも掲載。
- 話して出た声をもとに、働くことや支援に具体的につなげていく。
- 参加者のより身近な地域で、本人の交流会ができるよう/増えていくよう、各地域の関係者と話し合いや取組みの応援をする。
- 得られた声は、機会をとらえて行政に伝えている
 - *行政関係者をオブザーバとして話し合いに呼ぶ。
(本人が話し合っている場に参加してほしい。
施策に活かせる具体的な声がたくさんでている。)
- 自分たちの思いや働けるということを多くの人にリアルに知ってもらうために、本人が公の場で発言したり、行政・専門職の集まりに参加して意見を述べる機会をつくる。参加したい人をサポートする。
- 本人が声をしっかりだせることをサポートするための人材を育成する研修等を開催する。

- ＜特徴＞
- ・ 県からの委託をうけて、県社協が設置した「若年性認知症生活支援相談センター」が事務局をつとめる「若年性認知症とともに歩むひょうごの会」が取組みの母体。（この会では、「当事者」は本人とパートナーを指す。）
 - ・ 県の「ひょうご当事者グループ推進事業」等を通じて立ち上がった県内各地の当事者組織のメンバーがひょうごの会につながり、本人同士が出会い、話し合いが継続的に行われている。
 - ・ 県全体での全体会と、当事者の暮らしの場での地域会の二種類の集まりで、話し合いがなされている。
 - ・ 集まりや話し合いの企画・準備段階から本人が支援者とともに取り組む。

＜実施までの経緯＞

県が推進する認知症支援体制のうち、「若年性認知症支援対策」の充実を図るため、県からの委託をうけて県社協が「若年性認知症生活支援相談センター」を設置。県内で活動する家族会・サロンが情報交換・交流を目的に結成した「家族介護者連絡会」等と連携するなか、認知症の啓発フォーラムを開催。県外から講師に招いた認知症の本人が、自分が声をあげ当事者組織を立ち上げ、希望のある地域社会を創る活動を自らしているという話をきいた地元の本人が「自分もそうした活動をしていきたい」と発言し、その声をきっかけに「若年性認知症とともに



歩むひょうごの会」が誕生。当初から、本人同士の話し合いや提案・発信が会の活動目的であり、すでにそれらの取組みが動き出していた。東京で開催されたワークショップでの意見交換も活かしながら、ミーティングを実施した。

<企画・準備>

- ・介護家族者連絡会に協力依頼し、初期の認知症の人への呼びかけやパートナーとしての役割も担っていただく。
 - ・集まりや話し合いの目的固めや内容等の企画・準備段階から本人が参画。
 - ・話し合いだけを行うのではなく、本人らがやりたいことを一緒に楽しむ時間を過ごす。
 - ・場所は、特に地域会では、室内だけではなく、参加者がリラックスして気持ちよく過ごせる地元の戶外空間も活かした。
- また、机に座って話す形だけではなく、和室で車座になって話し合えるような場で開催することもある。



年に数回ひらく全体会にて。
各地からメンバーが集まり、「ひょうごの会」の運営や随時関心のあるテーマについて話し合う



地元の戶外で開催



和室で開催

<当日の主な工夫>

- ・前半にミニ講座や地域の散策等をいれ、集まって一緒に学び、寛ぎながら参加者同士が打ち解け、つながりあえるようにした。
- ・話し合うテーマを1回にひとつにし、テーマを明確にした。 例) 就労、外出
- ・実例を本人や支援者に話してもらい、話し合いの呼び水にした。
例：就労の実践報告を聞いて、話し合いに入る
- ・本人同士の意見が出にくい時：本人をよく知るサポーターが少し代弁し発言につなげる

<参加した本人の声(抜粋)>

- ・自分ひとりではない、同じ仲間と出会えて嬉しかった。
- ・自分は動ける。しゃべれる。ありがたいなあ。しかし、病気になって世間がそれを許してくれへん。一步引いてや。地域のつながりが減った。
- ・同級生の存在が心強い。本当に心強いんです。
- ・昔の同僚が、山に登ろうと誘いにきてくれるのがうれしい。
- ・仕事を辞めて家にいることが多くなった。散歩ですずめの鳴く声を聞きながら、ある意味寂しく、ある意味楽しく。
- ・サポートしてくれる友人にも、みな仕事や生活があるのでしかたないが、出かけた時の、同行してくれる人がいない時、家に一人でいるのは寂しい。
- ・仕事を辞め生活リズムが変わり、体調にも変化があった。
- ・いろいろな人との出会いが刺激になる。決まったことだけをするのはつまらない。いわれたことをするのではなく、自分たちで考えたことをするのがよい。
- ・最初に出会ったパートナーと「後ろを振り向かず、前を向いて歩いていこう！」と約束したんだ。病気に負けず、毎日を楽しみたい。
- ・カフェを通じて、気ままな感じで盛り上げ、みんなで、勇気をだして、偏見のない街になるよう頑張っていきたい。

<話したことを地元の取組や施策へ反映する実践、アイデア>

- ①本人の声に耳を傾けること、若年性認知症のことをもっと知ってもらうこと。
⇒市町行政、市町社会福祉協議会、健康福祉事務所（保健所）、地域包括、介護サービス事業所、障害サービス事業所等へ、伝えている。伝え続ける。
- ②地区に出向いて、地域の人たちに本人の声を伝える
連続講座を開催し、地区で話し合う。
⇒地域支え合いグループが誕生。
居場所づくり（カフェ）、外出時の付き添い支援、啓発活動に展開。
- ③就労の場に出向いて、就労の継続支援。
- ④若年性認知症の人たちが集えるカフェの開設。
- ⑤家族が集まり支え合う場をつくる。
- ⑥当事者の声をまとめた小冊子「いまを生きる いまを歩く」平成27年度版の今年度（平成28年度）版を作成。
⇒会議・研修・広報活動などのツールを活用し、より多くの関係者に活かしてもらう。



＜特徴＞

- ・町健康福祉課と、地域包括支援センター（直営）が本人ミーティングを開催。
- ・平成18年度から養成をはじめた「介護予防サポーター」とともに取り組む。
- ・全国のワークショップに参加したことを通じてイメージができ、先行地域を参考に工夫をとりいれて、短期間で本人ミーティングの開催にいたった。
- ・本人ミーティングの企画会議から、本人・家族が参加。
- ・介護予防サポーターが、認知症の本人のサポーター・支援者となり、さまざまな立場の方が参加をよびかけた。
- ・この取組みを通じて、本人とともに「すぐに一緒にとりくめること」をまとめた。

＜実施までの経緯＞

綾川町では、平成18年度から「介護予防サポーター」の養成を開始（現在約400名）。「まなびあい講座」（月1回、8回コース）に参加した住民が、町内小地域単位で活動。主な活動は、「いっぷく広場班」（閉じこもり、孤立予防）「お話しボランティア班」「資源マップ班」「転倒予防班」で、介護予防の意義や知識普及への協力、ひとり暮らし高齢者への声かけ・見守り、認知症高齢者の見守りや家族への声かけ等、高齢者の孤立予防や介護予防のための住民力として存在している。こうした住民力を活かしつつ、本人自身が前向きに暮らしていけるための本人視点の取組みの必要性を感じ、本人ミーティングを開催したいと思った。

＜当日に向けた企画・準備＞

- ・当初、本人ミーティングのイメージがつかめなかったが、ワークショップに参加したことを通じてイメージができ、先行地域の工夫をどんどん取り入れることにした。
- ・町健康福祉課地域包括支援センターが推進役となり、現在さまざまな活動をしている「介護予防サポーター」とともに、取組みに着手。
- ・ちょうどその頃、近所の方にいわれ地域包括支援センターを訪れた本人（3年前に診断）と家族と出会う。さまざまな話の中で、本人同士が集まり話し合っ活動していくこの取組みについて声かけしたところ、本人から「目の前が開けた気がした」と。
- ・その後、全国の第2回ワークショップに本人・家族も参加。ここで本人は、各地から参加していた本人と出会い、話し合い意見交換することができ、意識が前向きになっていった。
- ・これを経て、地元での本人ミーティングの企画会議に、本人・家族が加わることになった。



地元での企画会議



本人・家族が企画書を作成

- ・企画会議の際、本人と家族自ら、企画書を作成して参加された。本人ミーティングの名称は「わくわくミーティング」。この名称も話しあいで決定した。
- ・多くの方に参加してもらえるよう多様なルートで声かけをしてもらった。

定期的集まる場から：元気教室

個別に声かけ：認知症相談、ケアマネからの紹介

各事業所から：デイサービス等の利用者

主治医から個別に：医療機関の利用者等

社協から：いきいきサロン

地域包括から：お話しボランティア、総合相談

- ・いきなりではなく、話し合いの前にみんなで楽しく、元気がでるような時間に行おうということで、まずはお好み焼きを一緒にやることになった。

(職員は最初、クッキーづくりを想定していたが、本人からクッキーに難色。

お好み焼きがいいという本人の声からお好み焼きになった(当日大好評)。

<当日の主な工夫>

- プログラム：集まった人が自然とふれあい、和み、元気が出てから話し合いに入り、わくわくしながら話し合っ、最後にまとめるシナリオを考えた。

- ・自己紹介、挨拶
- ・お好み焼きを焼いて食べよう！ *まずはここから
- ・わくわくミーティング (本人ミーティング)
- ・まとめとこれから

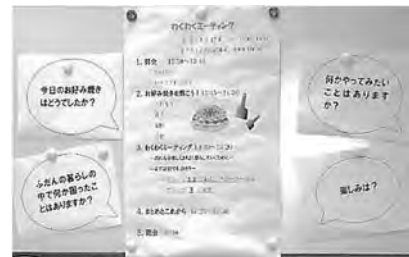
- 当日の参加者 (本人10名) なじみの関係を考慮し2グループに。

うち家族が参加4組、なじみのサポーターが、本人のパートナーとして参加。



お好み焼きづくりからスタート

どちらも全国のワークショップで先輩地域から学び取り入れた。



話すことをいつでも見えるように掲示

○参加した本人からの声（抜粋）

＊本人の声を記録する職員を1名確保。そっと傍らで、ひたすらパソコンに本人たちのありのままの言葉を打ち込んだ。この記録が後にとても活きた。

【集まることはどうですか？】

・やっぱりふつうにね、気を使わなくていい。他の人やったら、気の鋭い人はすぐ察する。俺は隠さんけど、一言いわれたら、気になることもある。ちょっと離れたところでね、おかしいんちゃう・・・と言われた。そういうのは聞こえる。それは堪える。

【この会がどんな会になっていったらいいですか】

- ・今日みただったらええんちゃう。みんなで話しができた。あまり取り繕わなくてもいいからね。
- ・みんなと一緒にいるのは、楽しい。

<話したことを地元の取組や施策へ反映する実践、アイデア>

- ・開催した翌週、熱気が冷めないうちに、当日の感謝で振り返り会を開催。企画から参加している本人ご夫妻も参加。振り返り会の中で、多くの気づきやすすぐできること、計画的にやるべきことがみえてきた。振り返り会の開催自体が、本人ミーティングを施策に反映する大事な一歩。

<これからのむけて>

今回は、それぞれの方が日頃馴染みのあるサポーターさんやケアマネの方といっしょに話しあいを行った。声かけから当日の準備まで、悩みつつ、戸惑いつつ進めてきた。

本人同士が集まり、話すことで、普段は聞けなかった言葉や思いを知ることができた。あまり思い悩まず、やってみることでわかることが沢山あることも知った。これからは、できるだけ本人同士が、話しあえる、話やすい場にしていく工夫を重ねたいと考えている。そんな中で本人さんから発せられる言葉を、様々な立場で、それぞれの活動や取り組みに活かしていきたい。

上司の理解があったことで非常に取組みやすかった。上司自ら本人ミーティングと振り返りに同席し、本人の声にじっと耳を澄まし、本人の声が大切であることを行動で示してくれた。職員のやる気と先に進む勇気となった。

（地域包括支援センター社会福祉士）

＜特徴＞

- ・若年性認知症の本人の声（認知症の本人が語っているのをみて自分も同じ思
いだ、話したい）から始まった本人交流会、そこから誕生した集まり「ぼやき・
つぶやき・元気になる会」を土台に取り組む
- ・方針は、いつもの会のスタイルを崩さない。いつもの会と同じように。
- ・本人ミーティングの当日だけでなく、日々のかかわりの中での声も大事にし、
それを理解した介護専門職が、当日の進行役。
- ・当日話したことを、さらに日々のかかわりに活かしている。

＜実施までの経緯＞

「自分の病気はアルツハイマーだと知っている。治るものなら治りたいよね。
家では“母ちゃん”に、ついカーッとなってけんかしてしまう。いつも後でしま
った～と思うけどね。「ごめんね」「悪かったね」と言いたいと思うけどね。
以前テレビで、同じ病気の人が出ているのを観たよ。きっと同じ気持ちだと思う
から、しゃべってみたい。」若年性認知症の本人のこんな言葉から始まった本人
交流会での積み重ね、そこから誕生した集まり「ぼやき・つぶやき・元気になる
会」を土台とした。

認知症の仲間と、登山やボーリング、小学校での絵本教室に協力する等、地元
でさまざまな時間を共有するほか、他の地域の仲間と会いにいて、イベント
を通じて時間をともにすることで、お互いが話しやすくなっている。



自分たちの思いを伝え、
社会に参加するぞ！

方針は、いつもの会のスタイルを崩さない、いつもの会と同じように。これを取
組みすべての柱とした。

＜企画・準備＞

参加のよびかけも、いつもと同じく、会のメンバーから声をかけ、話したい人が
集まる、という形とした。会場も進行も、いつもの通りとした。

<当日の主な工夫>

- ・ムードメーカー、相手の発言が引き出すのが上手な人など、本人同士の座る位置など、ペアリングに配慮。
- ・パートナーが、本人の生活史や日ごろから語っておられること、悩んでいることをよく知っておく
 - ⇒本人の意図を引き出す、本人同士のやり取りの糸口に活かす
 - *パートナーが出すぎずにバランスを大切にした。
- ・テーマを絞って話しあう（例：「働くこと」）
- ・パートナーが言葉を付せんに書き留め、振り返り、模造紙に「みんなでつくろう希望の樹」として、本人が貼る、など。

<話したことを地元の施策等へ反映するアイデア（実際の広がり）>

- ・行政
 - ⇒介護保険事業計画等に、認知症対策推進会議を通して、就労や社会参加に関するサポートの重要性を明示し、具体的な活動として盛り込む。
- ・専門医やもの忘れ相談医、医療連携担当者・地域包括支援センター
 - ⇒診断後の自動車運転のことや就労、家族への支援において、必要な支援につなげられるよう認知症ケアパスに盛り込む
- ・各回の声をもとに、本人ミーティングを重ね、「就労」「働く」「社会の役に立つ」ために、何をしていくか、行動プランとして作成する。
 - 例) 行方不明を防ぐ模擬訓練に、会のメンバー(本人)が参加し、訓練に来た住民さんに感謝やねぎらい、本人の思いを伝える役を実践。
- ・その内容の具体化について、認知症対策推進会議で議論し、ケアパスや介護保険事業計画に反映させる。
- ・市長とぼやき・つぶやき・元気になる会との懇談会の実施。
- ・地域認知症サポートチーム定例カンファレンスにおいて、専門職へアピールする。

(3) 本人ミーティングの開催から開催後の結果の反映に関する全体集約

① ワークショップの開催がもたらしたこと

開催前、新規地域の実施主体の担当者には、口頭での説明や前年度の実施地域の報告(書)をもとに説明をおこなったが、「何をどのように進めればいいのか」、「自分たちにできるのか」、「そもそもなぜやるのか」、「やってどうなるのか」等の不安がみられた。担当者自身が不安なために、本人や関係者(上司がいる場合は上司)に本人ミーティングのことを伝えられずに、企画・準備が具体化していかない状況がみられた。

そんな中で継続地域と新規地域が合流するワークショップを開催したところ、新規地域のメンバーは、継続地域が取組んだプロセスと実際の手順や小さな工夫や配慮等を直に聞くことができ、漠然としていた本人ミーティングの全体イメージをかなり具体的にすることができ、新規地域の人たちから

「こんな流れなんだ」

「これならうちの地域でもできそう」という声が聞かれた。

また、継続地域6か所の取組みが画一的ではなく、それぞれの地域の実情や実施主体の状況に応じて多様であり自由度が大きいことを知ることができ、

「先進的などころのようにやらなければ、とプレッシャーだったけど、うちのところでできる範囲でいいんだ」

「自分のところならではのことをすればいいんだ、と思ったらほっとした」

「おもしろくなってきた。」

「自分だけでやらないで、もっと地域の他の人と一緒にやればいいんだ」

等の意見があがった。

さらに、継続地域の本人と関係者との実際の関わり(自然体でやりとりしている、楽しく笑いが絶えない、つねに本人に意見をきいている、本人が発言するのをゆっくりと待つ、わかりやすくまとめて示す等)に実際の触れたことで、

「自分たちの関わりはちょっと固い。もっと力を抜いていいんだ」

「本人の意思の尊重や視点重視って、こういう関わりの中にあるんだ」

「それをあたりまえに、自然にやっててすごい」

「本人ミーティングって、きつとこの延長なんだね」

「ふだんからの積み重ねだね」

という声が聞かれた。

何よりも、ワークショップでは各地域から本人も可能な範囲で参加していたが、すでに取り組んでいる地域の本人の生き活きた発言や姿を、新規地域の本人や関係者が目の当たりにしたことで、

「こんなにも楽しそう」

「(本人が) しっかり発言していて、すごい。自分もあになりたい」

「うちの地域でもこういう人を増やしたい」

「元気をもらえた。本人ミーティングで一緒に元気になれたらいい」

といった前向きな声が多くあがった。これらのことから、ワークショップ開催後は、新規地域における本人ミーティングの企画や準備が積極的・具体的に進むようになった。

一方、ワークショップに参加した継続地域の本人・関係者からは、

「自分たちも、1年前、やる前は不安だったよね」

「やってみると、様子がつかめるし、いろんなことが出てくる」

「まずはやってみることだね。やれるよ」

等の意見が聞かれ、継続地域の参加者が新規地域の参加者に、熱心にアドバイスしたり、質問に答える姿がみられた。

また継続地域の参加者から

「1年前より自分の地域は、ちょっとは進んだかな。」

「(本人ミーティングを)をやりっぱなしにしないことが大事だよ」

「あんまり新しいことを次々やろうとしないで、去年やったことを大事にしてそこから活かせることがまだまだあるよね」

「とにかく、(本人ミーティングを)いっしょに続けることだね」

等の意見がだされ、各継続地域では今年度は新たなことではなく、本人ミーティングを継続しつつ得られたことをどう活かすかに焦点をあてた取組みに展開していった。

② 本人ミーティングの企画・準備過程

新規地域では、継続地域から得られた全体イメージや情報を活かしながら、企画・準備過程を、(昨年度初めて本人ミーティングに取り組んだ段階にくらべて) 比較的スムーズに進めることができた。また、継続地域から伝授された以下のポイントや工夫を取り入れ、地元流にアレンジして活かしていた。

主な点 ○企画・準備段階から本人が参画するチャンスをつくる

○ねらいを確認しながら進める

○地元にあるものを活かす

○人数を集めることに走らず、集まりたい本人が少数でいいから

「本人が集まって」、まずはスタートする

○本人の目になって企画・準備する

○参加しやすさ、楽しさ、わかりやすさのための工夫の様々を取り入れ活かす。

・いきなり話し合いではなく、ウォーミングアップの楽しい企画をする

・一人ひとりが話し合いのテーマが分かり、発言しやすくなるために、今何を話しているかを簡潔に書いて提示、等

③ 本人ミーティングの当日

継続地域、新規地域ともに、本人がお客様ではなく、本人ミーティングに自分が参加し、自分が話し、自分ができることをやる、という基本スタンスが大切にされていた。なお、主催者や実行チームのメンバーは事前にそのことを確認しあっていたが、当日のみ参加のサポート役の人やオブザーバの人にはそのことが徹底しきれずに、それらの人がつい本人ができることまでやってしまったり、やさしくいちいち声かけてしまう等の場面が一部みられ、その場で、実行チームのメンバーから、『本人が・・・』と、いう静かな注意がなされる場面もみられた。

各地域ともに、参加メンバーは主催者となじみの人が主であったが、地域の医療機関や行政等から、本人ミーティングが開かれることを紹介され、主催者や実行チームと全くなじみのない人が参加した地域もみられた。

例：認知症疾患医療センターでアルツハイマー型認知症の診断を受けた直後で本人、家族もこの先どうしたらいいか、不安と戸惑いの渦中だった。

センターの看護師に、本人ミーティングが開催される情報が伝わっており、看護師が本人と家族に本人ミーティングを紹介。

なじみのない人達ばかりの知らない場に行くのは不安だろうと、看護師が同行を申し出てくれ、当日は、本人と配偶者、そして看護師3人で参加。最初は暗く硬い表情でいたが、他の人たちが話し合ったり、楽しそうにやりとりする中に身を置いたことで、少しずつ今の様子や思いを語りだし、最後は、「実は、こんなことが好き」とみんなに語った。「今度は一緒に、〇〇さんの好きなことをやってみよう」という展開になり、帰るころには来た時とは見違えるほど明るく柔らかい表情になり、家族や看護師にも愕きの変化であり、喜びになった。

1例ではあるが、オブザーバとして参加していた地域包括支援センターの職員や地域の病院スタッフ、介護職が、認知症の人への今までの支援のあり方を見直す大きなきっかけになった。

今年度本人ミーティングに取組んだ10地域それぞれは少人数の集まりであるが、参加した本人一人ひとりが表した声から気づかされること、後に反映していける手がかりがみつかっており、少人数でじっくりと話しあうことの重要性が確認された。

なお、今年度は、10地域を通じてオブザーバの種類や数が多くなっており、オブザーバからは

「はじめての貴重な体験であり、継続的に参加したい」

「もっと知りたい、もっと聞きたくなった」

「ここに来たら、元気になるのでは…、と思い浮かんだ人がいた」

「今日聞いた声を忘れずに、仕事や地域にいかしていきたい」

等、参加が大きな機会になったとする声が寄せられた。

④ 本人ミーティングで得られたことを、取組みや施策に活かす

「得られたことは何か」、をまず振り返ってみる話合いの会の大切さが各地域から報告されている。当日の手ごたえや達成感が大きい分、ややもすると開催してよかったで過ぎてしまいがちな中で、各地域は開催直後の当日終わってから、あるいはあまり間をあけないうちに振り返りの集まりを開いていた。

振り返りのメンバーは、当日の参加者に加え、得られたことを一緒に活かしてほしい地域の関係者に呼びかけて、多様なメンバーで行った地域もみられ、振り返りの集まり自体が理解やつながりを重要な機会になっていた。

振り返りに、参加した本人の中から一人でも参加をしてもらえると、話し合いの内容が本人視点からぶれずに話合いが進むという指摘が寄せられている。

本人ミーティングの開催時間は、話し合いだけに限っても正味1~2時間と短い時間ではあるが、そこで語られた声を振り返ると、かなりの量になる。

一人ひとりにとってひと言がどういう意味だったかを多くの立場の人が一緒に話し合うことで、話し合いの席ではわからなかったことや自分が聞き流していたことや気づけなかったことの意味が見えてきた、お互いの認識や対応の違いがみつかった等のメリットがあり、本人にとって何が必要かについてのリストアップが作成されていた。そのリストをもとに本人に確認したり相談を行い、本人ミーティングで発した声を、即本人のよりよい暮らしにつなげる流れを作った地域もみられた。

本人一人の声の中には、地域にも共通してある問題やニーズが多く含まれており、1回のミーティングで出た声を丁寧に地域で必要なことにつなげて整理し、それらをもとに、すぐにやれるかどうかは別にして、誰がどう活かせるかの話し合いを行われていた。その結果を、地域で情報共有することで、関係者だけではなく、情報に触れた人がそこから考えて自主的に動き出す流れも生まれていた。

3. 報告会

1) 当日プログラム

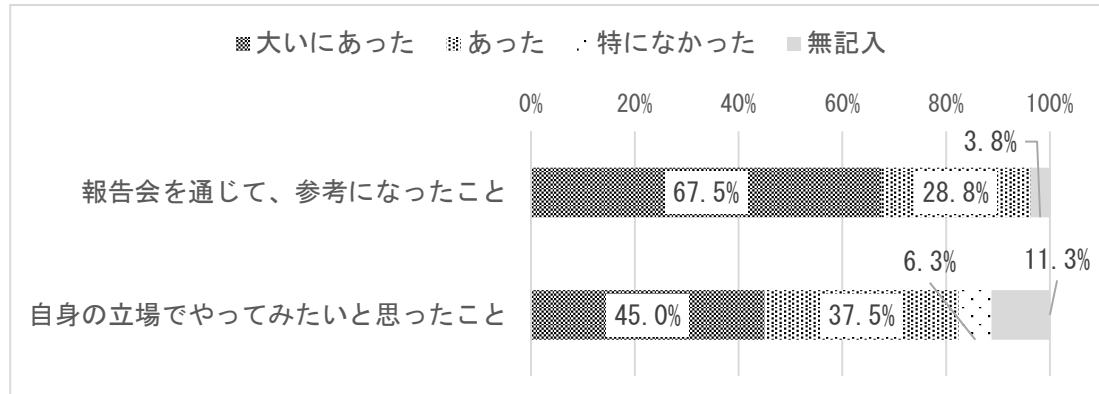
当日は次のようなプログラムで実施した。

時間	内容
10:30～	開会 栗田主一／地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
10:40 ～10:55	この事業のねらい 藤田和子／日本認知症ワーキンググループ
10:55 ～11:45	この事業で取り組んだこと・見えてきたこと：全国調査やパイロット調査を通じて 永田久美子／認知症介護研究・研修東京センター
11:45 ～12:45	昼休み ＜情報交換・ネットワーキング＞
12:45 ～13:25	「本人が語り合い、声を活かす」ことを地域の状況にあわせて取り組んだ地域からの報告 1)宮城県仙台市チーム 認知症とよりよく生きる“ワーキンググループみやぎ”を基地に ～やさしいまちを一緒につくろう～ 丹野 智文さん／おれんじドア 代表 鈴木 理さん／おれんじドア メンバー 若生 栄子さん／おれんじドア・認知症の人と家族の会宮城県支部 今田 愛子さん／おれんじドア・宮城の認知症ケアを考える会
13:25 ～13:40	休憩 ＜情報交換・ネットワーキング＞
13:40 ～14:10	2)兵庫県チーム 「若年性認知症とともに歩む」～本人・家族の声を活かす、兵庫県の取組み～ 亀山 美矢子さん／兵庫県健康福祉部高齢社会局高齢対策課 地域包括ケア推進班 「若年性認知症とともに歩む」～本人・家族の声を活かす、 若年性認知症生活支援相談センターと「ひょうごの会」の取組み～ 岩木 久敏さん／(社福)兵庫県社会福祉協議会 権利擁護センター
14:10 ～14:25	休憩 ＜情報交換・ネットワーキング＞
14:25 ～15:00	3)香川県綾川町チーム 介護予防事業のなじみの集まりを、本人同士が語り合い声を活かす場に 志度谷 利幸さん／ほっと歓伝え隊 志度谷 久美さん／ほっと歓伝え隊 川崎 孝至さん／ほっと歓伝え隊・綾川町 地域包括支援センター 増田 玲子さん／ほっと歓伝え隊・綾川町 地域包括支援センター
15:00～	◆まとめ：これからにむけて 各地で取り組んだ本人＋パートナー
15:30	閉会 情報交換・ネットワーキング(～16:00 ごろ)

2) 参加者の声～アンケートより

(1) 報告会を通じて、参考になったこと・自身の立場でやってみたいこと

アンケート回答数：80



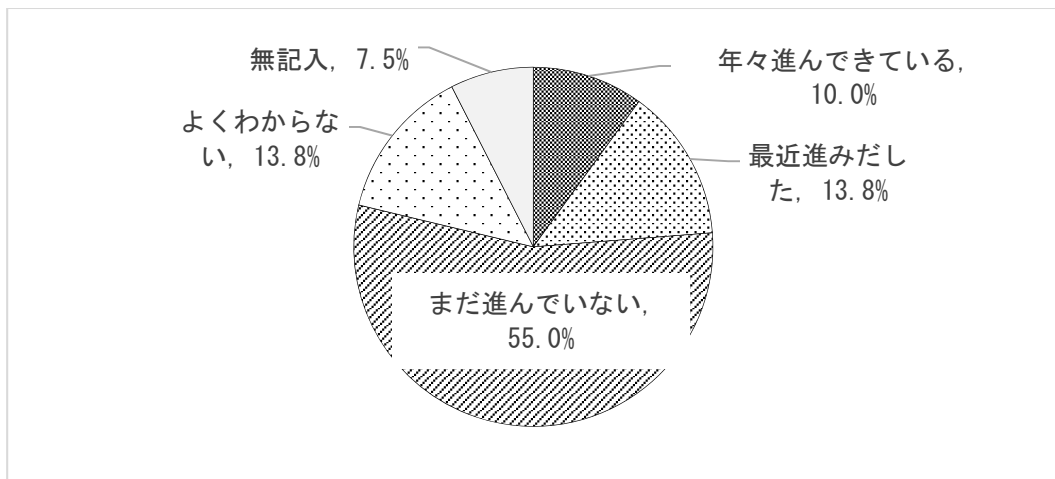
<参考になったこと（主な声）>

- ・ご本人の声はやはり重要ですね！
- ・本人が一番の認知症のプロであるということ。本人抜きで考えてもうまくいくわけがない、ということのを改めて強く考えました。
- ・本人の声が響きました。話し合ったことを次につなげることが大事だと思いました。
- ・当事者が主役になること自体が本当に新鮮。当事者同士で話し合う場、大事だなあと感じました。
- ・当たり前を忘れていたこと
- ・集めるのではなく、集まる。
- ・当事者が2人以上集まれば、どこでもどんな時でも、本人ミーティング。
- ・当事者が元気になれば家族も元気になる
- ・当事者とパートナーは水平の立場であること。
- ・本人ミーティングについて、その必要性、効果がよくわかった
- ・本人の声、希望を活かしきる、はできる事。共に取り組む。包括等への情報提供、連携強化。
- ・自分の住むまちでも本人ミーティングを考えてみたい
- ・今日の話は、これから地域に広げていきたいことそのものでした。
- ・次年度の認知症計画の見直しでの取り組みに、本人の視点を取り入れたい。
当事者主体といいつつ、支援者目線ですすめていたのでは、と思いました。
- ・行政や関係機関のみで物事を進めるのではなく、本人の声を取り入れることは大切。

- ・具体的な本人ミーティング開催までのプロセスがわかってよかった。やってみたいがどうしたらよい？という声に対する具体的な solutionになると思いました。
- ・入居の現場でもご本人のできることを奪ってしまっているのでは、と介護スタッフが気づき始めていますが、今日のようなお話を伺って、やはりそこをご本人にやっていただくことが大切だと改めて感じました。

(2) 自身が暮らす地域で、認知症の人が声を出し活かす取り組みが進んでいるか

アンケート回答数：80



<やってみたいこと>

- ・まず、当事者の声を聴くこと。話して、話したい、伝えたい場をつくること
- ・当事者が思いを言える場を設けていきたいです。
- ・居場所づくりを手始めに活動を開始したい
- ・今やっているお茶のみ会から一歩あゆみ出したい。
- ・病院の待合室を利用して、ミーティングを行ってもらう
- ・各ホームでご本人同士が語る機会を作ること

- ・当事者の方むけのつどいをやってみたい。⇒家族のつどいや相談はあるが、当事者むけのものはまだない
- ・本人ミーティングと家族ミーティングをやっていきたい。
- ・本人と家族と横並びに

- ・認知症カフェを開催しているが、「集める」ことを考えていた。「集まる」カフェを今後は開催していこうと思います。
- ・ケアパス作成等に本人の声を取り入れたい。人口が多いので機会はたくさんある。
- ・地域・自治体において企業が果たせる役割についてあらためて考えたい。さまざまな方々の中に、企業市民として存在したい。

(3) 知りたいこと・情報（記述）

- ・ご本人が参加し始めるきっかけ。特に、初めは嫌だった方が何をきっかけに変わられていったか。
 - ・多様な方々が会の主体になっていることに驚きました。それぞれに主体となる理由があり、リソースがあったのだと思いますが。その自治体でもできるようなplaybookがあれば良いと思いました。
 - ・概要だけでなく、具体的な取り組み例をもっと詳しく知りたかったです。（チームによっては）
 - ・ご本人たちの意見をどのように活かしているのか、具体例を含め、行政にどのようにアプローチしているのかを知りたい。
 - ・果たして包括中心・介護中心で都会では思うように進むか。継続性・密着性はあると思うが。
 - ・医師が地域連携サポートメンバーに入ると、時間的な制約等があり、難しい点があると思います。このあたりは、どのようにして医師との関係性をつくっているか、知りたいです。
- 医師や看護職の中には昔ながらの支援方法としてパターンリズム的な方も多いです。このような支援者がメンバーにいた場合、どのようにかかわりを持って接していくのか、知りたい。ここがネックで、介護離職をする職員が多いのが現状。
- ・報告書がほしいです。

(4) 参加者の感想

- ・当事者の方の生の声を聴けたことが、大変参考になりました。
- ・話せないのではなく、話させていないだけ、という気づきがありました。必ず人の手を借りなければならないわけではなく、意思決定は自分だけができることというのは、人として大事なこと。
- ・当人同士で話し合える場をたくさん作ることで、ご本人が少しでも前向きになれるのなら、どんどん協力していきたいと思った。
- ・認知症本人ならびに家族が隠そうとうる行動がなくなるような環境づくりがあらためて必要だと思いました。
- ・香川県綾川町の動画・発表報告はとても良かったです。「なじみ」という言葉がとていいですね。すごくわかりやすく、楽しみながらやっているというのが伝わりました。参考にしてこれから、やれることからやっていこうと思います。
- ・「支える」のではなく「ともに」。本人に聞きながら企画することが大切ですね。
- ・ありがとうございました。動きます。
- ・参考になることがたくさんありました。パワーももらいました。
- ・最後のお話ですこし気持ちが楽になり、まず続けていきましょう！
- ・ご本人からの実感のこもった言葉は、伝わるし、ちからがありますね。来た甲斐

がありました。わくわくミーティング、すてきですね！認知症予防の会にすこし抵抗がありましたが、「なじみ」の人たちになるのならいいと思いました。

- ・当たり前のように、簡単なようで、でも難しい、、、。でもつながりを少しずつ広げていきます。
 - ・本人からスタートするということはできても、実行するのはむずかしいです。認知症の人もこれからなる人も、失敗をしながら相互理解しつつ、発展できればいいなと思いました。やってみたら、次がみえると仰った香川の包括の方のお話が印象的。
 - ・本人参加の会議。今後の方向性・思いを聴くことは厳しい状況です。状態を知るために訪問にいくと、話もままならないひきこもりの状態です。
 - ・話したいが相手がみつからない
-
- ・とても良い会でしたので、もっと多くの人に聞いていただければよかったと思います。本人の参加をむだにしないよう、みんなで考えていきたいと思います。
 - ・実践者の方々の発表がよかった。これらをもとに、本人ミーティングのノウハウ集ができるとよい。うまくいったこと、失敗したこと、の共有をもっと。
 - ・このシンポジウムを福祉大学とネットで二元中継して、地域福祉についてのディスカッションができると良いと思いました
 - ・報告会や研修を都道府県単位でやっていただけるとよい

第3章 考察

1. 全国の実態からみた自治体における本人調査と施策への反映のあり方

1) 自治体における「本人視点の重視」について

今回実施した調査は、認知症の本人視点重視や本人調査に関する全国の自治体の実態についての初めての調査であり、調査実施前は、回収率や結果が未知数であった。最終的な回収率は、都道府県が100%、市区町村は54.6%であり、また自由記述の回答箇所にも多数の記述が寄せられ、認知症の本人の視点重視の施策のあり方や本人調査への自治体の関心の高さがうかがえた。

それは調査結果にも表れており、「認知症の人の視点を重視して事業等を進めている」と回答した自治体が、都道府県では68.1%、市区町村では48.1%であった。また、自由記述の分析からも認知症施策の企画立案や各事業において、認知症の人の視点を重視した取組みに着手している自治体がかなりみられることが確認された。

「認知症の本人の視点の重視」は、認知症の人の理解や支援の根幹であり、ケアの分野では2000年前後から少しずつ普及し始めていたが、自治体行政においても浸透してきていることを示す今回の数字は、認知症施策がより内実を伴ったものに転換していく大きな転換期にあることを示していると考えられる。

その点において、本人視点を重視して施策を進めている自治体と進めていない自治体とでは、施策全般の進捗やその内実に関する格差が今後開いていくことが懸念され、すべての自治体が本人の視点を重視しながら施策や事業の展開を進めていくようになるための推進策が、今、求められているといえる。

なお、市区町村調査結果では、人口規模が小さい自治体ほど本人視点の重視にはいたっていない傾向がみられた。この背景には、地域に届いている情報の量や、行政関係者も含めた地域住民の意識や価値観、地域文化の影響も予想され、各自治体にあった柔軟なやり方で、本人視点重視への転換を推進していくことが必要と考えられる。

2) 自治体における本人調査の実施状況について

本人の体験や必要なことを把握するための本人調査の平成 28 年度までの実施状況は、都道府県で 61.7%、市区町村で 12.1%であった。市区町村にくらべて、都道府県での実施率が明らかに高いが、調査対象をみると、都道府県では 76.0%が若年性認知症の人を対象としたものであり、65 歳以上を対象とした調査の実施率は 4.0%にとどまっていた。また、調査方法は都道府県の 72.0%、市区町村の 38.6%がアンケート調査であった。この結果から本検討委員会では、アンケート調査の実施をもって本人調査を行っているとしているとした自治体の中には、基本統計の把握としての意義は大きいですが、認知症の本人の体験やニーズを浮き彫りにして今不足している支援を生み出していくための施策を創出するための調査には至っていなかった自治体もあるのではないかと危惧する意見があげられた。

より施策に反映できる調査結果をうるために、今後、本研究事業で焦点を置いた本人ミーティングの方法を自治体が導入することの必要性が示唆されている。

3) 市区町村が感じる本人調査とそのための方法の必要性

市区町村の 78.6%が「今後本人調査が必要」と回答しており、「具体的な進め方や内容が知りたい」という回答が 9 割であった。また、都道府県調査でも、本人調査に関して「具体的な内容が知りたい」「実施した地域の実例が知りたい」「研修や情報交換の場があってほしい」等、何らかの情報や技術支援の機会を求めているとの回答が 9 割を超えていた。

こうした都道府県や市区町村の求めに応えていくために、本研究事業で検討された本人ミーティングの方法論の普及を図っていくことの意義は大きいといえる。

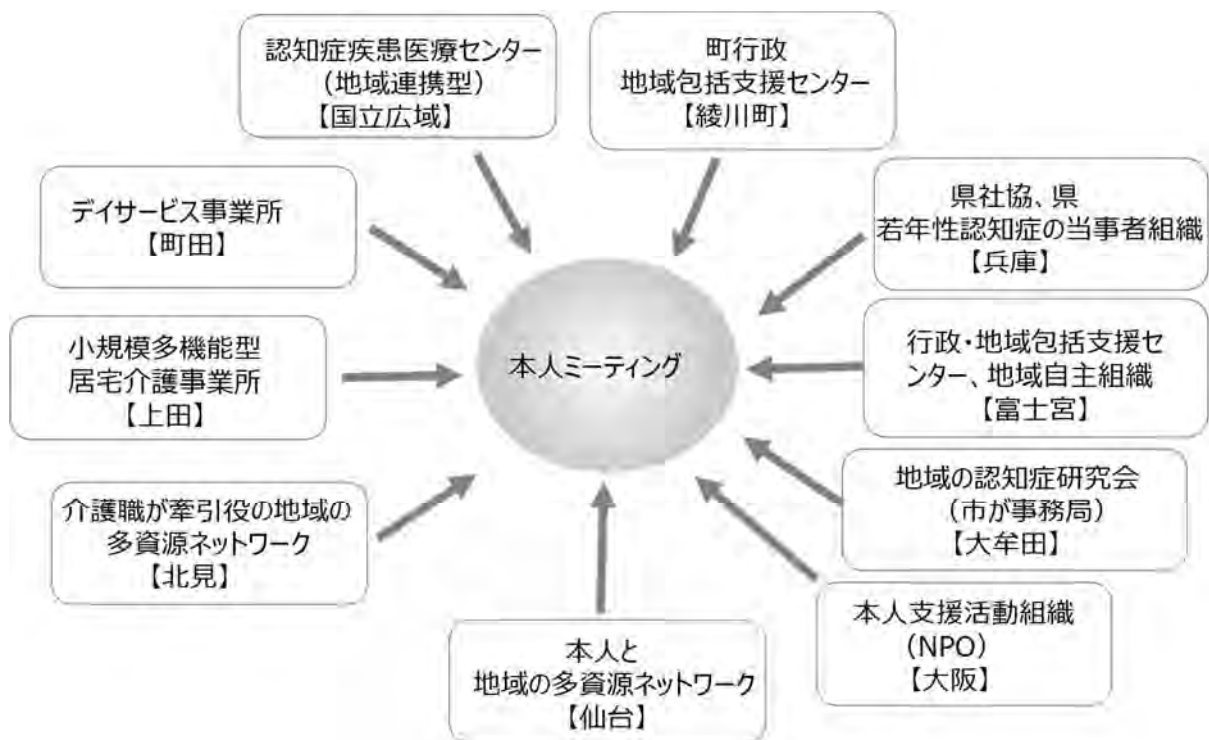
2. パイロット調査から見てきた本人ミーティングの可能性

1) 各自治体での実行可能性：本人ミーティングの多様な展開方法

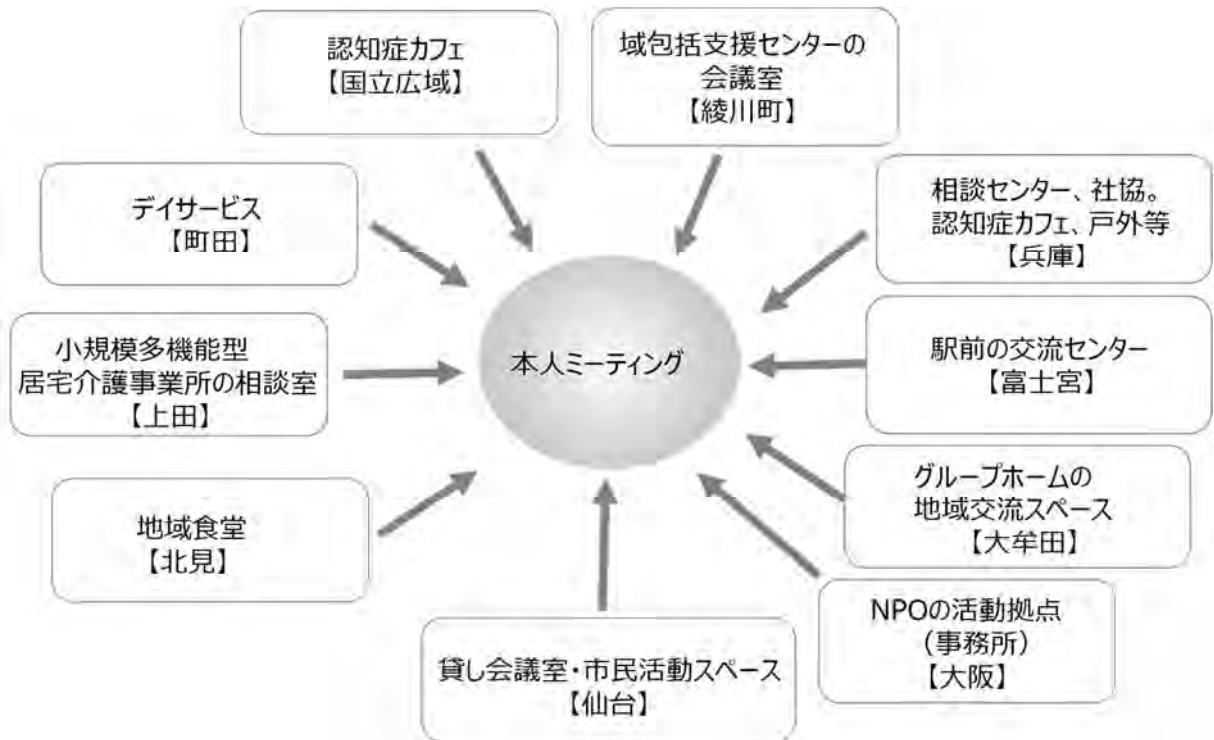
今年度、本人調査の一手法として少人数の認知症の本人が集まり話し合う「本人ミーティング」に焦点をあて、10地域でパイロット調査を行った結果、多様な人口規模、実施主体、開催の場での実行可能性が確認され、今後、各自治体で普及を図っていく上で、選択肢を広げることができた。

また、各自治体で大きな課題になっている参加者を確保するルートに関しても、パイロット調査を通じて、認知症疾患医療センターやかかりつけ医等の医療機関が入り口であったり、行政や地域包括支援センターの相談窓口、認知症カフェ、介護事業所、サービス付き高齢者向け住宅、地域食堂等、多様なルートで参加者がつながれることが確認された。

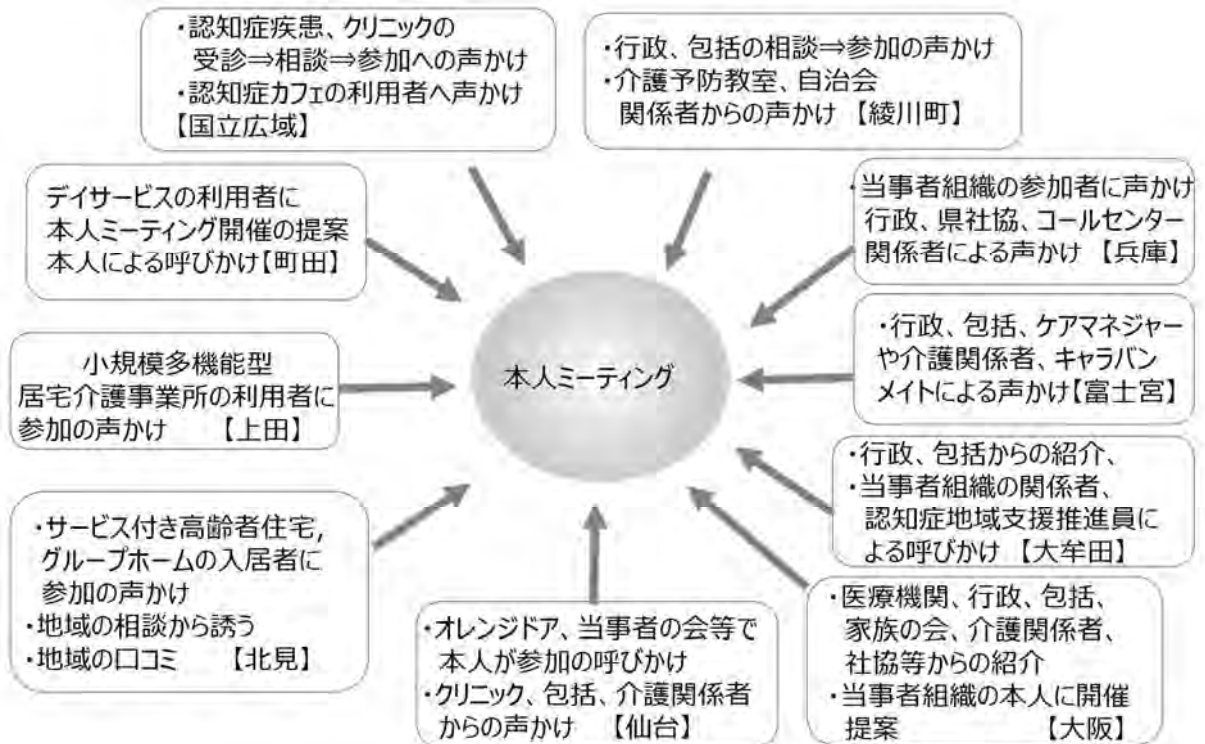
①多様な実施主体で実施できる



②多様な場で実施できる



③多様なルートを通じて、参加者が集まることができる



2) 各自治体における導入のしやすさ：

地域にあるものを活かした負荷が少ない方法

本人ミーティングは、地域にある資源を基盤にしながら、少人数の本人が話し合う集まりをつくる方法であり、取組んだ地域の関係者から、「準備や実施に係る時間や人手、コストが、従来のアンケート調査等よりもはるかに軽量で実施できる」、「やってみたら以外と手間がかからなかった」、「特別の予算はとっていなかったけれど、地域にあるものをつないでやれた」という報告が寄せられている。

各自治体がコスト面、時間面、そして労力面で余裕がない中でも、比較的とりくみやすい（導入しやすい）方法といえる。

3) 本人ミーティングを通じた多面的成果の可能性

(1) 本人が主体性・自立性を発揮し、伸ばす

本人ミーティングは、企画・準備段階から開催、その後の展開のすべてにおいて、本人自ら参加することを基本に据えた方法である。

実施前は、「認知症の本人が、これら一連のプロセスに主体的に関われるのか」と半信半疑だった関係者もみられたが、実際に本人が参画するチャンスをつくったことで、すべての地域で本人がこれらのプロセスに自ら（よろこんで）参加し、その経験が自信につながり、さらに主体性・自立性が引き出された人たちが多くみられた。

本人ミーティングの方法は、新オレンジプランが掲げている「認知症の人を単に支えられる側と考えるのではなく、認知症の人が認知症とともによりよく生きていくことができるような環境整備が必要。」という基本的考え方を、理念でとどめずに実際に具体化していく方法であるといえる。

(2) 本人同士ならではの関係を活かして、ポテンシャルが引き出される

本人ミーティングは、あくまでも本人同士が主となって話し合う方法である。その過程で、本人と家族や専門職とのかかわりでは引き出せなかった思いがけない声や姿が現れた以下のような実例が各パイロット調査地域から報告されている。

【ともにかかわった支援者からの声（主なもの）】

○「話さない」「話せない」とみなされていた人も語り出す。

例 「夫は、話せないと思っていたが、発言しておどろいた」（妻）

○施策等への意見は、難しくてわからない人とみなされていた人も自分なりの思いや意見を語る。

例 「後で母が話した内容を聞いた。話合いで話せるなんて・・・（娘）

○ふだんからよく話してくれていた人が、秘めていた思いを語る。

例 「なじみの関係になっていてよく理解しているつもりだったが、思いがけない発言が出てはっとした。本人が話す機会をもっと意識的に作る必要がある」(行政職員)

無理と周囲が決めつけず、まずは認知症の本人同士が話し合う機会を作ること、参加の声かけをしてみることで、そしてその場面で関係者は介入を最小限にとどめ、本人同士の関わりを通じてそれぞれの声や力が現れるのを待つこと、それら一連のプロセスの重要性が示唆された。

【本人同士が語りあうことの意義や可能性を、様々な事業、場面に活かす】

今回のパイロット調査を通じて、本人同士が語り合う場面を作ること、多様な意義や可能性が生まれることが明らかになった。

* 仲間の存在に出会えたことが、一人ではないという安心をもたらす。

* 同じ立場だと鎧がぬげる。

* 仲間と語ることで自信が蘇る。前向きになるきっかけになった。

* 活き活き語っている他の仲間に触発され、もっと自分もやれると、勇気ももらった。

** 体験や知恵、情報を教えてもらったり、分かち合っていくことで、これから自分が暮らしていく/自立していく上での大きな力になる。

* 集められての「楽しい」だけでなく、他の人や地域に役立つために、自分たちが集まり、話しい、地域に伝えていくことに取組んでいる人に出会い、「目の前が開けた感じがした」、「自分がそうなりたと思った」

現在、本人の居場所作り、認知症カフェづくり等、本人が集う場をつくる事業や取組みが各自治体で積極的に進められつつあるが、それら本人が複数集う場に、本人同士が語り合う本人ミーティングの発想や方法を取り入れていくことで、それらの事業や取組みの意義や可能性が広がり、効果や価値を高めていけることが期待される。

(3) 参加した関係者の認知症の人や支援へのイメージや認識を大きく変え、主体性を高める機会になる

本人ミーティングは参加した本人と同時に、関係者に様々な変化をもたらしていることが明らかになった。

【ともにかかわった支援者からの声（主なもの）】

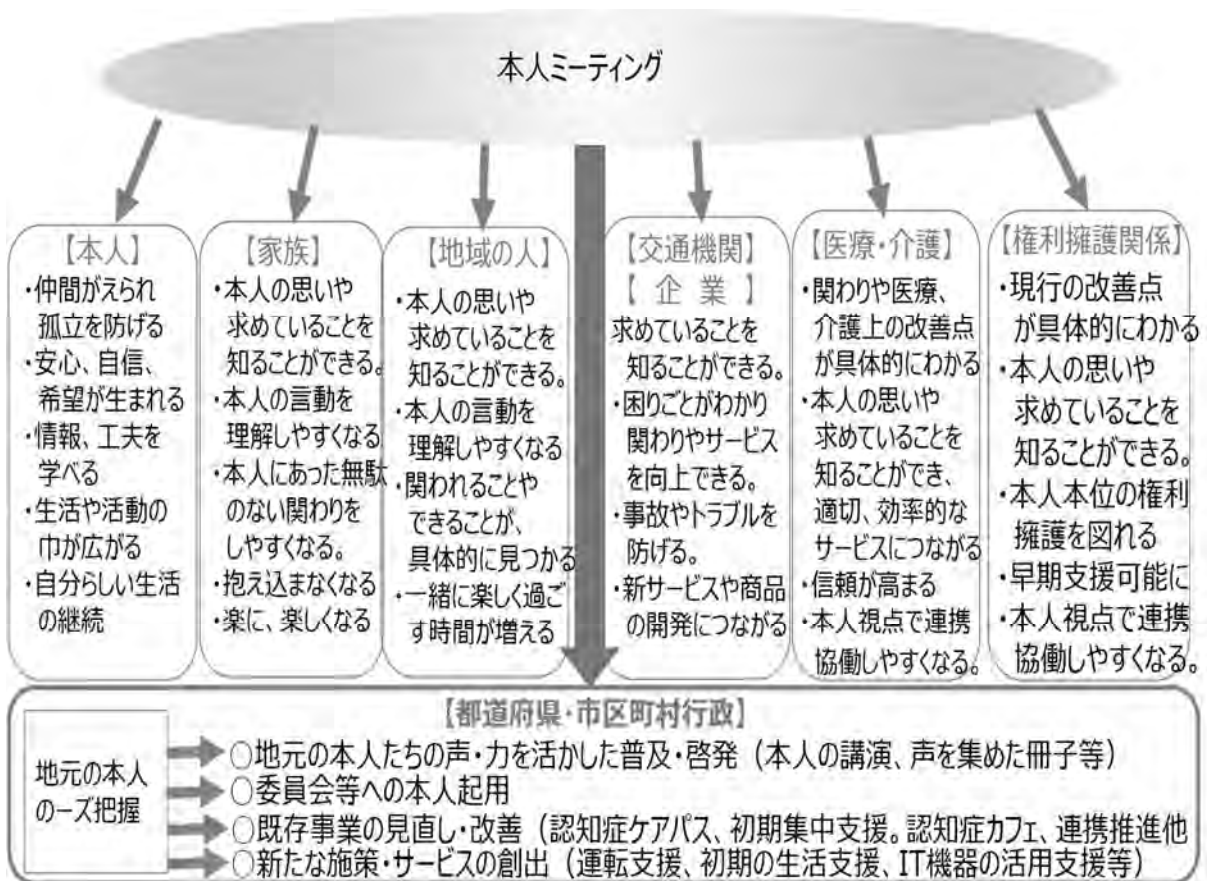
- 上司に参加してもらったら、その後とても応援・協力してくれるようになった。
(地域包括支援センター職員)
- 自分の地域でもこうした機会が必要。うちの地域ではまだ無理と思っていたが、先延ばししないでやってみたい。(オブザーバとして参加した隣市の行政職員)
- 普段のサービスだけでは、本人を支え切れてないことがよくわかった。本人たちが「暮らしの中で必要としている本当の願い」をよく聞いて、それをひとつでもかなえられるように、地域の人たちとも話し合ってみたい。(同席した介護職員)
- こんなにイキイキと話せるなんて。職場に持ち帰って、ふだんの関わりをあたためて見直したい。(市内の精神科病院の職員)
- 疲れている中で参加したけど、逆に元気と勇気をもたらした。(地域包括支援センター職員)

「本人視点を重視した施策や事業」や「本人の意思尊重」の重要性は、頭では理解していてもその本質や実感的な理解はなかなか難しいのが現状である。本人ミーティングの1回は1~2時間程度で、そこに同席して本人同士が語り合う姿や声に直に触れることのインパクトが大きいことが、今年度のパイロット調査からも確認された。

本人ミーティングは小さいながら、地域の多様な立場の人たちが認知症の人への真の理解を深め、前向きに取り組んでいくためのジャンプボードになりうる場だと言える。

(4) 取組みの拡充や施策に反映できる点が豊富にみつかると

本人ミーティングを開催した地域では、各地域それぞれが少しずつでの変化であるが、それぞれの立場の人たちに様々な変化をもたらしており、それらを行政が意識的に活かすと、認知症施策(特に中心的な事業)を本人視点で着手・拡充していくための重要な機会になることが示された。



第4章 ガイドの作成

1. ガイドのねらいと役立つガイドを作成するための要件：

調査結果と委員の意見より

本人ミーティングは、現在、認知症と共に暮らしている人にとって、また家族や地域の多様な人々、そして行政にとって、取組むことでの付加価値が大きく、各自治体・地域において普及・定着していくことが望まれる。

どの自治体でも本人ミーティングの実施に着手できるための、わかりやすい手引き・事例集（ガイド）を作成することをねらいとして作業を行った。

まず、本人ミーティングの実施と活用のキーポイントを次の10点にまとめた。

【本人ミーティングの実施と活用のキーポイント】

- ① 本人ミーティングの意義・ねらいを関係者で話し合い、共有する
- ② 企画・準備を本人と一緒に進める：「集められる」ではなく「集まりたくなる」本人ミーティングに
- ③ 地域のあるなじみの場・人・事業等を活かす、つなげる
- ④ できる範囲で、まずはスタート：小さく始めて、とにかく続ける
- ⑤ いきなり話し合いではなく、楽しく出会い、くつろげるひと時を
- ⑥ 本人同士が主となって話しあう：周囲の関わりは最小限に
～本人同士の声と力が出るのを見守る、語れるためにそっと支える～
- ⑦ 語られた「ありのままの声」を記録し、一緒に話し合う
～暮らしや地域、支援や施策に活かせることを、どんどん出し合う～
- ⑧ 集めた声、活かせることを、幅広く発信し、できることを話し合う
- ⑨ 声を活かしてできることから、即、動く：聞いておしまいにならない
- ⑩ 一人ひとりの声を普段からよく聴き、本人と一緒にのよりよい暮らしや地域をつくっていく人（パートナー）を増やしていく

次に、役立つガイドを作成するための要件を、パイロット地域で実際取組んだ結果や検討委員の意見、全国調査の結果をもとにまとめた。

【本人ミーティングのガイドの要件】

- ①大事な考え方（コンセプト）が端的に示されていること
 - ・やり方や形だけを伝えるのではなく、本人ミーティングで大切な発想や考え方が端的におさえられていること
- ②本人の声がかかれていること
 - ・本人ミーティングについての本人の思いや意見が届くように
 - ・本人視点の実際がわかるように
- ③ねらい、必要性が示されていること
 - ・かたちだけやっておしまいにならないために
- ④期待できる成果やメリット
 - ・やってみるとどんな変化やメリットが実際でなのか
- ⑤どこでも、だれでもやれるように
- ⑥取組みのながれにそって
 - ・本人ミーティングのいろはのいから順を追ってステップがわかるように
- ⑦具体的に、ヒントを添えて
 - ・事例を交えて
 - ・ちょっとした工夫、配慮、ヒントになることを
 - ・成功例ばかりでなく、失敗しがちな点も
- ⑧気軽に手にとって、簡単によめるもの
 - ・最初から詳しい内容だと、やりたくても動き出せない。
 - ・最初の一步を踏み出せるように
 - ・本人ミーティングは、やってみることが大切。
やってみないままだと、いつまでたっても進まない。
まずは、気軽に始めていけるための、ライトなものに
 - ・忙しい中でも、目で追ってポイントがわかるように
- ⑨興味・関心がわいて、やってみたくなるように
 - ・やってみるとおもしろい。それを伝えてほしい
 - ・写真やイラストをいれて

2. 作成方法

作成方法は、次のとおりである。

1) 要件の洗いだし

この事業で収集された以下の素材（情報）をもとに、前述の「本人ミーティングのガイドの要件」9点のうち、①～⑦に関する内容を次の資料から洗いだした。

- ・ 委員会議事録
- ・ ワークショップの記録
- ・ 10 地域の企画シート
- ・ 10 地域の振り返りレポート
- ・ パイロット地域の視察記録
- ・ その他、各地域から提供された資料

2) わかりやすさ、簡潔さに配慮し、内容の絞り込み

洗い出した内容をもとに、初めての人でも負担感なくやれるよう、1 ページの記載量にも配慮し、表現や内容の簡潔さを考慮して内容を絞り込んだ。

それを整理したのが、ガイドの構成・主な内容である。(次ページ)

3. ガイドの構成と主な内容

ガイドの構成と主な内容は次のとおりである。

本人からのメッセージ	
手引きパート	
1. 本人ミーティングを知る	1) 本人ミーティングとは
	2) なぜ、本人ミーティングが必要か
	3) 本人ミーティングのねらい
2. 企画・準備する	1) 誰が開催するか(実施主体のさまざま)
	2) 一緒に取組む人
	3) 企画段階からの本人の参加
	4) 企画・準備しておきたいこと
	①わが地域での「必要性」と「ねらい」を話し合う(納得、共有)
	②当日話し合うテーマの素案を考える
	③当日の参加者・同席者等の案をつくる
	④当日の流れ・シナリオ案をつくる
	⑤開催場所を決め、環境づくりを工夫する
	⑥参加をよびかける
	⑦開催前に必要な確認と配慮
3. 開催する	1) 当日、これを大事に
	2) 一人ひとりが語れるための工夫
	3) 次につなげる
	4) 声を残そう
	5) 本人ミーティングでの声
	6) やって見た人たちのエピソード
4. 本人ミーティングを活かす	1) 振り返り会をひらこう
	2) こんな活かし方があります
	3) 活かし方の実際
取組んだ人たちから	
事例集パート	
取組んだ10地域実例	北見市、仙台市、国立広域、町田市、上田市、富士宮市、大阪市、兵庫県広域、綾川町、大牟田市
おわりに	

第5章 全体総括

1. 本年度事業を通じて明らかになったこと

1) 本人視点を重視した自治体が増える中での、本格的な本人調査の必要性

今回実施した全国調査を通じて、「認知症の人の視点を重視して事業等を進めている」と回答した都道府県が約7割、市区町村が約5割であり、認知症施策の企画立案や各事業においても、認知症の人の視点を重視した取組みに着手している自治体がかかりみられることが確認された。

平成28年度段階で、本人の体験や必要なことを把握するための本人調査の実施状況は、都道府県で61.7%、市区町村で12.1%であったが、都道府県では76.0%が若年性認知症の人を対象としたものであった。なお、実施されている調査の方法は、都道府県の72.0%、市区町村の38.6%がアンケート調査であった。

こうした状況の中、市区町村の78.6%が「今後本人調査が必要」と回答しており、「具体的な進め方や内容が知りたい」という回答が9割であった。また、都道府県調査でも、本人調査に関して「具体的な内容が知りたい」「実施した地域の実例が知りたい」「研修や情報交換の場があってほしい」等、何らかの情報や技術支援の機会を求めているとの回答が9割を超えていた。

2) 本人重視の施策や支援を効率的に促進するための本人ミーティング

こうした自治体の要請にこたえるひとつの方法として、本事業において取組んだ「本人ミーティング」は、多様な人口規模、実施主体、開催の場での実行可能性が確認され、今後は、各自治体が地域の実情にあわせて、地域にある資源とともに本人ミーティングを実施していけることが示唆された。

また、パイロット調査を通じて、本人ミーティングに本人がつながるルートは、認知症疾患医療センターやかかりつけ医等の医療機関が入り口であったり、行政や地域包括支援センターの相談窓口、認知症カフェ、様々な介護事業者、サービス付き高齢者向け住宅等、地域にある多様な資源を入口に参加者がつながれることが確認された。本人ミーティングを実施することが、各自治体で大きな課題になっている事業を行う再の参加者を確保するルートの開拓にも寄与しうることが示された。

本人ミーティングは、地域にある資源を活かして比較的負荷少なく取り組め、取組むと本人の主体性や自立性、ポテンシャルが引き出されたり、家族や医療・介護関係者、行政職員の視点が実質的に本人重視にかわりうるインパクトの強い方法であることも確認された。

本人ミーティングを通じて表出される一人ひとりの声を眠らせずに丁寧に検討していくことで、医療・介護をはじめとして地域の多種多様な人たちの意識がかわり、認知症施策(特に中心的な事業)を本人視点で着手・拡充していくための重要な機会になることが示された。

3) 今後の課題

一方課題として、パイロット調査に取り組んだ各地域から、本人ミーティングは1回のみではなく継続して実施していくことの重要性が示され、実施結果を地域の中で活かしていくためにも、自治体の関与や支援への期待が大きい。

本人ミーティングが単発ではなく、それを一つの起点や節目として、ふだんから地域の中で仲間同士でつながっていける場や機会の必要性を指摘する意見が多くあがっていた。今後は、各自治体で生まれてきている認知症カフェやサロン、その他地域にある人が集まる場を活かして本人ミーティングを開催し、開催した後も、それら地域にある場で本人が仲間とつながり続けていく流れを作りだしていくことが必要である。今回のパイロット調査で、すでにそうしたつながりをつくりだし拡充している取組みもみられており、今後本人ミーティングと様々な資源サービスとのつながりの拡充が期待される。

また、本人ミーティングの企画・準備から開催、その後の振り返り等の場面で、そばに控えて一緒に時間を共にしながらサポートする人出が必要である。そこに加わることで、たくさんの気づきや感動をえることができ、認知症の人と自然体での付き合いを体験しながら、認知症の人の生き方や必要な支援について学べる機会であり、今後は年代を問わず地域の人たち(徳に認知症サポーター講座を受講した人たち)の活躍の場になることが期待される。

なお、各地域ともに、本人ミーティングへの本人の自発的参加や語り、本人同士の話し合い等がみられる背後に、本人が語る可能性を信じ、本人が力をだすことの下支えに徹するパートナーの存在が見られた。本人ミーティングを一緒に体験しながら、各地域の中でこうしたパートナーが増えていくことを、各地域で継続的に推進していくことも重要な課題である。

今年度事業では、こうしたパートナーが育つことの一助となるために、また各自治体で本人ミーティングに気軽に取組んでいくことを後押しするために、本人ミーティングのガイドを作成した。今後実際に、地域の中で活用をはかりつつ、現場での実践を通じた知見の集積を続け、より役に立つガイドに改良を図っていきたい。

2. 本事業において本人・家族の立場で参画した検討委員からの提案

1) 本人の立場から：藤田委員

本人として、これからの本人になるかもしれない人のためにも、いまを生きる本人のためにも、みんなが「生きやすいように」、次の5つを提案したい。

本人を、単なる「対象」として取り組むのではなく、人と人として、いっしょにやっていたい。

① 本人同士の声を大切に活かすことの意義と本質の浸透が不可欠

○ひとりでは表せないでいる内面や本音は、時として本人同士の仲間がいると語りやすくなり、元気も湧いてくる。本人同士で話し合う「本人ミーティング」は、本人が本当に必要としている地域のあり方や、医療や支援のよりよいあり方を浮き彫りにする上でとても重要である。

○しかし、「なぜ本人同士で話すことが良いのか」の理解がまだまだ少ない。医師や行政の人たちが、「認知症だと話し合うことが難しい」という認識のままだと、これを全国どの地域でも広げていくことが難しい。

さらに「話せる人」「話せない人」と単に分けてしまうと、声を出せるはずの人や、声を出したい人たちが、対象外にされてしまう恐れもある。

○国や自治体の施策や、医療・介護やあらゆる支援の原点において、本人はどうか、「本人の声をまず真剣に聞くことから始める、聞き流さずに活かすことがあたり前である」という共通方針をしっかりと打ち出し、浸透をはかってほしい。

○こうした理解がないと、ただ本人を集めて「本人の声を聞きました」で終わりになりかねない。形式的な実施や回答内容の形骸化がおきないように、本人が体験している生きづらさや希望、何を求めているか、「本人でなければ気づけない点を本人の声をもと」に、確実に把握し、それが実際に活かされていってほしい。

○本人ミーティングはただ本人の声を聴くという浅いものではなく、施策等なにかに活かすことを引き出すための話し合いの場である。楽しい場・リラックスできる場はもちろん必要だが、話し合いの場も必要であり、これらを分けて考えてほしい。

② 本人が本音を出せるパートナーの存在が重要。育成・支援を含めて調査準備を

○本人がどうしたら語りたことを表現できるのか、これを一緒に考え後押ししてくれる、パートナー的な存在はとても大切。この人材育成やパートナーが継続的に活動できる状況を整えないと、「本人の声をきく」「声をまとめ活かす」ことが難しい。

○「本人の声をきく」ことが、全国どの地域でも広がってほしいが、パートナーの確保ができないと形骸化する。急ぎすぎないほうがよい。

○各地で動き出しているパートナー的な人が集まって、取組を進めていく「幹」のようなものが必要。こうした点こそ、国や行政が担えるのではないか。

③ 願っていることを声にだしたら、それがすぐ施策や取組にいかされる流れを

○普段の生活で願うことは、普通の暮らし。ちょっと買い物にいきたい。病院に行きたい。特に初期の場合、普通の暮らしの中に小さな困りごとがあつて、だれに助けを求めたらいいかわからない人がいるはず。

「認知症だから」とくくりでされ、できることが奪われることがたくさんある。

○せつかくの制度や事業が、本人に役立ち、本人がよりよく生きていく助けとなるように、本人の願いが声に出た後、そのままにならないよう、専門の立場の方がきちんと受け止めて、速やかに反映させてほしい。

できると思っていたことがだんだんできなくなるため、「そのうち」では、自分たちには時間がない。

④ すべての市町村に確実に伝わり、実際に動いてもらえることが必要

○地域によってどんどん格差が広がっていくことに不安を感じている。変わらない地域をどう変えていくのか。こうした取り組みがあることが、市町村や医師等に実際に届くように、多くの情報の一つとして流されずに、実際に取組み始めてもらえるようなしかけをしてほしい。

⑤ 本人が委員会等に参画する、ということについて

○本人についての一番のプロは本人。委員会等に本人が参加することは非常に大切で、自分がこの委員会に参加できていることは大きな一歩。この事業を通じて、各地でも本人がこうした場に参加しやすくすることにつなげたい。

○今後、各地で本人が委員として参画することが予想される。所属や肩書がなくても、本人を委員の一人として平等に扱ってほしい。自分も、委員として、世の中を変えていきたいと思って参加している。

○行政や関係者の理解をもとめるだけでなく、本人たち自身も、周囲にわかってもらうように努力することが大事であり、必要である。

本人が伝える努力、伝わる努力をする必要性を、こうした事業を通じて、本人の立場から全国の本人たちへ呼びかけていきたい。

○ただし、本人が委員会等に参加するのは、想像以上に負担が大きくぜひ配慮を。

会議でそれなりに発言する人をみると、大丈夫と思うかもしれないが、本当に体力を消耗する。

会議等でいいたいことをいうことに集中できるようサポートしてほしい。(自分も、会議前には、事務局に自分の意見を伝えて、形にしてもらい参加する。サポート役は不可欠で、時間もかかることをわかってほしい。)

同行者があれば参加できる人も多いのではないかと。同行者の費用負担が当たり前なことと認めてもらえることが広まれば、他の人も参加しやすい。

○認知症の人といっても、それぞれ得意なこと・不得意なことがあり、会議で発言して意見を反映させたい人もいれば、それが苦手な人もいる。本人が最初に訪れる医療機関や地域包括支援センターで、本人同士の話し合いの場が、展開され、またはそうした場があればそこへつなぐ仕組みも必要ではないか。

今は、自分で違和感を覚えて受診する方も増えてきている。入口となる機関の対応力はこれから重要。ぜひ、本人同士が話し合う意義を理解してもらえる仕組みを。



2) 家族の立場から：高見委員

○今回の10地域の取り組みから、取り組む側が、本人の気持ちを聞くんだ、それを施策に活かそう、と強い心構えでやると、時間や場所や進行方法など様々な方法が編み出されると感じた。本人の声をいかに聴くかがもっと広まらないといけないし、そのためには周りが本気で本人の声を聞こうというところに立つことが鍵だと思う。

○本人自身が相談に乗り、本人の気持ちを聴く取り組みが出始めているが、支援者・パートナーが、本人が話せる場所や時間を作っているのが全国的には大半。

認知症カフェや家族会の本人交流会など、本人が集まる場は増えている。本人からの、「話せればよい、楽しければよい、だけでない」の声はとても大切だが、さまざまな認知症の方がおられ、楽しく話せる場もやはり意味があり、必要である。そこから一歩進んだのがこの取り組みであり、両方を活かし、育てることが大事ではないか。

○ファシリテータがキーだが、いま各地の集まりで活躍するのは、介護経験者や介護職等で、楽しく過ごしてもらおう技術はあるが、個々の思いを引き出すスキルがある人は多くない。ボランティア的な人材に頼らざるをえない限界も考える必要がある。

○ワークショップでさまざまな立場の方の討議があったが、施策への反映よりも、本人の声を聞くときの難しさ、声をかけても来ないとか、本人と接するところの難しさの話も多かった。まずは最初のところが基本で、その工夫・やり方が大事である。

その上で、声を活かすためには、行政の政策担当者たちに、本人に声を聞いてこれを政策に反映させていくことがいかに重要であるかを伝え、そうした視点をもってもらうことが大事ではないか。

3. 提言

本研究事業を総括し、以下の5点を、自治体の認知症施策担当者、ならびに認知症の人の支援や地域づくりに取り組む医療や介護、地域の関係者に、提言する。

提言 1

本人ミーティングについて、地域に情報発信し、対話を

本人ミーティングについては、まだはほとんど知られていない。実際に実施するしない以前に、まずは、本人ミーティングのことを、それぞれの立場からつながりのある人に伝え、本人ミーティングがねらいとしている本人同士が出会い、語り合う中で、多様な可能性が広がることについて、話し合ってみることを提言したい。

話し合いの中で、認知症の人への視点や認識、これからの認知症の人との関わり方や地域でのあり方などについて、多くの気づきが生まれてくることだろう。

なお、本人ミーティングの情報発信をしていく際にも、本事業で作成されたガイドが役立つであろう。

情報発信や対話の機会として、ワークショップが有効であることが本事業で確認されており、各都道府県や市区町村で、専門職や地域の多様な人たちによびかけて、ワークショップの実施がのぞまれる。

提言 2

少人数からでも、本人ミーティングをスタート

本人ミーティングは、本人が数人集まれば開催可能である。
どのような立場の人からでも始めていける。

特に、日常的に認知症の人たちとなじみの関係を築いている
介護事業者や地域包括支援センター、認知症カフェのやサロン
関係者、認知症地域支援推進員等が、小規模からでもスタート
できないか、検討を始めてほしい。

きっかけや情報があれば、自ら参加したいという人が
地域におり、本人ミーティングをきっかけに、仲間と
出会い、前向きな人生の新たなスタートを切れる人が
たくさんいることがパイロット調査でわかってきている。

単独ではなく、つながりのある人と、数人からでも集まる
機会をつくってみないか、話し合いをしてみよう。

提言 3

「声を聴く」ことを、あらゆる事業、取組みの出発点に

本人ミーティングに取組んだ地域からの報告によると本人が声をあげられるのに、周囲からは「もうあまり話せない」、「話は無理」、とみなされてしまっている人が少なくない事が明らかになった。

本人ミーティングの実施の有無にかかわらず、相談や医療、介護現場はもちろんのこと、要介護認定調査や行政が行う各種調査、行政窓口等、あらゆるところで「声を聴く」ことの重要性を浸透させ、あたりまえ水準にしていくことが求められる。

提言 4

認知症施策担当者が本人の声を聴き、本人視点の重視の内実の理解を

本人の声を聴くことが重要なのは、専門職だけではない。

今年度、本人ミーティングに取り組んだ地域では、行政事務担当者や、上位の職位にある人たちが、本人ミーティングに同席し、本人同士の話し合いを聞いたことで、認知症の人への認識が大きく変わったり、本人視点の意味の理解が深まり、取り組む姿勢が変わった人が少なくなかった。

本人ミーティングの場ではなくても、認知症の人がおられる現場に事務職の人でも1回でも出向いてじっくりと話を聞く機会をつくることが求められている。

提言 5

自治体の認知症施策の委員会等の委員に認知症の本人を

今年度調査では、認知症施策の委員会等に本人が参画している率は、都道府県、市区町村ともにまだ低率であったが、一部の自治体では本人が委員として入っているという回答がえられた。

認知症の人の声が反映されないままの施策や事業では、本人視点を重視しているとは言えないであろう。

行政自体が本人の声を聴くという姿勢を示していくことが、本人の視点を重視した、やさしいまちづくりを大きく進展させると考えられる。

本研究に参加協力いただいた
検討委員、ワークショップのメンバー、
そしてパイロット調査(本人ミーティング)を実施した10地域のみなさまに、
心からの謝辞を表します。

資料編

1. 自治体調査 調査票

○都道府県用 調査票（全6ページ）

○市区町村用 調査票（全7ページ）

都道府県用調査票

I. 貴自治体の概要について

貴自治体の概要についてご記入ください。

1 都道府県名	
2 人口	人
3 65歳以上人口	人
4 高齢化率	%
5 管内市区町村数	市区町村
6 認知症施策担当部署名 ※主となる担当部署名	
7 認知症施策担当者の数	人
内、事務職	人
内、専門職	人

II. 「認知症の人の視点重視」について

設問 1

新オレンジプランには「認知症の人の視点の重視」が掲げられていますが、貴都道府県では、本人の視点を認知症施策にどのように位置付けていますか。下記の選択肢から一つ選び、「回答番号欄」に数字を記入してください。「その他」の場合は、下の欄に具体的にお書きください。

- ① 自治体として認知症施策の基本方針として「本人の視点」を掲げ、事業を進めている。
- ② 自治体の基本方針には掲げていないが、事業の実施においては「本人の視点」を重視して進めている。
- ③ 自治体の基本方針・事業ともに、まだ「本人の視点」を重視するには至っていないが、認知症施策担当部署内では、「本人の視点」を重視することへの共通理解が図られている。
- ④ 認知症施策担当部署内で、「本人の視点」を重視することへの共通理解は図られていない。
- ⑤ その他
(その他の具体記述)

回答番号

設問 2

認知症担当者の方と、自治体内(地元)の本人との関わりについて、下記の選択肢から一つ選び、「回答番号欄」に数字を記入してください。「その他」の場合は、下の欄に具体的にお書きください。

- ① 本人と直接関わり、本人の体験や本人が必要としていることを聞くようになっている。
- ② 本人と直接関わることはあるが、本人の体験や本人が必要としていることはあまり聞いていない。
- ③ 本人の体験や本人が必要としていることを直接聞く機会はないが、関係者を通じて知るようになっている。
- ④ 地元の本人の体験や本人が必要としていることは、直接的にも間接的にも聞いていない。
- ⑤ その他
(その他の具体記述)

回答番号

設問3

貴都道府県では、認知症施策等に関する行政の委員会や検討会等に、本人が参画していますか。

下記の選択肢から一つ選び、「回答番号欄」に数字を記入してください。「その他」の場合は、下の欄に具体的にお書きください。

- ① 実際に委員会等に入ってもらい、本人の意見を聴いて、施策や事業等に活かしている。
- ② 会議に本人を招いて話をしてもらったことはあるが、委員としての参画はない。
- ③ 委員会等への本人の参画や、本人を招いて話をしてもらうことは、まだない。
- ④ その他
(その他の具体記述)

回答番号

Ⅲ. 都道府県における、認知症の「本人調査」の実施状況と施策等への反映方法について

設問4

貴都道府県が実施主体となって、本人の「体験」や本人が「必要としていること」を把握するための調査(本人調査という。以下同じ。)の実施、または実施予定がありますか。

選択肢から該当する項目(複数回答)は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

【留意点】調査の方法としては、アンケート調査、個別聞き取り、グループインタビュー、本人ミーティング(本人同士が集い、語り合う)の場での把握、その他、さまざまな方法を含みます。

複数回答

- ① 平成27年度までに、実施 →「設問5」へ進む
- ② 平成28年度中に、実施(予定含む) →「設問5」へ進む
- ③ 平成29年度以降に、予定 →「設問9」へ進む(設問5. 6. 7. 8の回答不要)
- ④ 実施も予定もない →「設問9」へ進む(設問5. 6. 7. 8の回答不要)

回答欄

設問5 : 別シート「設問5」で、回答願います。

設問5

これまで貴都道府県が実施した、または実施予定の本人調査の概要についてお教えてください。

複数件（回）の実施がある場合、シートをコピーしたうえで、「通し番号」を記入してください。

番号→

1. 実施年度（平成）

平成→

2. 対象年齢（一つを選択）

回答番号

- ① 65歳以上
- ② 65歳未満（若年性認知症を対象）
- ③ 年齢問わず

3. 方法（複数回答）

該当する項目は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

複数回答

回答欄

- ① アンケート調査
- ② 個別聞き取り
- ③ グループインタビュー
- ④ 本人ミーティング（本人同士が集い、語り合う場）での聞き取り
- ⑤ その他
（その他の具体記述）

4. 本人への依頼方法

（例：認知症カフェの参加者に依頼、介護支援専門員が利用者に依頼、医療機関を通じて依頼等）
（具体記述）

5. 把握（調査）の主な内容（複数回答）

該当する項目は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

複数回答

回答欄

- ① 発症後の体験や思い
- ② 生活上の不自由や困りごと
- ③ 生活上の工夫・アイデア
- ④ 楽しみや希望
- ⑤ やってみたいこと
- ⑥ 医療への要望
- ⑦ 介護への要望
- ⑧ 地域や社会への要望
- ⑨ 行政への要望
- ⑩ 家族への要望
- ⑪ その他
（その他の具体記述）

6. 協力を得られた人数（今年度これから実施する場合は、大まかな予定数を記入）

--

7. 把握（調査）に関与した人の立場（複数回答）

該当する項目は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

複数回答

回答欄

- ① 都道府県職員
- ② 若年性認知症支援コーディネーター
- ③ 市区町村職員
- ④ 地域包括支援センター職員
- ⑤ サポート医
- ⑥ 他の医師
- ⑦ 認知症地域支援推進員
- ⑧ 介護支援専門員
- ⑨ 民生・児童委員
- ⑩ 本人自助組織関係者
- ⑪ 家族自助組織関係者
- ⑫ その他

（その他の具体記述）

8. 実施の経過や結果を通じて得られたこと（主な点） ※これから実施する場合は記入不要

（具体記述）

--

「設問5」は、以上です。

設問 6：今年度、これから実施する場合は、回答不要

本人調査の結果を受けて、それをどのように活かしましたか。

選択肢から該当する項目（複数回答）は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

⑬、⑮の場合は、具体記述欄にご記入願います。

複数回答

- ① 本人たちと話し合い「必要なこと」を明確にした。
- ② 家族たちと話し合い「必要なこと」を明確にした。
- ③ 本人の体験や意見を集約した冊子等を作成した。
- ④ 地域ケア会議で話し合った。
- ⑤ 初期集中支援チーム員の会議等で話し合った。
- ⑥ 地域包括支援センター職員の集まりや会議、研修等で情報共有した。
- ⑦ 医療・介護の専門職を対象とした集まりや会議、研修等で情報共有した。
- ⑧ 行政職員を対象とした集まりや会議、研修等で情報共有した。
- ⑨ 市民の集まりや講演会等で活用した。
- ⑩ キャラバンメイトの集まり・研修等で活用した。
- ⑪ 認知症サポーター講座で活用した。
- ⑫ 認知症施策や事業等を見直すために活用した。
- ⑬ 新たな認知症施策や事業につなげた。（→具体記述欄に記入）
- ⑭ 本人の支援の改善につなげた。
- ⑮ その他（→具体記述欄に記入）

回答欄

（⑬の具体記述）

（⑮の具体記述）

設問 7：今年度、これから実施する場合は、回答不要

本人調査の実施や、本人の意見を行政施策に活かす過程で、得られたことがありましたら具体的にお答えください。

（具体記述）

設問 8：今年度、これから実施する場合は、回答不要

本人調査の実施や、本人の意見を行政施策に活かす過程で、課題になったことがありましたら具体的にお答えください。

（具体記述）

IV. 今後について：以下は全ての方が回答願います。

設問 9

市区町村や地域の関係機関等での本人調査の実施への支援について、選択肢から該当する項目（複数回答）は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

その他の場合は、具体記述欄にご記入願います。

複数回答

- ① 市区町村や地域の関係機関等の実施を具体的に支援していく予定がある。
- ② 市区町村や地域の関係機関等の実施を具体的に支援していく予定はないが、今後支援していきたい。
- ③ 市区町村や地域の関係機関等の実施について、支援することは考えていない。
- ④ その他
(その他の具体記述)

回答欄

設問 10

本人調査について知りたいことや必要なことについて、選択肢から該当する項目（複数回答）は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

その他の場合は、具体記述欄にご記入願います。

複数回答

- ① 本人調査の具体的な進め方や内容を知りたい。
- ② 実施した他地域の実例を知りたい。
- ③ 自治体内で本人調査をやる環境づくりとして、自治体内で関係者が本人調査の必要性や意義を共有するための、資料がほしい。
- ④ 他地域の本人調査の企画書等を知りたい。
- ⑤ 本人調査を行うための研修や情報交換の場があってほしい。
- ⑥ 特になし
- ⑦ その他
(その他の具体記述)

回答欄

設問 11

貴都道府県として、本人の意思の尊重や本人の視点重視を進めていくために、取り組んでいること、今後取り組もうとしていること（取り組みたいこと）があれば、教えてください（自由記述）

(自由記述)

--

設問は以上です。ご協力ありがとうございました。

市区町村用調査票

I. 貴自治体の概要について

貴自治体の概要についてご記入ください。

1	都道府県名		
2	市区町村名		
3	地方公共団体コード		参照:総務省HP: http://www.soumu.go.jp/denshiiti/code.html
4	人口		人
5	65歳以上人口		人
6	高齢化率		%
7	日常生活圏域		圏域
8	地域包括支援センター数		か所
9	内、直営		か所
10	内、委託		か所
11	認知症施策担当部署名 ※主となる担当部署名		
12	認知症施策担当者数		人
13	内、事務職		人
14	内、専門職		人
15	本調査票記入者の職種		(事務職/専門職のいずれかを記入願います)

II. 「認知症の人の視点重視」について

設問 1-1

新オレンジプランでは、「認知症の人の視点の重視」が、施策や事業を進めていく上での重要な柱として掲げられています。が、「認知症の人の視点の重視」についてどのようにお考えですか。下記の選択肢から一つ選び、「回答番号欄」に数字を記入してください。「その他」の場合は、下の欄に具体的にお書きください。

- ① 新オレンジプランに掲げられる以前から、重要だと考えていた。
- ② 新オレンジプランに掲げられたことで、重要だと考えるようになった。
- ③ 新オレンジプランに掲げられたことは知っているが、それほど重要だと考えていない。
- ④ 新オレンジプランに掲げられたことを知らなかった。
- ⑤ その他

(その他の具体記述)

回答番号

設問 1-2

貴自治体では、本人(認知症の人ご本人をいう。以下同じ。)の視点を認知症施策にどのように位置付けていますか。下記の選択肢から一つ選び、「回答番号欄」に数字を記入してください。「その他」の場合は、下の欄に具体的にお書きください。

- ① 自治体として認知症施策の基本方針として「本人の視点」を掲げ、事業を進めている。
- ② 自治体の基本方針には掲げていないが、事業の実施においては「本人の視点」を重視して進めている。
- ③ 自治体の基本方針・事業ともに、まだ「本人の視点」を重視するには至っていないが、認知症施策担当部署内では、「本人の視点」を重視することへの共通理解が図られている。
- ④ 認知症施策担当部署内で、「本人の視点」を重視することへの共通理解は図られていない。
- ⑤ その他
(その他の具体記述)

回答番号

設問 2

認知症担当者の方と、自治体内(地元)の本人との関わりについて、下記の選択肢から一つ選び、「回答番号欄」に数字を記入してください。「その他」の場合は、下の欄に具体的にお書きください。

- ① 本人と直接関わり、本人の体験や本人が必要としていることを聞くようにしている。
- ② 本人と直接関わることはあるが、本人の体験や本人が必要としていることはあまり聞いていない。
- ③ 本人の体験や本人が必要としていることを直接聞く機会はないが、関係者を通じて知るようにしている。
- ④ 地元の本人の体験や本人が必要としていることは、直接的にも間接的にも聞いていない。
- ⑤ その他
(その他の具体記述)

回答番号

設問 3

貴自治体では、本人が集まり、本人同士で自らの体験や必要なことを話し合う機会がありますか？ 選択肢から該当する項目(複数回答)は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。⑨の場合は、具体記述欄にご記入願います。

複数回答

- ① 市区町村が主催/委託して、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。
- ② 都道府県が主催/委託して、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。
- ③ 本人の自助グループが、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。
- ④ 家族の自助グループが、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。
- ⑤ 地域の医療機関が、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。
- ⑥ 地域の介護事業所が、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている
- ⑦ 地域の医療・介護職等の自主組織が、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。
- ⑧ 社協等、地域活動組織が、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。
- ⑨ その他
- ⑩ あるかどうか、把握していない
- ⑪ ない

(⑨の具体記述)

回答欄

設問 4

設問 3 で、①～⑨を選択した方に伺います：本人同士が話し合う機会に参加したことがありますか。

下記の選択肢から一つ選び、「回答番号欄」に数字を記入してください。「その他」の場合は、下の欄に具体的にお書きください。

- ① そうした機会には、積極的に参加するようにしている。
- ② 参加したことはある。
- ③ 参加したことがない
- ④ その他
(その他の具体記述)

回答番号

設問 5

貴自治体では、認知症施策等に関する行政の委員会や検討会等に、本人が参画していますか。

下記の選択肢から一つ選び、「回答番号欄」に数字を記入してください。「その他」の場合は、下の欄に具体的にお書きください。

- ① 実際に委員会等に入ってもらい、本人の意見を聴いて、施策や事業等に活かしている。
- ② 会議に本人を招いて話をしてもらったことはあるが、委員としての参画はない。
- ③ 委員会等への本人の参画や、本人を招いて話をしてもらうことは、まだない。
- ④ その他

回答番号

Ⅲ. 認知症の「本人調査」の実施状況と施策等への反映方法について

設問 6

貴自治体管内で、本人の「体験」や本人が「必要としていること」を把握する調査(本人調査という。以下同じ。)をされたことがありますか。選択肢から該当する項目(複数回答)は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

【留意点】調査の方法としては、アンケート調査、個別聞き取り、グループインタビュー、本人ミーティング(本人同士が集い、語り合う)の場での把握、その他、さまざまな方法を含みます。

複数回答

- ① 平成27年度までに、実施 →「設問7」へ進む
- ② 平成28年度中に、実施(予定含む) →「設問7」へ進む
- ③ 平成29年度以降に、予定 →「設問11」へ進む(設問7. 8. 9. 10の回答不要)
- ④ 実施も予定もない →「設問11」へ進む(設問7. 8. 9. 10の回答不要)

回答欄

設問 7 : 別シート「設問 7」でご回答願います。

設問7

これまで貴自治体管内で、実施した、または実施予定の本人調査の概要についてお教えてください。

複数件（回）の実施がある場合、シートをコピーしたうえで、「通し番号」を記入してください。 番号→

1. 実施年度（平成）

平成→

2. 実施主体

- ① 市区町村
- ② 地域包括支援センター
- ③ 本人の自助組織
- ④ 家族の自助組織
- ⑤ その他

（その他の具体記述）

回答番号

3. 対象年齢（一つを選択）

- ① 65歳以上
- ② 65歳未満（若年性認知症を対象）
- ③ 年齢問わず

回答番号

4. 方法（複数回答）

該当する項目は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

複数回答

- ① アンケート調査
- ② 個別聞き取り
- ③ グループインタビュー
- ④ 本人ミーティング（本人同士が集い、語り合う場）での聞き取り
- ⑤ その他

（その他の具体記述）

回答欄

5. 本人への依頼方法

（例：認知症カフェの参加者に依頼、介護支援専門員が利用者に依頼、医療機関を通じて依頼等）
（具体記述）

6. 把握（調査）の主な内容（複数回答）

該当する項目は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

複数回答

- ① 発症後の体験や思い
- ② 生活上の不自由や困りごと
- ③ 生活上の工夫・アイデア
- ④ 楽しみや希望
- ⑤ やってみたいこと
- ⑥ 医療への要望
- ⑦ 介護への要望
- ⑧ 地域や社会への要望
- ⑨ 行政への要望
- ⑩ 家族への要望
- ⑪ その他
(その他の具体記述)

回答欄

7. 協力を得られた人数（今年度これから実施する場合は、大まかな予定数を記入）

--

8. 把握（調査）に関与した人の立場（複数回答）

該当する項目は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

複数回答

- ① 市区町村職員
- ② 地域包括支援センター職員
- ③ サポート医
- ④ 他の医師
- ⑤ 認知症地域支援推進員
- ⑥ 介護支援専門員
- ⑦ 民生・児童委員
- ⑧ 本人自助組織関係者
- ⑨ 家族自助組織関係者
- ⑩ その他
(その他の具体記述)

回答欄

9. 実施の経過や結果を通じて得られたこと（主な点） ※これから実施する場合は記入不要

(具体記述)

--

「設問7」は、以上です。

設問 8 : 今年度、これから実施する場合は、回答不要

本人調査の実施後、それをどのように活かしましたか。

選択肢から該当する項目（複数回答）は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

⑬、⑮の場合は、具体記述欄にご記入願います。

複数回答

- ① 本人たちと話し合い「必要なこと」を明確にした。
- ② 家族たちと話し合い「必要なこと」を明確にした。
- ③ 本人の体験や意見を集約した冊子等を作成した。
- ④ 地域ケア会議で話し合った。
- ⑤ 初期集中支援チーム員の会議等で話し合った。
- ⑥ 地域包括支援センター職員の集まりや会議、研修等で情報共有した。
- ⑦ 医療・介護の専門職を対象とした集まりや会議、研修等で情報共有した。
- ⑧ 行政職員を対象とした集まりや会議、研修等で情報共有した。
- ⑨ 市民の集まりや講演会等で活用した。
- ⑩ キャラバンメイトの集まり・研修等で活用した。
- ⑪ 認知症サポーター講座で活用した。
- ⑫ 認知症施策や事業等を見直すために活用した。
- ⑬ 新たな認知症施策や事業につなげた。
- ⑭ 本人の支援の改善につなげた。
- ⑮ その他(具体的に)

回答欄

(⑬)の具体記述

(⑮)の具体記述

設問 9 : 今年度、これから実施する場合は、回答不要

本人調査の実施を通じて、市民や支援関係者、認知症の本人・家族に変化がありましたか。

選択肢から該当する項目（複数回答）は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

複数回答

- ① 認知症に関する理解が進んだ。
- ② 本人の視点を重視する機運が醸成された。
- ③ 見守り体制づくり等への参加・協力者が増えた。
- ④ 住民による自発的な本人支援活動につながった。
- ⑤ 認知症サポーター養成講座の受講者が増えた。
- ⑥ 小売店や金融機関等での対応において、本人の視点にたった工夫がみられるようになった。
- ⑦ 医療関係者の支援において、本人の視点にたった工夫がみられるようになった。
- ⑧ 介護関係者の支援において、本人の視点にたった工夫がみられるようになった。
- ⑨ 家族による支援において、本人の視点にたった工夫がみられるようになった。
- ⑩ 本人の自分自身の生活において、他の本人の工夫がみられるようになった。
- ⑪ 本人が、地域の中で前向きに暮らす姿が増えた。
- ⑫ その他(具体的に)

回答欄

(具体記述)

設問 10 : 今年度、これから実施する場合は、回答不要

本人調査を行ったり、それを活かす過程で、課題になったことがありましたら具体的にお答えください。

(具体記述)

IV. 今後に向けて：以下は全ての方が回答願います。

設問 1 1

あなたは、自治体の施策や事業を進めていく上で、本人調査を行うことが必要だと思いますか。下記の選択肢から一つ選び、「回答番号欄」に数字を記入してください。「その他」の場合は、下の欄に具体的にお書きください。

その他の場合は、具体記述欄にご記入願います。

- ① とても必要
- ② 必要
- ③ あまり必要と思わない
- ④ 全く必要と思わない
- ⑤ わからない
- ⑥ その他

(その他の具体記述)

回答欄

設問 1 2

本人調査について知りたいことや必要なことについて、選択肢から該当する項目（複数回答）は、数字の「1」、該当しないものは「0」を、回答欄に記入してください。

その他の場合は、具体記述欄にご記入願います。

複数回答：実施の予定がない場合もご記入ください

- ① 先進事例を知りたい。
- ② 他地域の本人調査の企画書等を知りたい。
- ③ 本人調査実施に向け、関係者間の合意を作る際に利用できる資料がほしい。
- ④ 本人調査の具体的な進め方や内容を知りたい。
- ⑤ 本人調査を行うための研修や情報交換の場がほしい。
- ⑥ 特になし
- ⑦ その他

(その他の具体記述)

回答欄

設問 1 3

貴自治体として、本人の意思の尊重や本人の視点重視を進めていくために、取り組んでいること、今後取り組もうとしていること（取り組みたいこと）があれば、教えてください（自由記述）

(自由記述)

設問は以上です。ご協力ありがとうございました。

2. ワークショップ（全2回）で使用した資料・シート

◆第1回ワークショップ

本日のねらい

資料2

第1回ワークショップ 2016.8.20

<背景> 本事業のねらいととりくむこと


- ・ 認知症を発症後の生き方や支え方が大きく変わりつつあり、よりよく生きていける可能性が広がってきている。
- ・ 認知症の人の意思が尊重され、地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる「やさしい地域」の実現を、すべての自治体や地域で加速させていくことが求められている。
- ・ その際、「認知症の人の視点の重視」は、あらゆる事業や取組を貫く横串となる重要な柱である。 （国の新オレンジプラン）
- ・ その一方、認知症とともに生きている本人の生きづらさや求めていることを把握(調査)する方法や、その結果を施策に反映する方法がしっかりとできていない。その方法が待たれている。



<本事業のねらい> 昨年、平成27年度からスタート。今年度は2年目

1. 本人の生きづらさや求めていることを、本人視点にたって把握(調査)し、それを施策に反映していくための一連のあり方や方法を検討する。
2. パイロット地域で試しにやってみて、やった結果等も踏まえて、具体的な方法を検討する。
3. 検討結果をもとに、分かりやすい手引きや取組の例を載せた冊子を作り、全国の市町村に普及をはかる。

<今年度とりくむこと>

1. **委員会で、本人の生きづらさや求めていること、それらを施策に反映するあり方や方法を討議する。**
- 
2. パイロット地域(10地域)で本人と共に、試しにやってみる。
* 一堂に集まり、実際どのようにやったらいいかの情報交換や話しあいをする＝ワークショップ(2回)
 3. 以上を結果をもとに、分かりやすい手引き書を作り、全国の他の地域でも、本人の視点を重視した取組が進むよう普及をはかる。

◆第1回ワークショップ

ワークシート

話しあいメモ用紙 名前: _____		第1回ワークショップ 2016.8.20
<p>地元でじっくり話しあう機会をつくるための、作戦を考えよう</p>		
<p>本当に必要なことは、本人にしかわからない。 暮らしやすい地域にしていくために、自分たち(本人同士)が集まり、 体験や願い、希望(本音)を話しあえる機会を、一緒につくろう！広げていこう！</p>		
<p>話しあってみよう！知りたいことを、お互いに聞いてみよう。 *自分たち=本人たち</p>		
<p>これから地元で、より良い本人同士の集まり・話し合いにしていくために</p>		
	地域名:	地域名:
<p>*なぜ必要か 自分たち(本人たち)が話しあうことがなぜ必要か (意義の共有)</p>		
<p>*もっと話したいこと ふだん思っているが十分に言えずにいて、もっと話したいことは</p>		
<p>①参加者 話しあいにどんな人が、参加できたらいいか</p>		
<p>②つなぐ人・ルート 早い時点で話しあいに参加できるために、誰がつないでくれたらいいか</p>		
<p>③場所 参加しやすく話しやすい場所は</p>		
<p>④進行役 話しあいの進行役はどんな人と話しやすいか</p>		
<p>⑤協働する人/組織 地域のどんな人と一緒に取り組むとよりよい“調査”になり、結果の反映や継続に進むか</p>		
<p>⑥その他 配慮や工夫など</p>		

◆第2回ワークショップ

この事業のねらい

この事業のねらい

【 この事業の目的 】

1. 本人の生きづらさや求めていることを、本人視点にたつて把握(調査)し、それを施策に反映していくための一連のあり方や方法を検討する。
2. パイロット地域で試しにやってみて、やった結果等も踏まえて、具体的な方法を検討する。
3. 検討結果をもとに、分かりやすい手引きや取組の例を載せた冊子を作り全国の市町村に普及をはかる。

※この事業の背景は ⇒ 【資料2-2 藤田委員の意見から】

【 前回(第1回ワークショップ)の集まり 】

・8月20日

・全国10地域が参加、5グループにわかれて話しあい

・話しあいの内容

地元でじっくり話し合うための作戦をたてよう

*なぜ必要か

自分たち(本人たち)が話しあうことが なぜ必要か (意義の共有)

*もっと話したいこと

ふだん思っているが 十分に言えずにいて、もっと話したいことは

①参加者

話しあいに どんな人が、参加できたらいいか

②つなぐ人・ルート

早い時点で話しあいに参加できるために、誰が見つないでくれたらいいか

③場所

参加しやすく 話しやすい場所は

④進行役

話しあいの進行役は どんな人だと話しやすいか

⑤協働する人/組織

地域のどんな人と一緒に取り組むとよりよい“調査”になり、

結果の反映や継続に進むか

⑥その他 配慮や工夫など

◆第2回ワークショップ

本日のねらい

資料3

今日のねらいと進め方

第2回ワークショップ 2016.11.29

<今日のねらい>

各地の動きを参考にしながら、話し合おう

①本人同士の話しあいを、さらによりよいものに！

*「暮らしの実際と必要な支援」について声を出し、声を集めるための
よりよいやり方のアイデアをだしあおう。

②声を活かしていこう！

*話しあいが出た声を、地域で活かすためのアイデアをだしあおう。

<進め方>

1. 今年度の動きについて、各地域から紹介

休憩をはさみながら

2. グループワーク：グループに分かれて、情報やアイデアをだしあおう

グループ： ・本人同士のグループ (2つ)

・パートナーのグループ (3つ)

3. 全体のまとめ

3. パイロット調査で使った文書・シート

◆説明書・同意書・同意撤回書
鏡文

**「暮らしの実際と必要な支援について」の話し合い（本人ミーティング）
への参加と調査協力をお願い**

1. 今年度、厚生労働省の研究*として、「認知症の人の視点を大切にした医療・介護・地域の支援をつくりだしていくための調査」を行うことになりました。
2. 調査は、みなさんに集まって話しあっていただいた内容をまとめていきます。
3. 【別紙1】をお読みのうえ、みなさんの思いや率直な意見をお聞かせください。
4. みなさんがお話くださったことは、今後の医療・介護・地域の支援に関する政策づくりに活用していきます。
5. 本人ミーティングへの参加と調査への協力を、どうぞよろしくお願いします。

平成 28 年 11 月

依頼者（研究代表）

東京都健康長寿医療センター研究所

自立促進と介護予防研究チーム

研究部長 粟田 圭一

お問い合わせ先

※主催団体をご記入ください

団体名

担当者名

電話

F A X

メール

* 調査研究事業

平成 27 年度 厚生労働省老人保健健康増進等事業

「認知症の人の視点を重視した生活実態調査及び認知症施策の企画・立案や評価に
反映させるための方法論等に関する調査研究事業」

【別紙1】

「暮らしの実際と必要な支援について」の話し合い（本人ミーティング）

1) 話していただきたいこと

- ①日々の中で感じている（ちょっとした）生活のしづらさ、困りごと
- ②こんなことをしたい、こんな生活だったらいいなあ、という願い、希望
- ③医療や介護、地域の支援について、感じていること、こんなことが必要、こうあってほしいという意見

2) 話しあいの進め方

- ・みなさんがすでにおなじみの〇〇さんが、話し合いを進行します。少人数で、ゆったりと話し合いを進めます。
- ・途中で休憩をはさみながら、全体で2時間程度を予定しています。
- ・1回では話しきれなかった場合は、追加で何回か集まっていただくことがあります。

※お願い※

話し合いの中で知った個人情報は、外で他の人に話さないようお願いします。

3) 記録について

- ・話していただいたことを後ほど振り返るために、録音をさせていただきます。
- ・録音した内容は、誰が話したかがわからないよう、個人の情報を伏せた文書にして取り扱います。

4) 内容の整理やまとめ

- ・話していただいた内容（個人情報を伏せた文書）をわかりやすい形に整理します。
 - ・それを、皆さんにお渡しし、言いたいことが表現されているか、修正点がないか、確認をお願いします。
- *この点については、みなさまのご負担がかからないよう、相談しながら進めます。

5) 話しあったことをどう活かすか

- ・みなさんに確認いただいた内容は、報告書の形にして公表します。
- ・みなさんが話し合ったことは、国や市町村の今後の医療・介護・地域の支援に関する政策づくりに活用していきます。

6) 話しあいの日時・場所

日時：

場所：

以上のことにご協力いただけるかどうか、【別紙2】の同意書に記入をお願いします。

*わかりにくい点や疑問点等がありましたら、お気軽にご質問ください。

*同意いただいた後に、協力したくないと思われた場合は、自由に取り消せます【別紙3】。

*同意・協力いただけない場合も、一切、不利になることはありません。

◆説明書・同意書・同意撤回書

別紙3 同意撤回書

【別紙3】

同意撤回書

東京都健康長寿医療センター研究所
自立促進と介護予防研究チーム
研究部長 粟田 圭一 殿

私は、「暮らしの実際と必要な支援について」の話し合い（本人ミーティング：
「認知症の人の視点を重視した生活実態調査及び認知症施策の企画・立案や評価に反映させるための方法論等に関する調査研究事業」の一環として実施）の参加と研究協力への同意を撤回いたします。

記入日	平成 年 月 日
氏名（性別）	（男・女）
生年月日	大正・昭和 年 月 日
住 所	

4. 本人ミーティングの実施状況報告に使用した文書・シート

- ◆調査実施報告シート（共通） ※さらに、実施状況を現地ヒアリング等で確認
1枚目

地域	
実施主体	
以下の項目について、それぞれご記入/ご確認をお願いします。	
1. 実施概要	
① 日時	2016年月日() : ~ : (休憩 ~)
② 場所	・会場の名称 ・住所
③ 参加者人数 ・名簿 (本人・同席者)	・本人 人 同席者 人 計 人 ★最終名簿をご提出ください (事前に提出していただいた参加者名簿をもとに加筆修正してください) ・ほか研究班関係者： 人()
④ 役割分担	進行役： 実施サポート： 記録：ICレコーダー* 台(うち、1台は研究班) 撮影： そのほか()：
2. 本人や関係者が意見を言える場(本人ミーティングの場)を作り出すまで	
⑤ 今回の本人ミーティングの場を作り出すまで	いつからか、きっかけ、目的など
⑥ 今回の本人ミーティングの場の特徴	箇条書きで
⑦ 参加者(本人)への案内や調整方法	
⑧ 参加者(家族)への案内や調整方法	
⑨ 参加者(同席者)への決定や調整方法	
⑩ 何故その場所を選んだか	
⑪ 今回の本人ミーティングの場を継続する上での課題	

◆調査実施報告シート（共通）

2枚目

3. 今回の話された内容(簡潔に)		
⑫	本人ミーティングで話された「希望」	
⑬	本人ミーティングで話された「生活の困難」	
⑭	本人ミーティングで話された「医療や介護、地域の支援について」	
4. 当日の進行で配慮・工夫したこと		
⑮	本人一人ひとりが率直に語れるために	
⑯	本人同士が体験・意見をやりとりできるように	
⑰	準備や進行について	良かった点: 要改善点:
⑱	その他	
5. 本人ミーティングを円滑に行っていくために必要なこと・課題		
⑲	本人一人ひとりが語りたことを話すには何が必要か	
㉑	その他	
6. 本人ミーティングで話されたことを事業や施策等へ反映していくための地元でのアイデア		
㉑	活かしてもらいたい相手(具体的な組織/立場)と活かし方(なにをどのように)	・活かしてもらいたい相手(具体的な組織/立場)⇒活かし方(なにをどのように)
㉒	活かしてもらうために必要な作業ステップ	例) 集約結果を本人・関係者が〇〇に持参し、〇〇と話しあう機会をつくる 等
㉓	事業や施策等へ反映する上で大切にしたいこと	
ありがとうございました		

5. 報告会 案内チラシと配布資料（抜粋）

認知症のわたしたち
が語り合い、伝える
～やさしいまちを
いっしょにつくろう！～

参加無料

平成28年度厚生労働省老人保健健康増進等事業
認知症の人の視点を重視した生活実態調査及び
認知症施策の企画・立案や評価に反映させるための
方法論等に関する調査研究事業

報告会

日時:平成29年2月17日(金)
10時30分～16時 ※開場は10時

会場:有楽町朝日ホール
(有楽町マリオン11F)
駐車場の用意はありません。
公共交通機関をご利用ください。

■対象：行政関係者、地域包括支援センター職員、
介護・医療関係者、教育・研究機関関係者、学生
認知症の本人・家族、市民、企業 等

定員：500名

事前の申込みが必要です。
要旨をご覧ください。

どなたでも
参加OK!

わがまちで、よりよく暮らすには一人が声を発し、その声をもとに、思いをかなえていこう—これが全国で広がるように、取り組んだ3地域からの報告等です。ぜひご参加を！！

プログラム(予定)

10:30～	開会：栗田 圭一／(地)東京都健康長寿医療センター 自立促進と介護予防研究チーム 研究部長 【本研究事業 委員長】
10:40～10:55	この事業のわらいー「これから」にむけて、さいしょにお伝えしたいこと 藤田和子／日本認知症ワーキンググループ 共同代表【本研究事業 委員】
10:55～11:40	この事業で取り組んだこと・見えてきたこと：全国調査や10地域の取り組みを通じて 永田久美子／認知症介護研究・研修東京センター 研究部長【本研究事業 委員】
11:40～12:45	昼休憩：情報交換・ネットワーキング
12:45～15:00	3つの地域からの報告 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px; font-size: 12px;"> <p>「本人が本人と出会うこと」—その意味を、 本人も、まわりも、取り組みの中で実感したこと等が報告されます</p> </div> <ol style="list-style-type: none"> 1) 宮城県仙台市チーム 認知症とよりよく生きる“ワーキンググループみやぎ”を基地に ～やさしいまちを一緒につくろう～ 2) 兵庫県チーム 「若年性認知症とともに歩む」～本人・家族の声を活かす、兵庫県の取り組み～ 3) 香川県綾川町チーム 介護予防事業のなじみの集まりを、本人同士が語り合い声を活かす場
15:00～15:30	これからにむけて、それぞれのまちで、本人が必要としていることを語ろう！活かしていこう！ 【各地で取り組んだ本人+パートナー+支援者】
15:30～16:00	情報交換・ネットワーキング

主催：一般財団法人長寿社会開発センター 国際長寿センター

認知症のわたしたちが語り合い、伝える ～やさしいまちを いっしょにつくろう！～

事業報告会 参加申込書

申込み締切：平成29年2月18日（月）

報告会担当 行き

電子メールの場合

下記内容（氏名、市区町村、立場・職種、連絡先、人数）をメール文にご記入の上、メールの「件名」を「報告会参加希望」としてお送りください。

■送り先メールアドレス：chousa22@itsu-doko.net

FAXの場合

下記にご記入の上、お送りください。

■送り先FAX番号：050-3730-2172

参加申込み者 ご氏名	市区町村	立場・職種	ご連絡先 電話番号/ メールアドレス

★一緒に参加をご希望の方は、以下にご記入ください

	参加希望者氏名	市区町村	立場・職種
①			
②			
③			
④			
⑤			
⑥			

定員を超えた場合、ご参加いただけない場合がございますので、あらかじめご了承ください。その場合は、事前に連絡をさせていただきます。
（連絡がない場合はご参加いただけます）

<報告会に関するお問い合わせ>

メール chousa22@itsu-doko.net FAX: 050-3730-2172

一般財団法人長寿社会開発センター 国際長寿センター 報告会担当

事務局使用欄

以下、報告会資料から、地域からの報告3点を掲載

●宮城県仙台市チーム

認知症とよりよく生きる

“ワーキンググループみやぎ”を基地に
～やさしいまちを一緒につくろう～

●兵庫県チーム

「若年性認知症とともに歩む」

～本人・家族の声を活かす、
兵庫県の取組み～

「若年性認知症とともに歩む」

～本人・家族の声を活かす、
若年性認知症生活支援相談センターと「ひょうごの会」の取組み～

●香川県綾川町チーム

介護予防事業のなじみの集まりを、
本人同士が語り合い声を活かす場に

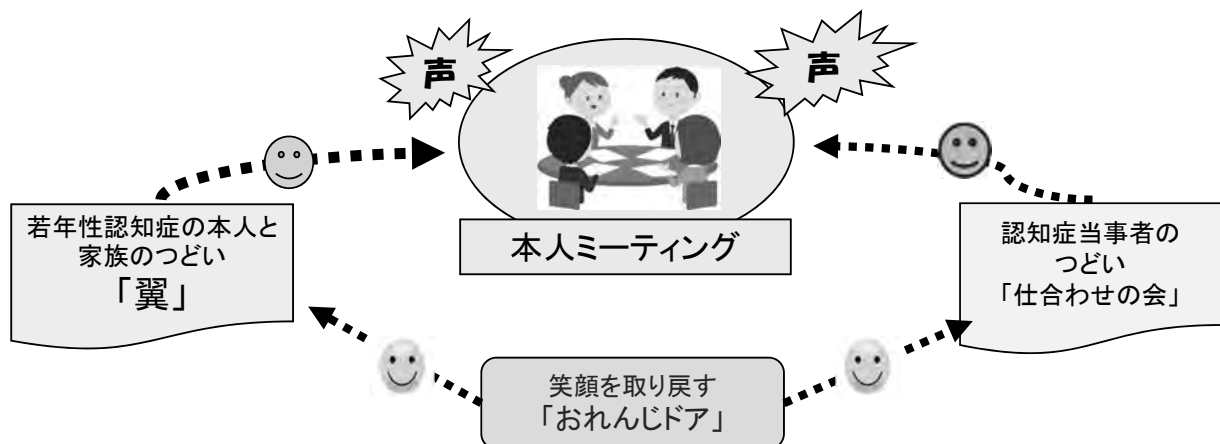
認知症とよりよく生きる
“ワーキンググループみやぎ”を基地に

～やさしいまちを一緒につくろう～

仙台チーム

平成29年2月17日報告会

～本人ミーティングを生み出したのは当事者の声～
支えるのは当事者が参加するネットワーク



“認知症とともによりよく生きる”をめざして活動する
【宮城の認知症とともに考える会】

個人



参加

当事者・家族の会・認知症専門医・研究者・社会福祉士・精神保健福祉士・作業療法士・看護師・保健師
弁護士・薬剤師・介護支援専門員・施設職員・地域包括職員・行政職員・マスコミ・NPO・企業関係者ら

「本人ミーティング」をしよう 「おれんじドア」の経験を活かせる！

1. 企画は当事者を中心にパートナーと協働

「おれんじドア」の経験を活かせばできる！

- ・ミーティングの主役は当事者 / 司会進行は当事者。
- ・会場確保・会計・記録はパートナー。
- ・付添い家族は本人ミーティングに入らず、別室で懇談する。
- ・パートナーは両方の話合いに同席。

2. 参加への声かけ ～“集める”ではなく“集まる”ミーティングに～

- ・当事者による当事者への「呼びかけ」を作成。当事者・支援者が「本人ミーティング」の趣旨を説明し、希望する人を募る！
- ・おれんじドアとつながりがある当事者のつどいに呼びかける。
- ・家族と同居する人には支援者から家族に趣旨を説明する。

「おれんじドア」＝不安な時期に希望とつながる「出会い」の場

当事者による当事者のための総合相談窓口（月1回）

◎“話せない”と言われた人たちが**当事者の司会**で本音を語り、笑顔を取り戻す！
入口のドアを開けた「本人」の笑顔がおれんじドアを継続するかに！

「本人ミーティング」の実施例

【会 場】公共交通機関で行ける貸会議室・市民活動スペース 等

【時 間】午前の1時間30分程度 休憩を挿み終了後にランチなども

【テーマ】話し合うテーマをわかりやすくボードに書き出して話合いを進める

「日々感じている生活のしずらさや困りごと」「生活の希望や願い」

《例》「本人同士の交流は必要か、どんな場なら行きたいか」

「医療・介護・行政窓口・地域・家族の支援はどうあって欲しいか」



《振り返り》

- ・飲物はお仕着せでなく各自選ぶ方が良かった。
- ・参加者の経験に基づく意見や提案が出され、“ミーティングはできる”と確信した。
- ・話を深めるにはテーマを1つか2つに絞り、参加者のペースに合わせてゆっくり進行した方がよい。話し合うテーマを1題ずつボードに示したので参加者がテーマに集中できた。
- ・パートナーの同席者は代弁せず、本人の話を待つことが大切。
- ・休憩時やランチの時の方がリラックスして本音が出やすかった。
- ・ミーティングのまとめとして、話合ったことを参加者に確認した方がよい。

ミーティングでの本人の声

家族がうるさい。言ってくれるのはありがたいが心配のしすぎ。
できることを奪わないでください。
失敗しても怒られない環境が大事です。

- ・安心してすごせる居場所が欲しい。
- ・私！認知症ですと言える社会に。
- ・デイサービスだけではなく、毎日でも行ける「カフェ」や「つどい」の様な楽しく、自分が自分で居られる居場所がほしい。

- ・薬もだけど、環境も大事。
- ・前向きに生きるための様々な工夫を話し合う。

- ・ケアマネージャの顔を見たことはあるが、家族と話している。自分で話ができるのに自分のことを自分で決められていない。
- ・グループホームに入居したら民生委員がまわってこなくなった。おかしい。
- ・自分たちの生の声を聞いてほしい。

私たちは感情面で敏感だから、介護されるなら私たちの気持ちをわかる人にしてほしい。

- ・認知症でも一人暮らしの人の話を聞き、自分も自立・自律しなければならないと思った。
- ・支援や介護されるだけでなく、自分のできることをしたい。報酬が出れば認められたという励みになるのもっと良い。

役所に“もんく”ある。認知症施策をつくるときに自分たちを入れたら変わるのではないか。私たち当事者の声を行政に届ける仕組みが欲しい。

役所の窓口で手続きするのが大変。係の人から「頑張って忘れないで下さい」と言われた。認知症の人に柔軟な対応をしてほしい。自分たちが窓口で働いたらいいかもしれない。

周囲が学んだこと

- ・本人同士で話合うことができ、思いや意見をたくさん持っていることがわかり、話し合いに確信が持てた。
- ・認知症の人は話せないだろうと聴く耳をもたず、話せなくしていたのではないだろうか。
- ・自分自身のなかに認知症の人への偏見があったと気づかされた。

家族や支援者が本人の代弁をすることは、本人の声を奪い、本人を「話せない人」にしてしまっている。本人が自ら話すことをゆっくり待つことが大事だと気付いた。

普段の「つどい」から本人同士の話し合いをもっとしていくことが大事。
認知症の人が自ら話をすることで自信を取り戻している。

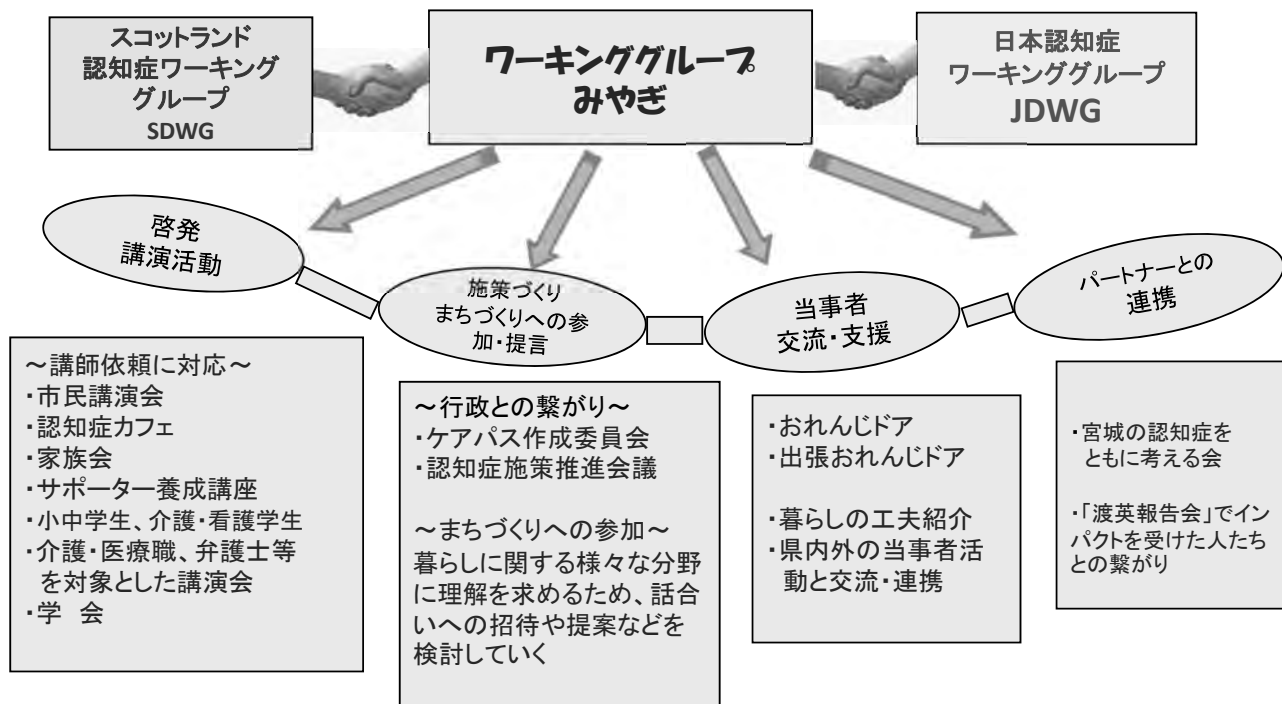
ミーティングのお茶もお仕着せではなく、本人が自分で選ぶことも大事。「本人」が自分で選びたい。決めたいと思っていることも「支援者」が支援のつもりでやってあげ、本人の選択や決定を奪っていた。

- ・一人の声より、多くの人の声が社会を変えていく力になる。
- ・体験を踏まえた当事者の声は周囲や社会を変える大きなインパクトをもっている。

・参加していても、思いや言いたいことをうまく言葉にできず、十分発揮できない人への支援のあり方を考えさせられた。

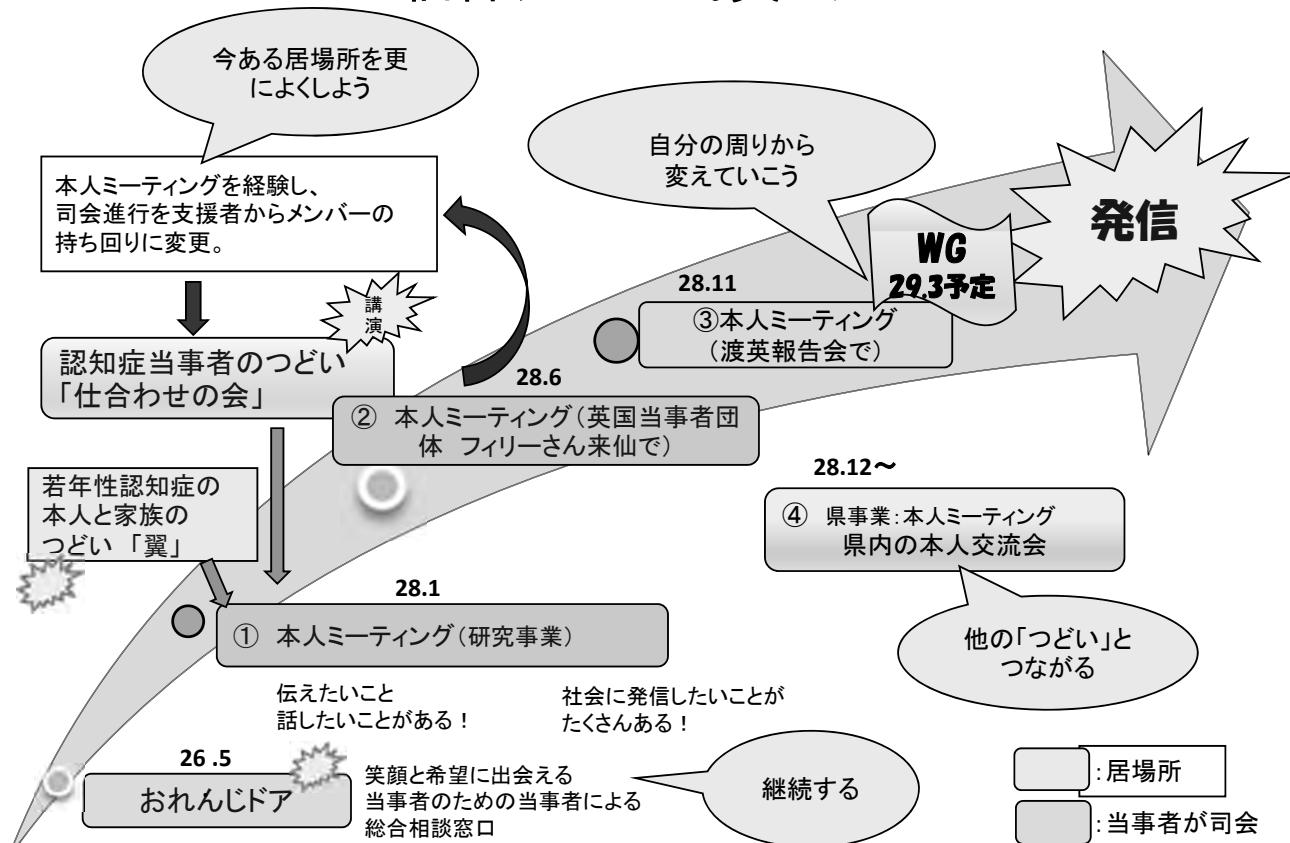
本人ミーティングから発信・活躍

認知症とともによりよく生きる人とパートナーの協働



希望の出会いから社会に発信するWGへ

～仙台チームのあゆみ～



「ワーキンググループみやぎ」への参加よびかけ



「ワーキンググループみやぎ」は現在あるような認知症カフェや居場所ではなく、認知症当事者が自分の困っていることや感じていることなどについて、テーマをもって話合う場です。

話合ったことを地域や社会に発信することで社会を変える一歩になります。

そんな話合いに参加したい当事者、自分の思っていることを知ってもらうことで社会が変わってほしいと思う当事者を求めます。

丹野智文

おわりに

「ワーキンググループみやぎ」

認知症とともに生きる当事者のワーキンググループは、認知症のプロとして、良い社会、よい未来を拓こうとするハードワークを行う場であり、認知症になった当事者が市民としての役割を取り戻す場でもあります。今年3月にスタートします。



【ある日の「おれんじドア」メンバー】

「宮城の認知症をともに考える会」miyaginintishou@gmail.com
facebook「おれんじドアーご本人のためのもの忘れ総合相談窓口」



平成29年2月17日

兵庫県チーム

「若年性認知症とともに歩む」

～本人・家族の声を活かす、兵庫県の取組み～



兵庫県マスコット
はばタン

兵庫県健康福祉部
高齢社会局 高齢対策課
地域包括ケア推進班

【兵庫県の概要】

人口 5,532,372人

※ 市町別

約154万人～約1万1千人

高齢化率: 26.9%

(平成28年2月現在)

※ 市町別: 20.9～38.0%

面積 8,396.47km²

市町数 41市町

(うち、政令市1 中核市3)

地域包括支援センター 202

(直営24 委託178)

県健康福祉事務所数 13

(保健所)



兵庫県の認知症支援体制の推進



ビジョン

「認知症になっても安心して暮らせるまちへ」

【5本柱で推進】

1 認知症予防・早期発見の推進

2 認知症医療体制の充実

3 認知症地域連携体制の強化

4 認知症ケア人材の育成
(認知症支援人材含む)

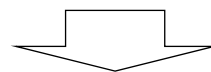
5 若年性認知症施策の推進

当事者の視点の重視

切れ目の
ない支援

分野横断的
な取組

認知症の人が、住み慣れた
地域で尊厳を保ち、安心して
住み続けられる地域



誰もが
暮らしやすいまち

■ 若年性認知症の人の推計

全国推計	3.78万人 18～64歳人口における10万人当たりの 有病率は47.6人（男性57.8人、女性36.7人）
推定発症年齢	平均51.3±9.8歳（男性51.1±9.8歳、女性51.6±9.6歳）

出典：平成21年3月「若年性認知症の実態と対応の基礎整備に関する研究」

兵庫県推計：約1,600人

平成27年度、若年性認知症を含む認知症の身近な相談窓口として、
全市町に「認知症相談センター」を設置

■ 若年性認知症の相談件数

(単位：件)

相談件数：実件数（延べ件数）	H25	H26	H27	H28
【県】若年性認知症生活支援相談センター	60 (87)	87 (124)	105 (262)	
【市町】認知症相談センター	—	—	下半期 — (370)	上半期 101 (354)

【これまでの取組み】若年性認知症施策の推進

	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
若年性認知症自立支援ネットワーク会議		○	○	○	○	○	○	○	○
若年性認知症支援ハンドブック(支援者向け)		○				→改定○	更新○	→	
若年性認知症実態調査	○				○				
啓発フォーラム、市町職員等への研修			○	○	○	◎	◎	◎	◎
市町の若年性認知症支援体制状況調査			○	○	○	○	○※	○※	○※
若年性認知症の会の活動状況調査 ※H26～認知症カフェ含む				○	○	○	○	○	○
若年性認知症当事者支援モデル事業				○					
若年性認知症就労・雇用サポート事業					○				
若年性認知症生活支援相談センター (若年性認知症支援コーディネーターの配置)						◎	◎	◎	◎
支援担当者研修、家族介護者向け研修						◎	◎	◎	◎
家族介護者連絡会、専門相談							◎	◎	◎
本人・家族向け:相談リーフレット								○	→
企業・職場向け:普及啓発リーフレット								○	→
ひょうご当事者グループ推進事業								◎	◎

○※ 支援体制に加え認知症施策全体の進捗状況を把握 ◎兵庫県社会福祉協議会へ委託事業

若年性認知症生活支援相談センター設置までの経緯

(若年性認知症支援コーディネーターの配置前)

	現状・課題 ⇒ 取組み
H20年度	H20年「認知症の医療と生活の質を高める緊急プロジェクト報告書」が国より出されたが、県の担当部署が決まっていなかった ⇒ 庁内会議の開催 ⇒ 実態を把握する必要がある⇒ 実態調査
H21年度	若年性認知症自立支援ネットワーク会議の開催 【課題】若年性認知症に対する理解不足 ⇒ 支援者向けのハンドブックの作成
H22年度	⇒ 啓発フォーラム、市町職員等へ研修 【課題】市町の支援状況把握が必要 ⇒ 支援体制調査
H23年度	【課題】市町:支援の方法が分からない ⇒ 若年性認知症当事者支援モデル事業(認知症の人と家族の会に委託)
H24年度	【課題】市町:生活や就労・雇用面の支援が分からない ⇒ 若年性認知症就労・雇用サポート事業(県社会福祉士会に委託)



⇒ **相談窓口を設置** 「本人・家族支援」と「支援者支援」が必要

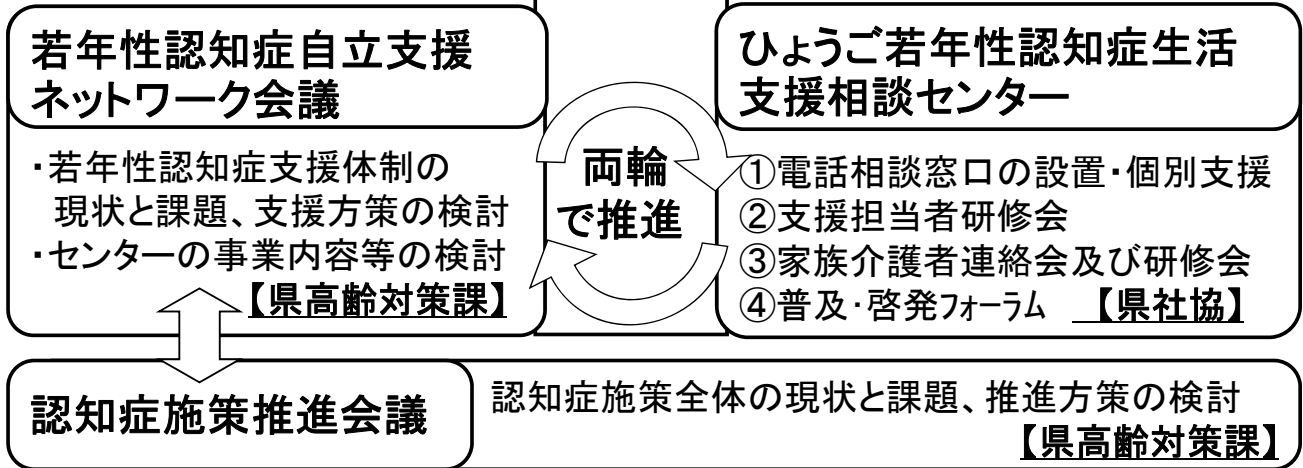
<平成25年度～>

ひょうご若年性認知症生活支援相談センターの設置

<平成29年度までの目標>

全市町で若年性認知症支援体制の構築

- (1)市町・圏域など、より身近な地域で支援体制を構築する
- (2)資源開発や既存サービスの改善の必要性を発信する
- (3)若年性認知症問題を社会化する



■ ひょうご若年性認知症生活支援相談センター (H25年度～)

市町、関係機関等と連携し若年性認知症の相談支援を行うとともに、市町の体制整備を推進(県社会福祉協議会に委託)

県社協の権利擁護センター内に設置

【体制】H25年度: 専門員1名、事務1名

H26年度～: 専門員2名 個別相談～地域支援をするには、2名以上必要

※ H27年度～: 当事者グループ支援で専門員1名

【事業内容】①電話相談窓口の設置・個別支援 → 訪問支援 ⇒ 地域支援

(相談受付時間: 月～金 9:00～16時)

前頭側頭型認知症の家族交流会

②支援担当者研修会(全県+地域別)

③家族介護者向け研修会

※下記連絡会の意見を聞きながら開催

④家族介護者連絡会

・若年性認知症家族介護者連絡会(H26～)

・前頭側頭型認知症の家族交流会(H26～)

⑤啓発フォーラム

⑥弁護士等による専門相談(H26～)

個別の訪問支援を通じて、地域の支援体制の推進

若年性認知症の家族会等が点在

圏域連絡会

※会の活動状況調査 H24: 7市町9か所

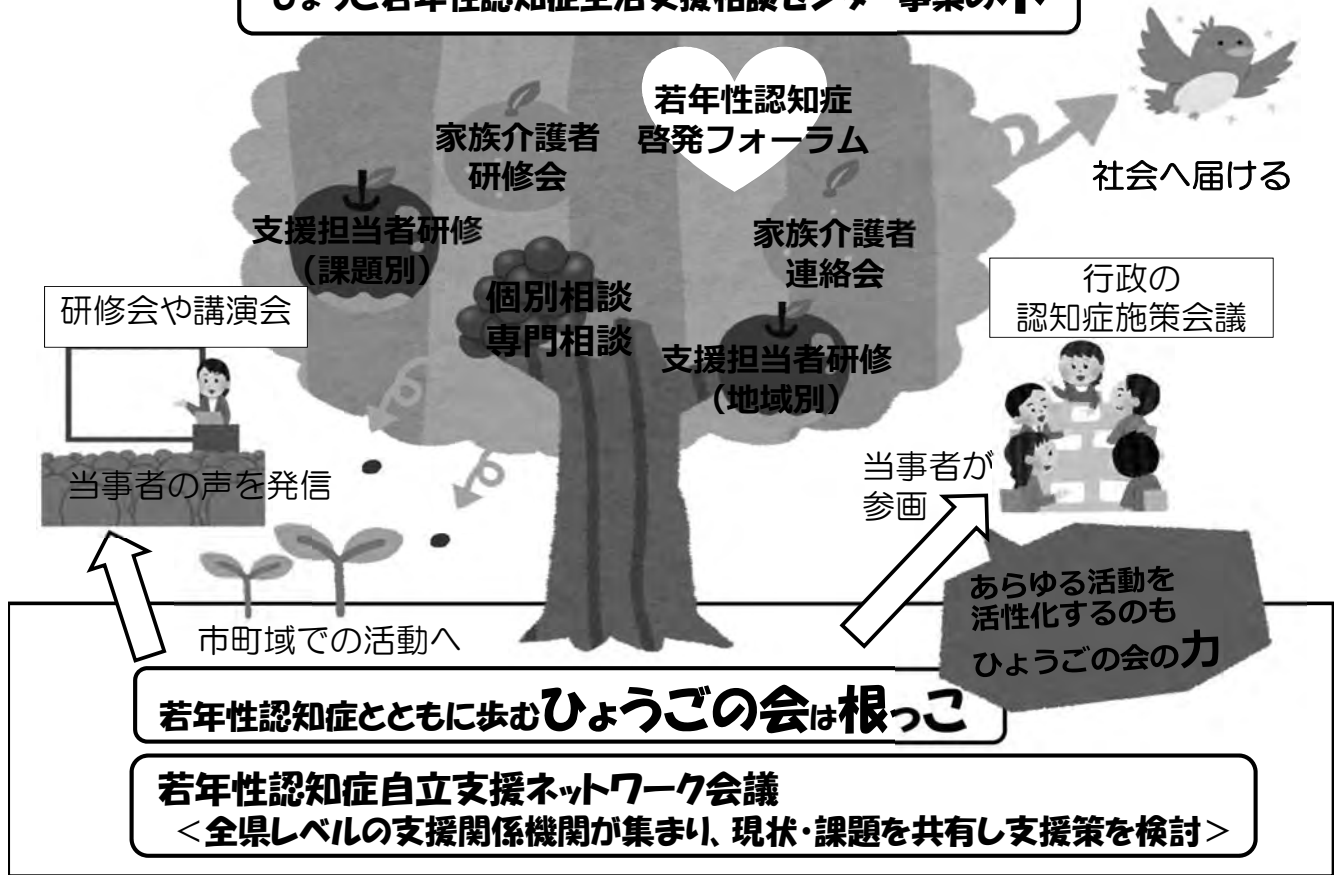
H27
12市町
15か所

当事者の視点の重視

当事者の会の組織化

⇒ H27ひょうご当事者グループ推進事業

ひょうご若年性認知症生活支援相談センター事業の木



センター設置後の県の取組み

	現状・課題 ⇒ 取組み
H 26 年 度	<p>【課題】市町の取組みの差が大きい、推進する仕掛けが必要 ⇒ 若年性認知症支援体制に加え、認知症施策全体の進捗状況を把握し、一覧(見える化)を市町へフィードバック</p> <p>【課題】集う場がわからない⇒家族の会、認知症カフェの一覧作成</p>
H 27 年 度	<p>【課題】退職してからの相談が多い 職場の理解不足⇒企業等・職場向けリーフレット 診断後、相談等つながっていない⇒本人・家族向けリーフレット</p> <p>【課題】地域で相談できる窓口がわからない ⇒市町に若年性認知症を含む認知症の相談窓口の明確化を促進</p>
H 28 年 度	<p>⇒ 認知症相談センターの周知(リーフレット等)と機能強化</p> <p>【課題】社会資源が不足。資源の見える化・資源開発が必要 ⇒若年性認知症を含む認知症ケアネット(国:認知症ケアパス)の全市町での作成を推進 ⇒若年性認知症の就労支援及び居場所の調査を実施</p> <p>【課題】生活の場での理解と支援 ⇒「ひょうご認知症サポート店(事業所等)」の募集</p>



ひょうご認知症サポーターシンボルマーク

【参考】県作成の認知症に関する啓発資材

相談窓口パンフレット(A4:4枚)



- ・認知症相談センターとは
- ・センター一覧

認知症に関する啓発パンフレット (A4:4枚)

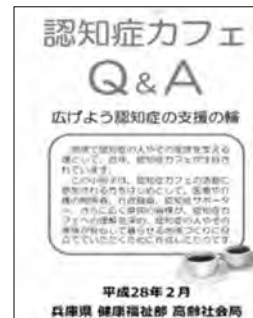


- ・認知症とは
- ・認知症の気づき
- ・認知症に関する相談、支援
- ・見守り・SOSネットワーク
- ・認知症サポーター事務局一覧

認知症チェックシート (A4:A3二つ折り)



認知症カフェ Q&Aリーフレット (A5:A4二つ折り)



【参考】県作成の若年性認知症に関する啓発資材

支援ハンドブック(A4)



企業等・職場向けリーフレット



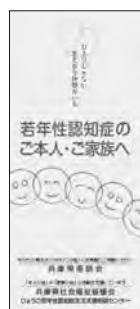
本人・家族向けリーフレット



A5 (A4二つ折り)

【参考】若年性認知症生活支援相談センター作成の啓発資材

センター 社会保険ガイドブック(A4)リーフレット



県下の若年性認知症家族会
 ・交流会・カフェ
 ・サロン一覧
 ※県医師会と連名

当事者の冊子 (A5)



【参考】 <兵庫県の主な認知症施策：28年度>

予防 早期発見	<ul style="list-style-type: none">■ 認知症予防の取組強化 認知症の予防にも一定の効果があるとされる体操の普及など。■ 認知症相談センターの機能強化 認知症初期集中支援チームや医療機関など地域の関係機関との連携強化。
医療体制	<ul style="list-style-type: none">■ 認知症対応医療機関登録制度の普及、医療従事者の研修の拡充 医師研修に加え、新たに、歯科医師、薬剤師、看護職員の研修を実施。
地域連携	<ul style="list-style-type: none">■ 認知症の症状に応じた切れ目のない支援 認知症ケアネット、認知症高齢者等の見守り・SOSネットワークの構築。■ 店舗や金融機関などへの認知症サポーターの配置の促進 店舗や金融機関などに認知症サポーターを配置し、認知症の人の見守りに協力する企業などの取組を支援。
人材育成	<ul style="list-style-type: none">■ 認知症機能訓練研修（4DAS研修）の実施 デイサービス事業所の機能訓練員などを対象とする研修を実施。■ 認知症介護基礎研修の実施
若年性 認知症	<ul style="list-style-type: none">■ 当事者グループの活動支援 「若年性認知症とともに歩むひょうごの会」 ※平成27年12月発足

ご清聴 ありがとうございました

兵庫県ホームページ
「認知症施策の総合的な推進について」



<http://web.pref.hyogo.lg.jp/kf05/nintisyou.html>



様々な施策・事業・人がつながり、
発展し、当事者・家族に届く支援に
なるよう取組みを推進しています。

兵庫県チーム

「若年性認知症とともに歩む」
～本人・家族の声を活かす、若年性認知症生活支援相談センターと
「ひょうごの会」の取組み～

兵庫県社会福祉協議会
ひょうご若年性認知症生活支援相談センター

ひょうご若年性認知症生活支援相談センターとは

- 若年性認知症支援対策の充実を図るため、兵庫県社会福祉協議会が、兵庫県からの委託を受けて、平成25年6月19日に開設。
(全国の自治体で、2番目)
- 誰もが気軽に相談できるセンターを目指すとともに若年性認知症の本人とその家族が身近な地域で支えられる体制づくりの支援を行う。

体 制

- センター長1名ほか
権利擁護センター職員兼務、
相談員3名、
- 専用電話、相談室(共用)



場 所

兵庫県社会福祉協議会
(兵庫県福祉センター内 4階)
神戸市中央区坂口通2-1-1

本人・家族等への相談支援



支援者を育成

当事者支援
家族支援
支援者支援
地域支援

本人・家族交流会への支援

- ・家族介護者連絡会の実施
(家族会、サロン等への支援、
立上げ支援)
- ・当事者グループ会議の実施
- ・前頭側頭型認知症の家族交
流会の実施

社会への啓発

より身近な地域へ
生活の場へ

アウトリーチ
の重視

相談支援

【専用電話】 078-242-0601

【相談受付時間】

月～金曜日9:00～16:00
(年末年始・祝日を除く)

ケアマネジャー・地域包括支援センター
等からの相談も受けています。

家庭や市町、施設等へ出向
いての相談等も行っています。

ご本人、ご家族からの相談は、できる限り
地域の相談機関に繋ぐようにしています。

病気や症状に関すること

- <認知症ではないか>
- ・症状が認知症にあてはまる。
- ・うつなどの精神疾患で治療中…覚せい
剤乱用、くも膜下出血等の既往があるか。
- <診断に関して>
- ・MRIでは異常がないといわれた。
- ・診断への疑問
- <進行への不安>
- ・これからどうなっていくのか不安だ。
- <BPSDへの対応に関して>

医療に関すること

- ・診断をしてくれる病院を紹介して欲しい。
- ・医師が投薬だけで、親身に相談にのってくれ
ない。
- ・内科で受療中。専門医へ転医した方が良い
か？

暮らし・介護・家族関係に関すること

- ・本人や家族の暮らしへの不安
- ・兄を妹が介護。親の介護と重なる。
- ・介護する者が近くにいない、家族関係が希薄
- ・介護と仕事、生活に追われ疲弊

経済的な問題に関すること

- ・障害年金の申請要件は？
- ・経済的に困窮

就労に関すること

- ・仕事をしたい。・就労的な場がないか。
- ・就労継続支援をして欲しい。
- ・仕事を辞めさせた方が良いか。

制度や施設利用、社会資源に関すること

- ・利用できる社会資源や制度を知りたい。
- ・身近な相談窓口はどこか？
- ・デイサービスや施設は、どこも高齢者向き
で、適した所が見つからない、本人が拒否
する。
- ・利用施設を断られた、どこか他にないか？

家族介護者連絡会

～各市町域で開催している家族会・サロンの集まり～
(平成26年7月～)

～連絡会を始めたきっかけは、地域訪問から～
県内で主体的に活動している家族介護者等の知恵や力を寄せあう、お互いに情報交換や交流できる「横のつながり」の場が必要

【家族介護者連絡会】

- ・県福祉センターで、年4回程度実施することに!
- ・参加者は増える一方

家族会で同じ悩みを持つ方と話ができ、前向きな気持ちになれた。未組織の地域にも広がってほしい。

県北部でぽつんと活動しているが、他の地域の取り組みについて聞くことができ、これからの活動に活かせる。



平成26年7月8日初回の様子

『若年性認知症』については、社会だけでなく専門機関の支援者の中でも十分理解されていない。

活動を支えるサポーターが不足している。

家族会・サロン

未組織市町への立上げ支援を行っています

宝塚市 ひよこの会/ふれあい会/サロンほっとくらぶ/サロンほっとくらぶ2

伊丹市 若年認知症の会「ふらっと」

西宮市 わかみや会

川西市 りんどう(RING・DO)の会

尼崎市 若年性認知症ふれあいサロン

・・・県内12市町で実施・・・

神戸市 ・おひさま
・老人保健施設 青い空の郷
・若年認知症サロン
・カフェもぐもぐ

たつの市 きりかぶカフェ

豊岡市 若年性認知症の人と家族のつどい

丹波市 半歩の会

加東市 気ままカフェふらっと

加古川市 元気会 たんぽぽ

高砂市 子いるかの会

・・・県域で実施・・・

若年認知症と向き合う子ども世代のつどい「∞むげん」

前頭側頭型認知症の家族交流会〈県社会福祉協議会〉

意義

・・・本人にとって・・・
・自ら活動し、楽しめる場
・仲間と出会う場
・自身を取戻し、生き方を考える場

・・・専門職・行政職にとって・・・
・本人とその家族の思いを受け止める場
・それを施策やケア技術の向上に活かしていく場

・・・家族にとって・・・
・わかり合える人と出会う場
・介護のヒントやアイデア、サービスや制度の情報交換ができる場

・・・サポーターにとって・・・
・人としてふれあえる場
・一生懸命生きるといふこと、人として大切なことに触れ、学べる場



高砂市:子いるかの会



神戸市:おひさま(地域清掃)



宝塚市:ふれあい会



たつの市:きりかぶカフェ

前頭側頭型認知症の家族交流会

(平成26年11月～)

～センターに寄せられる相談が会を始めるきっかけ～

・家族からは・・・

「こだわり行動の対応に困っている」「デイサービスを利用しようとしたが、病名を言ったら、それだけで断られた」「言葉が出にくいのでコミュニケーションに困っている」

・支援者からも・・・

「デイでどう受け入れたら良いのだろうか」「ホームヘルプサービスを入れたいが、どんなことに注意したり工夫したら良いか」



私のこんな気持ちを理解してもらえ、共感できる場はなかった!

【家族交流会】

・県福祉センターで、隔月に実施することに!
但し、クローズ。

・時々、支援者も入れての研修会も実施

平成27年7月1日から、「前頭側頭葉変性症」のうち「(行動異常型)前頭側頭型認知症(bv-FTD)」「意味性認知症(SD)」が難病医療費助成制度の対象疾病になった



当事者の会の組織化へ
若年性認知症とともに歩むひょうごの会
(平成27年9月～)

～きっかけは、藤田和子さんとの出会い～

平成26年11月30日、啓発フォーラムでの問題提起

- ・発症初期の「空白の期間」の支援が特に重要
(早期発見・早期絶望とならないために)
- ・そのためには、「本人の声をしっかり聴く」こと、
「その意思を尊重した支援のかたちを本人とともに
創りだしていこう！」



- 参加していた診断後間もない当事者のSさんが、藤田さんに「自分もそうした活動をしていきたい」という思いを語る場面があり、このことがきっかけになり、当センターの活動として取組が始まった。
- 介護家族者連絡会に協力依頼し、初期の認知症の人への呼びかけやパートナーとしての役割も担っていただくことになる。
- 平成27年9月～企画会議(全体会・地域会)を経て、12月21日本会議を開催

看護学校卒業後、看護師として9年間勤務。
2007年6月、若年性アルツハイマー病と診断され、退職。
2010年11月、若年性認知症問題にとりくむ会「クローバー」設立。

- ・準備段階から本人と
いっしょに!
- ・それぞれの暮らしの
場にも出向いていこう!

若年性認知症とともに歩むひょうごの会について

目的

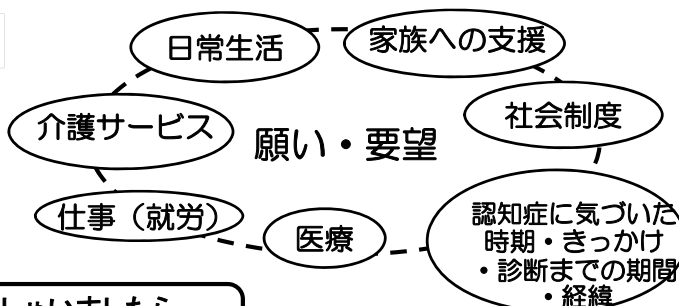
- 1 認知症になっても、希望をもって暮らし続けることができるように、認知症を現に体験している本人だからこそ気づけること、試行錯誤したことを共有しあう。
- 2 とともに歩む仲間とのつながりを築き、ケア・社会のあり方を提案、よりよく生きていける社会を創り出していく。

会議の持ち方

- ・「全体会」と「地域会」で構成
- ・「地域会」は、構成員の暮らしの場に出向いて開催する。

構成員

- ・当事者(本人・パートナー)
- ・学識経験者
- ・ひょうご若年性認知症生活支援相談センター職員等



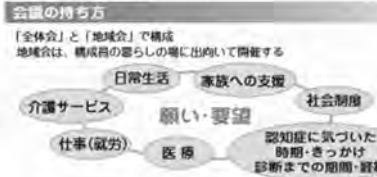
参加を希望されるご本人がいらっしゃいましたら、
当センター(☎ 078-242-0601)にご連絡ください

ひょうごの会の冊子「いまを生きる いまを歩く」



若年性認知症とともに歩む ひょうごの会

目的
 1 認知症になっても、希望をもって暮らし続けることができるよう、認知症を身近に体験している本人だからこそ気づけること、試行錯誤しを共有しよう。
 2 共に歩む仲間とのつながりを築き、ケア・社会のあり方を提案、より生きていける社会を創り出していく。



ひょうごの会はこんな場所
 ● 誰でも意見を述べる、お互いの声にしっかりと耳を傾けます。
 ● 離れたら、いつでも顔を立ち、体験をとりまきます。
 ● 一人ひとりを大切にします。
 ● 無理なく、それぞれがやれることをサポートします。
 ● 当事者主体のグループとして、メンバーの合議による運営とします

構成員
 当事者(若年性認知症のご本人・パートナー) } 30名程度
 学識経験者 }
 ひょうご若年性認知症生活支援相談センター職員等 }

当事者、パートナーとは
 ● 「若年性認知症とともに歩む ひょうごの会」では、若年性認知症のだけでなく、パートナーも含めて、「当事者」としてしています。
 ● パートナーという名称としたのは、一方的な支援関係ではなく、協力関係を大切にしているからです。
 ● パートナーは、友人、サロン等でのサポーターや職員、家族、職場のが関わっています。

若年性認知症とともに歩む ひょうごの会の活動

会議名・開催日・場所・参加者数	内容
準備会 平成27年9月23日(月) 神戸市動物会館 34名	・当事者が集まり活動することの意味やそのサポートについて、関係者で学び、確認し合いました。 ・講師 若年性認知症用件にとりくも合「クローバー」 若葉カワシマ 山田 美由紀氏
第1回 企画会議(全体会) 平成27年9月28日(月) 兵庫県福祉センター 10名 (本人5名、パートナー5名)	・初めて出会う人も多いので、自己紹介をしながら交流しました。 ・どんな会にしたいか、気軽に自由に意見を言い合うためにどうすればよいか、話し合いました。 ・メンバーの生活する地域に向いて働く「地域会」も行うことになりました。
第2回 企画会議(加東地域会) 平成27年11月4日(水) 石牟礼小前校多摩館 (マイハウスのみ) 14名 (本人5名、パートナー9名)	・加東市にお住まいの2人のご家族から、これまでの暮らしや「マイハウス」での活動が紹介されました。交流では、これからのことについて、「前向きに生きていきたい」「認知症は大変やねとが言われるけれど、普通に向らしている。個性として考えたら「つながり」が大変大切なことだ」と話されました。
第3回 企画会議(豊岡地域会) 平成27年11月12日(木) サハビワ 豊岡 8名 (本人2名、パートナー6名)	・豊岡市にお住まいの2人のご家族から、これまでの暮らしや「マイハウス」での活動が紹介されました。交流では、これまでの生活や、地域の活動主体である和歌山の職員さんも交えて昔ながら、若年の人が少ないけれど、縁のつながりを持って出でいこう」といった声で盛り上げられました。
第1回 ひょうご若年性認知症当事者グループ会議(全体会) 平成27年12月21日(月) 兵庫県福祉センター 16名 (本人7名、パートナー9名)	・これまでの企画会議の開催状況を報告し、出席に賛同したことの種類を話し合いました。地域会では、特にメンバーの個性が強く印象に残ったことについて、話し合いました。 ・仕事や地域とのつながり、移動支援、サポート(うれしかったサポート、嬉しいサポート)についても活発に意見交換が行われました。
パートナーふりかえり会議 平成28年1月18日(月) 兵庫県福祉センター 8名	・パートナーとしての思いを話し合いました。 (目標は17名参加)
第2回 若年性認知症とともに歩むひょうごの会(全体会) 平成28年3月1日(水) 兵庫県福祉センター 13名 (本人5名、パートナー8名)	・これまでの会議の進行をまとめた冊子のタイトル・内容について話し合いました。 ・会の名称が「若年性認知症とともに歩むひょうごの会」に決まりました。

ロビーにて
閲覧
いただけます

兵庫県社会福祉協議会ホームページの「ひょうご若年性認知症生活支援相談センター」のページから、ダウンロードいただけます

第1回企画会議(全体会)の様子

自分ひとりではない、同じ仲間と出会えて嬉しかった!

当事者5名とパートナーが呼びかけに応えてくださり、自己紹介の後、交流しながら、会の目的や進め方など共有しあった。



企画会議(地域会)

脳梗塞になっても自分は動ける。しゃべれる。ありがたいなあ。しかし、病気になって世間がそれを許してくれへん。一歩引いてや。地域のつながりが減った。気ままカフェふらっとを通じて、気ままな感じで盛り上げ、みんなで、勇気をだして、偏見のない街になるよう頑張っていきたい。(Fさん/男性/60代)



加東市

同級生の存在が心強い。本当に心強いんです。(Tさん/男性/60代)

温泉に行くのに着替えができないと、夫の同級生に話したところ、「同行するよ」と言ってくれた。マラソン大会でもいっしょに走ってくれた(Tさんパートナー/妻)



豊岡市

地域支援

～事例を通して～

より身近な地域へ
生活の場で

アウトリーチ
の重視

事例1 就労にかかる個別相談から出発して(加東市)

就労の場に出向いての「就労継続」への支援

【相談内容】

- ・介護施設の新規開設に伴い、新規採用された職員(介護職・女性・50歳代)
- ・仕事が覚えられないため、受診を勧めたところ、アルツハイマー型認知症と診断
- ・雇用不安をもった上司から、地域包括支援センター経由で当センターに相談

【支援内容】

- ・夫と本人に意思確認、職員とのミーティング
- ・どのようにサポートしたら良いか等継続雇用の検討

【結果】

障害者雇用枠で就労継続 勤務時間の延長



若年性認知症カフェの開催へ

- ・当事者とサポーターが、企画の段階から相談(当事者主体)
当事者:「来る人をどうして喜ばせるかな」
- ・市担当者も参加し、バックアップ



カフェの様子

事例2 「地域づくりのきっかけづくり」支援 (三木市社会福祉協議会の取組へ支援)

【三木市社会福祉協議会の問題意識】

- ・ケアマネジャーから市社協に、若年性認知症の妻を介護しているT氏についての相談が入ったのがきっかけ。「サービスでは限界がある」「住民の力で何とかしていくしかない」「若年性認知症の方で同じ悩みを抱えている人が他にもいる」
- ・T氏の住む三木市緑ヶ丘地区は、40年前に開発された住宅地区で高齢化率38%と高く、介護への不安や関心が高まっている。
- ・近隣での助け合い、ご近所の力を若年性認知症というテーマで結び直していくことを軸において講座を開催したい。
- ・ご近所同士の支え合い活動のモデル(市内10地区)になるよう進めていきたい

【支援内容】

地区に出向いて、「若年性認知症の理解と地域支援を考える基礎講座」を開く
市社協と問題意識を共有した上で、「介護家族者連絡会」の構成員の協力を
得て、4回連続講座を「地区の公民館」で実施

～地区での話し合いが進む～
・鉄は熱いうちに、組織づくりにもっていこう

ご近所の中で
気になる方を
気にかけていけるよ
うな支え合いの
「地域づくり」
を目指して・・・



「認知症地域支え合いグループみどりほっとクラブ」誕生

<活動の柱>

- ・居場所づくり
認知症サロン「ぐりーんカフェ」の開催
- ・見守りの仕組みづくり
外出時の付き添い支援
- ・正しい理解を広げる活動
「介護マーク」普及を市に要望
認知症サポーター養成講座の開催
当センター共催で映画「妻の病」の上映

- ★ 代表は、「当事者性の重視」から、
若年性認知症の妻を介護する夫T氏に
決定

若年性認知症の
介護家族は、
地域づくりの牽引力!



ぐりーんカフェでは認知症の人もほっとする時間を
過ごす

若年性認知症への取組について ～お願い～

若年性認知症のご本人、ご家族からの相談は、
少ないかもしれません。
しかし、認知症早期介入支援が最も必要な方々です。
機会があったら、しっかり受け止めてください。
「何かできるはず」「何かできるかも」と可能性を探しましょう。
「他職種協働」で、知恵を出し合いましょう。
その仲間に、当センターも入れてください。

介護予防事業のなじみの集まりを、
本人同士が語り合い、声を活かす場に
無理なく 楽しく 息長く

明日 (tomorrow) もっと にっこり

平成29年2月17日(金)
香川県綾川町 志度谷 利幸
志度谷 久美
川崎 孝至
増田 玲子

私たちは四国の香川県にある綾川町
からやってきました



ブラタモリ#59
「さぬきうどん」
で紹介された
まちです。



本日残念ながら欠席
本当は来たかった
健康福祉課 塩田課長

認知症になっても だいじょうぶなまちづくりのために 取り組んできたこと

綾川町の現状（H28年12月末）

- ・人口 24,586人
- ・面積 109.75km²
- ・65歳以上人口 8,187人
- ・高齢化率 33.3%
- ・認知症自立度Ⅱ以上 1218人(認定調査より)
- ・認知症サポート医 1名
- ・物忘れ外来 2ヶ所
- ・グループホーム 2ヶ所(36床)
- ・小規模多機能 1ヶ所・特養 2ヶ所・老健 1ヶ所
- ・認知症地域支援推進員 4名



住み慣れた綾川町でいきいきと自分らしく 暮らし続けるためには地域での支えあいが必要です。

介護予防サポーターになって 地域包括ケアの **輪・話・和** を広げましょう

お互いに元気をもらいあう

自助
共助
公助
互助

介護予防サポーター

綾川町介護予防サポーターとは

町が実施する研修(まなびあい講座)を終了した上で、町民からの要請を受けて、介護予防の啓発や知識の普及に対する協力、ひとり暮らし高齢者への声かけ・見守り、認知症高齢者の見守りや家族への声かけ・見守り等を行います。お年寄りの暮らしのサポートを行います。

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
要介護1～5:介護サービス(デイサービス・デイケア・訪問介護・訪問看護・訪問入浴・福祉用具レンタル・住宅改修・ショートステイなど)												
要支援1～2:介護予防サービス(デイサービス・デイケア・訪問介護・訪問看護・訪問入浴・福祉用具レンタル・住宅改修・ショートステイなど)												
二次予防対象者の方には転倒予防教室などを実施します 健康のこのご相談なら 一般健康相談:月1回 心の具合や飲み込みの相談なら お口の健康相談:毎月1から2回...要予約 物忘れや気分の落ち込みのことなら 心の健康相談:月1回...要予約												
高齢者で悩みの いっしょに 広場			高齢者生活の 課題マップ 活動			認知症の お話し ホフテイア			転倒予防 教室			
綾川町介護予防サポーター養成講座 まなびあい講座			開講式 介護予防		食事と栄養 健康生活		高齢者の 心とからだ		介護 予防体操		施設見学	
認知症の 方への かわり			高齢者の 方への 接し方		楽しい レクリエーション 開講式							

まなびあい講座を受けて介護予防サポーターに

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

11月

12月

1月

2月

3月

要介護状態

三次予防

要支援状態

二次予防

要介護・要支援状態になる恐れのある状態

一次予防

生活機能の低下がない状態

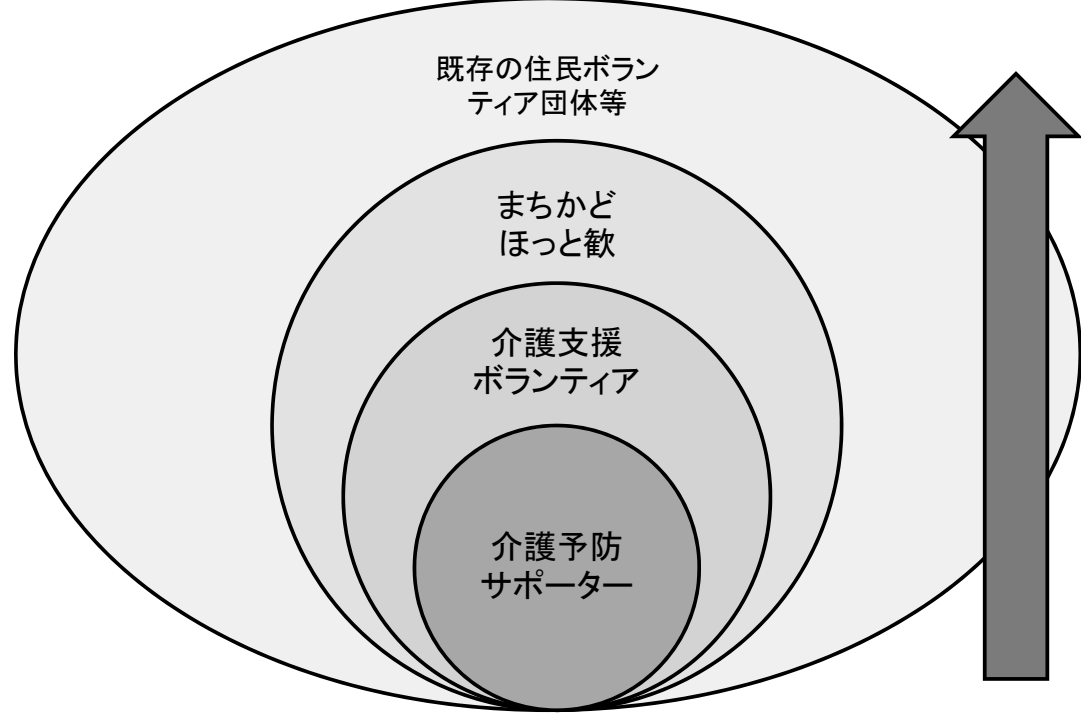
高齢者の状態に応じた地域のネットワークによる支援

**地域力
住民力**

地域のなじみが
つながり続けるまちに

お問合せ先 綾川町内 地域包括支援センター
0337-576-11002(直通)

介護予防(認知症)サポーターを核とする 住民力・地域力の充実に向けた流れ





高齢者声かけ・見守りまちかどほっと歓事業

ほっと歓でー

利用者



65歳以上の一人暮らし 65歳以上のみの世帯 町長が認める者

担い手



協力員(登録制)

民生委員

担当ケアマネ・社協地区担当
包括職員など

担い手



協力団体
(老人クラブ連合会・婦人会・
自治会・JA女性部・介護予防
サポーターの会等)

協力事業所
(介護保険関係事業所・
郵便局・銀行・商店等)

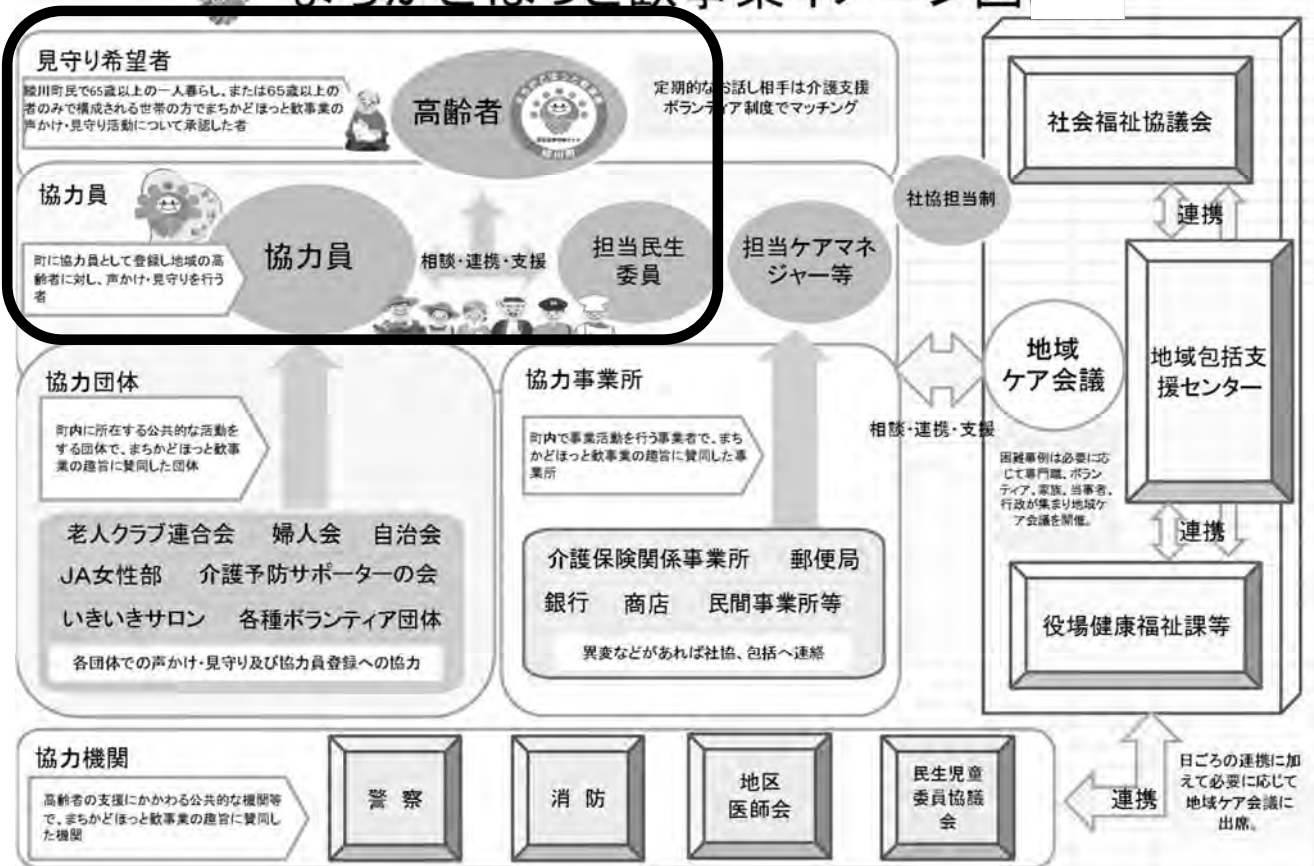
協力機関
(消防・警察・地区医師会・民生
児童委員協議会等)

暮らしの近くで

地域全体で

問い合わせ先 社会福祉協議会(876-4221) 地域包括支援センター(876-1002) 役場健康福祉課(876-1113)
○声かけ・見守りのなかでお気づきのことがありましたら、上記までご連絡ください。秘密は厳守します。

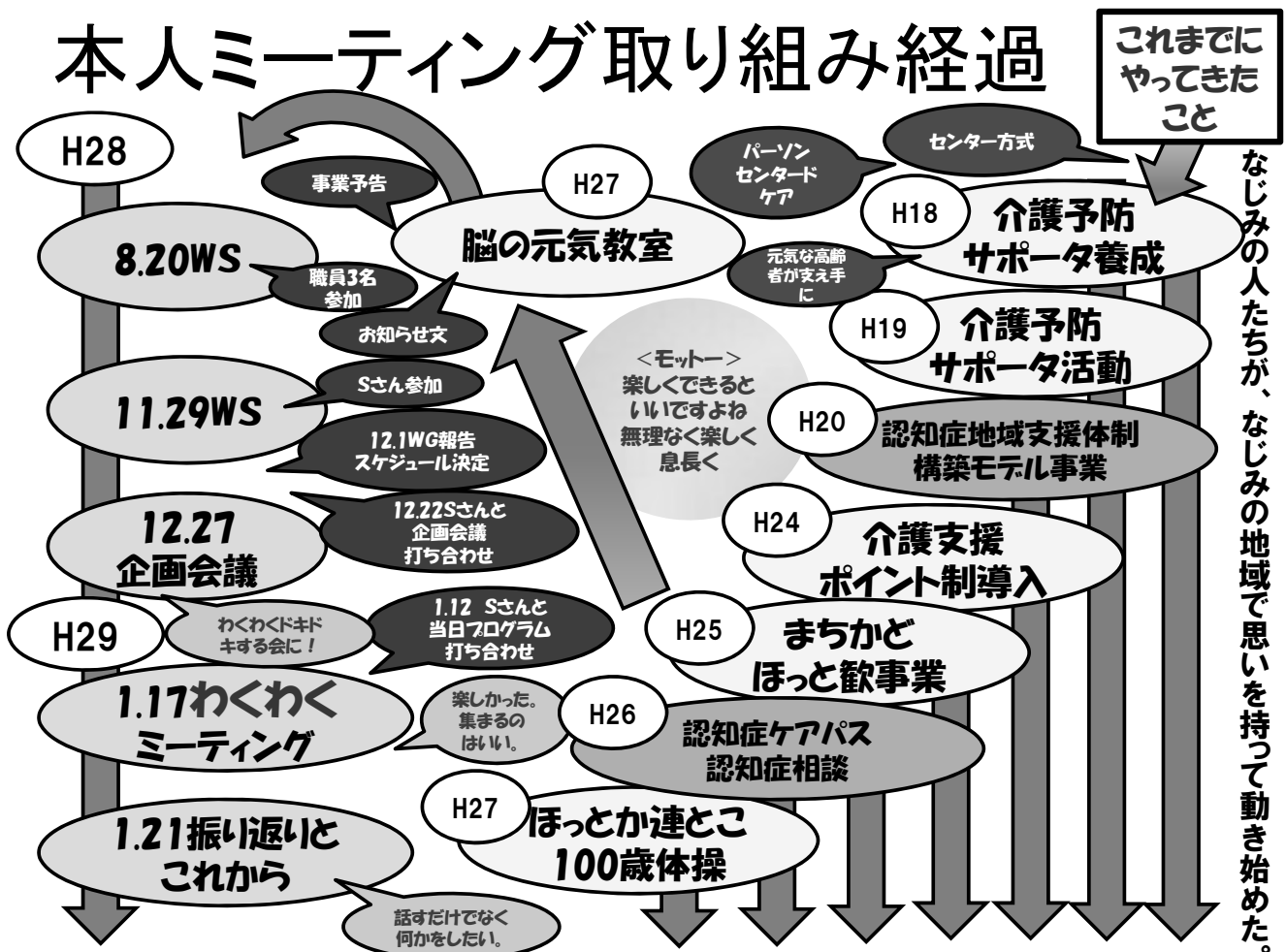
まちかどほっと歓事業イメージ図



綾川町認知症地域支援体制作り経過

- 平成18年6月介護予防サポーター養成まなびあい講座開始
- 平成19年4月介護予防サポーター活動開始
- 平成20年8月いっぴく広場開始（月1回）
- 9月認知症地域支援体制構築等推進モデル事業
- 11月綾川まちかど劇団活動開始
- 平成21年4月包括職員全員キャラバンメイトに
- 5月認知症サポーター養成開始
- 9月ききじょうず勉強会・お話ボランティア個別訪問
- 平成23年7月介護予防サポーターの会発足
- 平成24年6月介護支援ボランティア制度開始
- 平成25年9月高齢者声かけ・見守り「まちかどほっと歓」事業開始
- 平成26年6月綾歌地区医師会との認知症医療連携の協議
- 平成27年認知症ケアパス全戸配布、脳の元気教室開始
- 10月ほっとか連とこ100歳体操開始

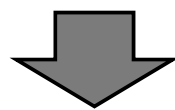
本人ミーティング取り組み経過



本人ミーティングのあり方を 模索しているところに

Sさんが包括にやってきた。

- 近所のMさんに「包括に行きまい。」といわれて来た。
- 3年間、ご夫妻で病気に向き合ってきた。
- 包括に来て、「目の前が開けた気がした」と。
- これからはどんどん出かけていきます。



- 出合いの持つ力を実感。もっと出合いを。

Sさんが暮らす地域はこんな地域

- Sさんと包括をつないだMさんと民生委員さん

H20年から介護予防サポーターとして活躍。ほっと歓事業ではF民生委員と協力して団地独自に見守りマッチングを実現



F民生委員さん

Mさん

すぐそばでその人を知っている人としてスマートに見守りたい。

認知症のことで悩んでいるのなら、いっぺん包括に行ってみよう。

ほっとか連とこ100歳体操やいきいきサロン夢サロンも活発

300軒中47名の見守り協力員がいる。



毎朝のラジオ体操



団地内のサポーターの集まり

東京のワークショップまでに 取り組んだこと

- 10月19日：家族の会の研修会に参加
S夫妻、Mさん、包括
- 11月22日：高松市で開かれた
地域フォーラムに参加

そこに来ていた富士宮市の佐野光孝さんご夫妻との出会い



いつでも夢をというバトンをもらいました。



11.29東京の ワークショップに参加

11.29ワークショップで 丹野さんに出会った！！

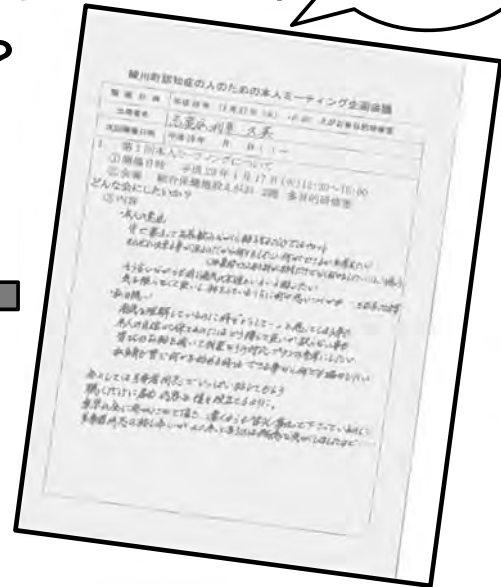


綾川町ならではの
本人ミーティングに
向けて始動

12.27企画会議(10:00~11:50)

- 参加者: 当事者1名、家族1名、サポーター7名、職員5名 計14名
- 準備物: 記録用紙、Sさん夫妻の企画案
- 内容: どんな会にしたいか?

事前にSさん夫妻と打ち合わせ。夫妻で作成してきた企画案



みんなで集まってお茶飲みながら話をするだけではちょっと...

企画会議 主な内容

本人: 何かできることがあるのだから、何かをしたい。何かできるのかを**考えたい**。同じ病気の方たちといろいろ話したい。

妻: 本人の自信が保てるにはどう接してよいか? みんなで何かを始めるときにはできることなら何でも協力したい。内容をのちのち役立てるように...

サポーター: いつも**ワクワクドキドキ**を求めている。ワクワクを語ってもらえるような会になると面白いかなと思う。

ねぎは私に任して

サポーター: この会が気が楽になる、いいヒントをもらえる会になればいい。そのためには話し合いばかりでは煮詰まるかもしれないので何かをしながらできるといいですね。

クッキーは?

友達からキャベツもらってくるわー

ケーキ作りは?

本人: 料理でもいいですよー。親戚が**お好み焼き**やさんで小学生のときにアルバイトしたことがある。**ふわふわのお好み焼き**。あれはキャベツ次第。細かく切らないといけない。山芋は入れないかん。鰹節、紅生姜...

妻: 認知症にやさしい町は、みんなにやさしい町は名言。わいわい言いながらそんな話につながっていけばいい。

まずは出会うことから

わくわくミーティング開催に向けて —お好み焼きを焼こう—

脳の元気教室

認知症疾患
医療センター
への呼びかけ

ケアマネ
連絡会

おいでおいで 本人同士で語りあおう。
わくわくミーティング
参加費無料
1月17日(火)
13:30
えがお2階
お問い合わせ: 2017/01/17 14:59

総合相談

認知症相談

わくわくミーティング当日



1.17わくわくミーティング参加状況

★32名参加: 当事者9名、家族4名、パートナー7名、ケアマネ2名、職員10名

番号	男女	年齢	診断名	診断時期	介護認定	備考	経路	家族参加
1	男	67	若年性アルツハイマー	H25.7	未	東京WS参加	来所(ご近所のサポーターから紹介)	妻
2	男	68	前頭側頭型認知症	H26ごろ	介3	進行加速	来所→元気教室	妻
3	女	68	アルツハイマー型認知症	H25. 1	介2	夫が家族会を立ち上げ中(1. 27開催)	包括ケアマネ	夫
4	男	78	アルツハイマー型認知症	H26.5	未	初めて、えがおにきた。この日が初対面	認知症疾患医療センター	妻
5	男	70	アルツハイマー型認知症	H.23	支1	妻が来れないので欠席予定だったが、娘さんが送迎してくれたので参加できた。	包括ケアマネ	
6	女	81	物忘れの自覚	未	未	いつも前向き。自分で来られた。	自分から	
7	男	81	物忘れの自覚	H25ごろ	未	自分で来られた。	認知症相談	
8	女	78	高血圧症、周りのサポーターが気づいた	H.28.10	未	電話をかけると、思い出して参加した。	元サポーター	
9	男	81	アルツハイマー型認知症	H25ごろ	未	参加していたが、家のことが気になり、途中で帰った。	認知症相談	
10	女	81	物忘れの自覚	未	未	自分で来られた。	サポーター	

元気教室でなじみのサポーターがパートナーに



自然に会話が弾む



毎回、歌やゲームを一緒にしてくれるMさん



★なじみのサポーターさんがパートナーになり、パートナー、職員はできるだけ本人を見守り、寄り添いを。言葉が出ない人は声かけや代弁を。



“なじみ”の職員



ふだんの元気教室の様子

わくわくミーティングプログラム

わくわくミーティング
とき：1月17日（火）13:30～15:30
ところ：えがお調理室、多目的研修室

1. 開会 13:30～13:45
あいさつ
自己紹介
2. お好み焼きを焼こう！ 13:45～14:30
たね作り
焼き
配膳
会食
3. わくわくミーティング 14:30～15:20
—だれもが楽しくよりよく暮らしていくために—
—まずは何でも語ろう—
 - ・グループ1：ご本人、サポーターさん
 - ・グループ2：ご本人、サポーターさん
 - ・グループ3：ご家族
4. まとめとこれから 15:20～15:30
5. 閉会 15:30

- 1月12日：Sさんと内容について事前に打ち合わせ
- 材料の調達について確認
- 当日もプログラムをホワイトボードに見やすく掲示

お好み焼きを焼こう！①



今日、はじめて出会った？お好み焼き大将と監督？の攻防も楽しく。



お好み焼きを焼こう！②

マヨネーズ、まあく
できたなあ……



課長、お上手
ですね。

ふわふわのお好み焼き
の出来上がり。



わくわくミーティングの様子①

ホワイトボード

本人グループ1



本人グループ2



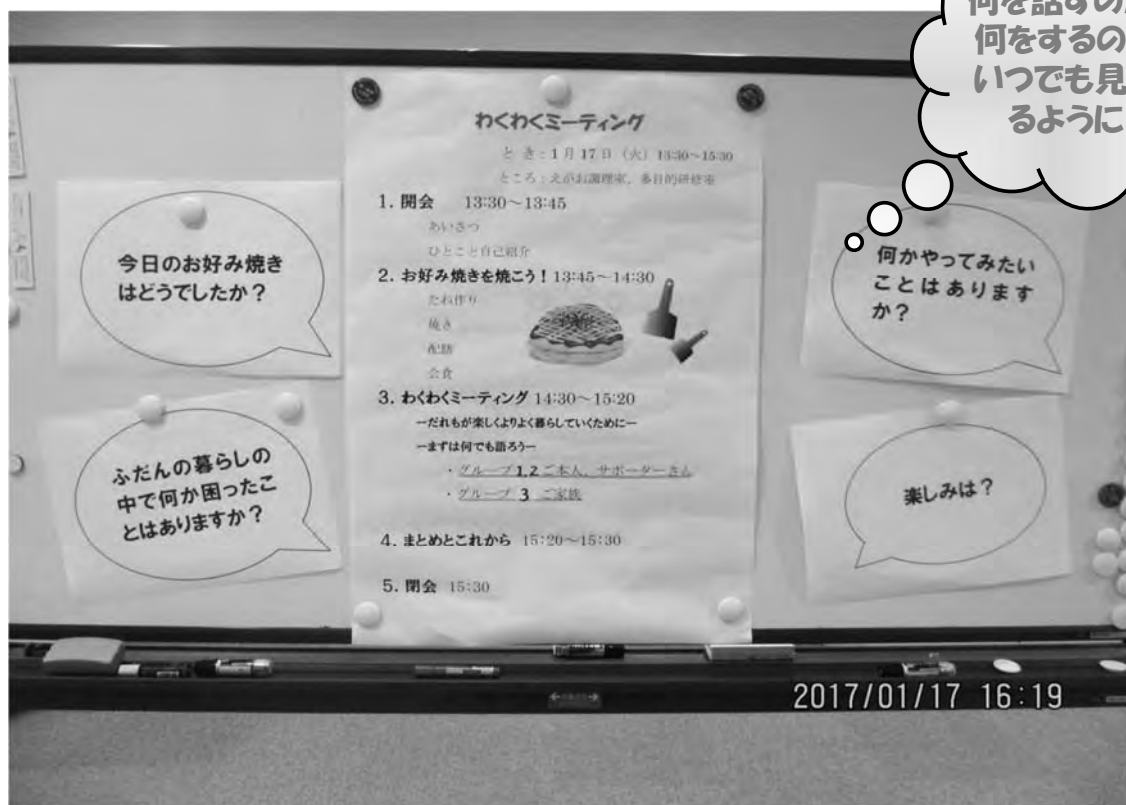
家族グループ3

いつもの事務職
を離れて今日は
カメラマン。
皆さんの笑顔が
撮れて満足。



入口

わくわくミーティングの様子②



ヒントがいっぱい わくわくミーティング本人の声①

(認知症は)最近友達みたいに、くるぞ、くるぞと、それがわかるようになった。そしたら全然違ってきましたね。最初は不安で、頭がおかしになりそうだった、まあちっとはおかしになっているだけ。慣れやと思うんですよ。思い切ってなれたら、自分はお前は認知症だと。慣れたらだいぶ違ってくるんですね。

(物忘れ自体は)そんなに困ったことはないんですが、だんだん自分でわかってきた。何がいかんてストレスがいかん。私の場合。

(認知症になって)今までもっともっと不安だったんですよ、仕事もしよるし、仕事の付き合いでも、どここの社長とか、これがまた意地が悪い。そういう人は、するどいからわかるじゃないですか。それも最初堪えた。開き直るしかない、

(集まることについて)今日みたいに集まってくれたら安心する。やっぱりふつうにね、気を使わなくていい。他の人やったら、気の鋭い人はすぐ察する。その人たちが、俺は隠さんけど、大したことではないんやけどね。一言言われたら気になることもある。ちょっと離れたところでね、おかしいんちゃうと言われた。そういうのは聞こえる。それは堪える

(集まることについて)みんなと一緒にいるのは楽しい。

わくわくミーティング本人の声②

(この会がどんな会になればいい?) 今日みたいだったらええんちゃう。みんなでお話できた。あまり取り繕わなくていいからね。

ケアマネさん: また介護保険のサービスとは違って気兼ねなくお話できるのは大切だなと思いますし、こういう機会が続けて持てるといいなあと思いました

(免許証について)

- ・去年3月に免許証返した。不便な。事故したら皆に迷惑かけるから。
- ・私はあと1ヶ月で切れる。
- ・足だけが頼りになってきたから、足を鍛えておかないといけないと思う。歩くようにしている。日記を書いて来年の参考にとと思うので。晩に日記書いていたら朝していた事を忘れていたので思い出しながら書いている。

物忘れを治す薬がほしい。楽しみはカラオケ。週1回行っている。昭和のカラオケクラブは40年前に私が作ったんです。

(これからもこんな会で集まりたいですか?)

- ・ええやろ、やっぱり
- ・僕はかまわんよ
- ・うれしかった。みんな会うことないのに。来て良かった。

まだまだ まだまだ
ご紹介できない声たち
がたくさん。

見えてきたこと



早期診断
早期対応

認知症になっても楽しく豊かに安心して暮らすために

日常の暮らしでの発見と気づき

相談から診断

サービス利用 (介護保険のサービスと地域のいろいろなサービスを利用しよう)

あれっ

地域で

医療で

介護で

福祉で

認知症かな?と思ったら

地域包括支援センターに
早めに相談しましょう

なごみの地域

日ごろから
人との交流
を大切に

まずは
受診、診断

かかりつけ医

認知症サポート医
認知症外来
常設外来

精神科
専門病院

確定診断

なごみの地域

介護認定

サービス
担当者会議

一人ひとりの
暮らしを大切に

ケア
マネジャー

認知症集中支援チーム (地域ケア会議)

地域包括支援センターが開催

からだ・心・暮らし方・環境等の状況を把握しながら、
よりよい対応についてみんなで話し合います。

認知症サポート医、ケアマネ、医師、地域包括支援センター職員、
認知症専門医、認知症専門看護師、認知症専門薬剤師、
認知症専門介護士、認知症専門福祉士、認知症専門作業療法士、
認知症専門理学療法士、認知症専門言語聴覚士、認知症専門栄養士、
認知症専門歯科医師、認知症専門歯科技工士、認知症専門歯科衛生士、
認知症専門歯科医師、認知症専門歯科技工士、認知症専門歯科衛生士

「認知症」は「認知症」サポート医、ケアマネ、医師、地域包括支援センター職員、
認知症専門医、認知症専門看護師、認知症専門薬剤師、
認知症専門介護士、認知症専門福祉士、認知症専門作業療法士、
認知症専門理学療法士、認知症専門言語聴覚士、認知症専門栄養士、
認知症専門歯科医師、認知症専門歯科技工士、認知症専門歯科衛生士

うつ病など認知症とよく似た症状の病気もある
ので正しい診断が重要です。

主な認知症のタイプ

・アルツハイマー型認知症

・レビー小体型認知症

・前頭側頭型認知症 (ピック病)

・血管性認知症

・その他

介護保険の在宅サービス

定期的な通院、訪問診療など

ヘルパー

デイサービス

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

訪問歯科診療

訪問看護

訪問介護

訪問診療

認知症は病ではありません。今は誰もが認知症になるか接することになる社会です。

認知症は高齢者に最も多い病気の一つです。85歳の約半数、95歳の8割は認知症と推定されています。また、若年認知症の方もたくさんおられ、その対応やケア等、課題となっています。

認知症は脳の障害によって認知機能が低下し、社会生活に支障をきたすようになった状態を言います。

認知症は適切な治療やケアによって進行を抑えたり、症状を軽減させます。

認知症の人と接するときの10のヒント

1. 一人の人としてあつこうに接する

2. 自尊心を傷つけない

3. 笑顔で優しく

4. 話題に入っていく

5. 異議を唱えている姿勢を示す

6. ゆっくりとつづつ話す

7. なじみのある言葉を使う

8. 本人が好きなことやなじみのあることを話題にする

9. 不安や不快感を感じていないか、注意を払う

10. 本人に必ず聞く、たずねる、確かめる

認知症

でも

大丈夫

ま

ち

行

き

その人の人生の集大成の時期、一人ひとりのストーリーと

なごみを大切にしながら、本人・家族・地域と専門職がともに

生きて生きる:生活はケアパスの中でも、とても大切なポイントだ。

安心して暮らせたり、

愛犬むさしと

家族と

団地内での男の料理教室

楽しく過ごせたり、

普通に普段の日常がある。

2016/11/29 16:43

184

1.21 第1回 本人の声を活かそう会



私たち(本人・家族・サポーター・職員)のまなび 出会いがあり、場があり、みんなが主体となつてこそ

- それぞれの生きる姿との出会いそのものがお互いの力になる。
- 話をする場があつて初めて理解が深まる。気持ちがすっきりする。みんなに早く出てきて欲しい。
- まずはやってみると次が見える。
- すぐそばの人がパートナーになれる地域はやさしい。
- 住民力の育成はとても有効であると実感できた。介護予防サポーターが自然にパートナーになれた。
- 豊かな生活実態こそが求められる。できることを探しながら、つながっていく。
- ネットワークは、当事者、家族、ご近所さん、友人などがそれぞれ主体となり、一緒に手をつなぎあう形になつてこそ、出来上がっていくものではないか。

地域包括として、
すぐにでもSさんと一緒に取り組みそうなこと

- 「ほっと歓伝え隊」の活動。当事者の思いを伝える活動を展開していく。
- 疾患医療センターやサポート医のところに「わたしのまちの情報パック」(仮称)をおく。中身をミーティングで考える。場を知らせていく。
- ミーティングで出た声を活かすためには何ができるのかを考える。資源マップに入れる。
- 元気教室の延長線上を生かして、集まりが継続する方法を考える。
- それぞれのさまざまな役割を持ち、心の拠り所を持つことは大切な場であり、そういう場作りをいっしょに考えていく。

認知症の人にやさしいまちは
みんなにやさしいまち、
そんな町をめざして

これからもずっと



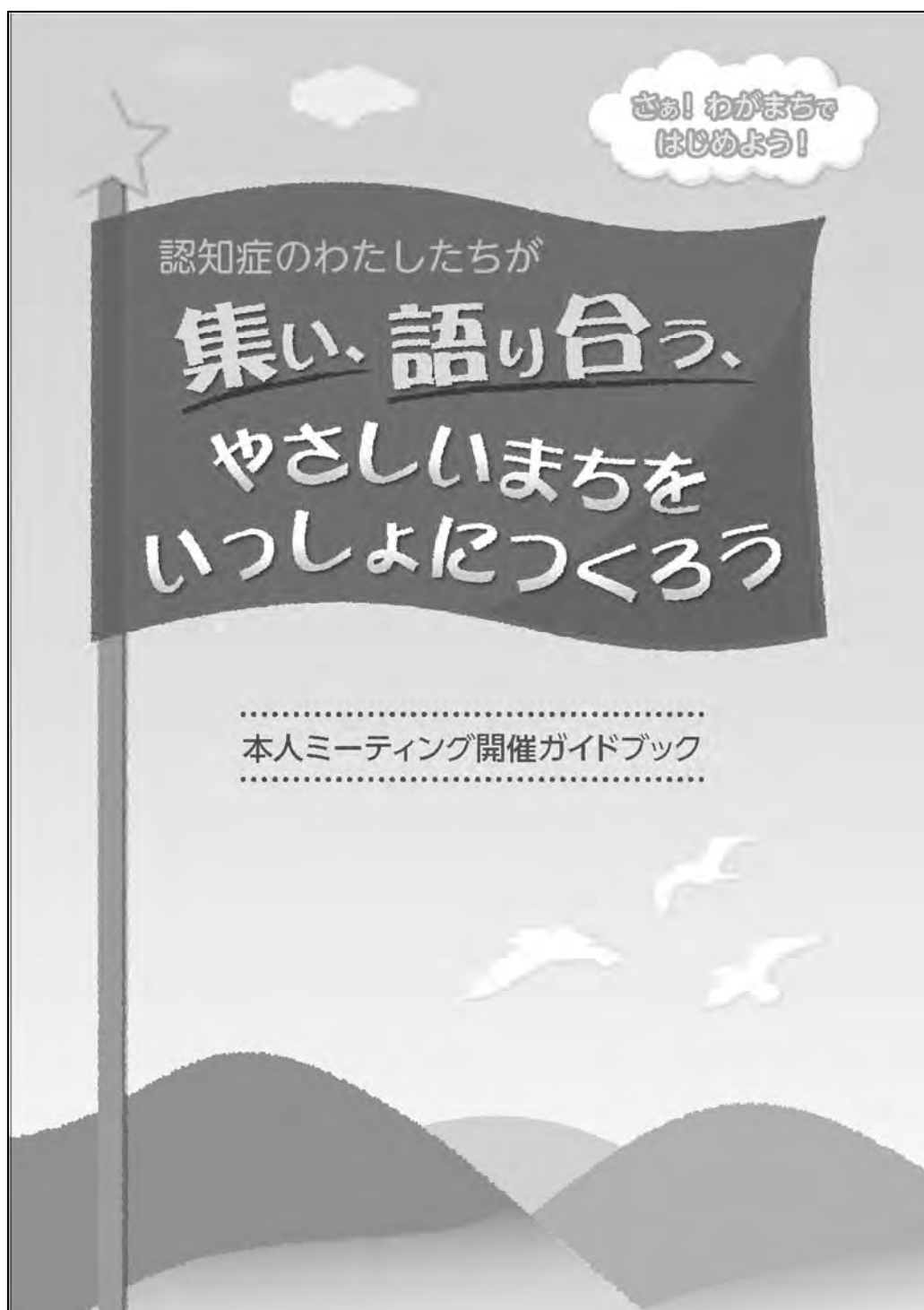
♥ 支えあい伝えあいの輪・話・和
ともに手をつなぎあうネットワークへ



滝宮天満宮飛び梅

6. ガイド（本人ミーティング開催ガイドブック）

※全都道府県・全市町村へ配布（一部を掲載）



★手引きパート

1 本人ミーティングを知る

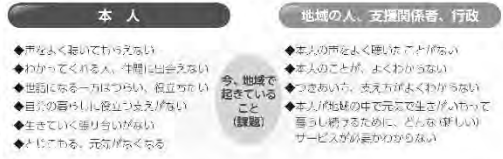


★本人ミーティングとは

認知症の本人が無い、本人同士が主になって、自らの体験や希望、必要としていることを語り合い、自分たちのこれからの方より暮らし、暮らしやすい地域のあり方を一緒に話し合う場です。

「楽しくて楽しい！」に加えて、本人だからこそその気づきや意見を本人同士で語り合い、それらを地域に伝えていくための集まりです。

★なぜ、本人ミーティングが必要？



- 本人が仲間と出会い、思いを率直に語れる場／聴く場が、地域にあったらお互いが、楽に、元気になる。
- 本人が声を出し、それいっしょにいかしていくと、本物のやさしいまちをスムーズにつくれる。

地域の現状を、みんなで一緒に、よりよく変えていこうとして始まったのが、本人ミーティングです。

★本人ミーティングのねらい

●本人ミーティングは、認知症の人の視点を重視したやさしい地域づくりを具体的に進めていくための方法です。



参考

認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）【抜粋】

- ▶認知症の人が住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けるために必要と感じていることについて実態調査を行う。
- ▶認知症の人同士の繋がりを築いて、カフェを超えた地域の中での更なる活動へと繋げていけるような認知症の人の生きがいづくりを支援する取組を推進する。
- ▶認知症の人やその家族の抱える、本職だけでなく、地方自治体レベルで認知症施策を企画・立案し、また、これを評価するに当たっても考慮されるべきが望ましい。認知症の人やその家族の抱える認知症施策の企画・立案を評価に反映させるための好事例の収集や方法論の研究を進め、これを発信することで全国的取組を推進していく。

ニッポン一億総活躍プラン【抜粋】

- ▶認知症の人が集まる場や認知症カフェなど、認知症の人やその家族が集まる取組を2020年度までに全市町村に普及させ、こうした活動の質を市町村の地域包括支援センターから住民に提供する。

★本人ミーティングのあらまし

実施主体・開催場所・開催時間
特に決まりはありません。地域の関係者がねらいを共有しながら、地域の特性に応じて企画し、自由に開催できます。

ミーティングの参加者
●認知症の人たちが中心です。年齢や年齢に特に規定はありません。企画次第です。
●話し合いの進行役や本人のリポート役は、必要に応じて両方します。
●進行役、リポーター役以外に誰が参加するは、これも企画次第。
話しを聴くために行政や地域の関係者が参加する場合は、オブザーバーとしての参加です。

★本人ミーティングの7つのポイント

- ここを押さえるとうまく進みます！
本人ミーティングに取組んでいる地域の人たちからのアドバイスです。
- ①一連のプロセスを大切に楽しみながら
●本人ミーティングは【企画→開催→活かす】プロセスが大切です。
●力まずに、自分も関係者も「楽しく」、を合言葉に！
- ②企画段階から本人が参画
●何をどうしたらいいか、本人に聞いてみるのが一番です。
- ③必要性とねらいを常に確認・共有
●「なぜ、必要か」何のためにやるのか、これが関係者の力を結集するために不可欠です。
- ④地域にあるものを活かしてつなげる
●ゼロからのスタートではなく、本人ミーティングの基盤になるもの、協力しあう人たちを見つけ、いっしょに。
- ⑤できる範囲で、まずはやってみよう
●本人ミーティングは一度やってみると様子が変わり、いろんな発見や気づきにつながるヒントがえられます。まずは小規模でもいいので、キックオフ！
- ⑥本人同士がつながり、地域で相対的に
●本人ミーティングを開催しておもしろいはず。本人同士が自分たちから地域で継続的に集える場や活動をいっしょに、考えつくっていきます。
- ⑦小さな変化・成果をキャッチし地域に発信しよう
●本人ミーティングの開催当日だけでなく、企画段階から、新たな発見やつながりの広がりが、変化が起きてきます。途上の変化・成果を丁寧に、発信することで地域づくりが加速します。

2 本人ミーティングを企画・準備する

★誰が、本人ミーティングを開催するか？（実施主体）

- 様々な立場の人や組織が、開催することが可能です。
- これまで本人ミーティングを開催してきた事例を見ると、行政や地域包括支援センター、医療機関、介護事業者、自主組織など、様々な立場の人たちが、開催しています。
- 最初は、「本人ミーティングって何？」「なぜ必要？」といった素朴な話し合いからスタートします。
- 実施するかどうかより、「本人ミーティングというのが開かれているようだよ」と周囲に伝え、話し合ってみましょう。



★「いっしょに、やってみないか」：声かけあって、地域にいる人たちがつながって取り組もう！

● 本人ミーティングのことを仕事の関係者や地域の人たちに伝えていくと、

「本人同士が話せる機会があったらいいね」

「本人の声を、ふだんはよく聴けないでない」

「そうした場がこの地域にもあったらいいね」

「できることを手伝うよ」

など、賛同する人たちと少しずつ、つながっていきます。

こんな人たちが一緒に、本人ミーティングに取り組んでいます



● 本人
当事者組織関係者も



● 行政職員 ● 保健師
退職後のフリーの人も



● 地域包括支援センター職員
● 物忘れ相談等の相談役の人
● 認知症地域支援推進員
● 初期集中支援チーム
● 若年性認知症支援コーディネーター



● 専門医
● サポート医
● かかりつけ医



● 看護師
● 認知症専門の看護師
● 医療機関職員



● 介護支援専門員
● 介護事業所職員



● 社会福祉協議会の人たち
● 地区活動をしている人たち



● 民生・児童委員
● 町会の人



● ご近所の人

一部の人や組織だけでやるよりも、地域の多様な人といっしょに取り組むと本人ミーティングが充実し、その後の展開の幅も広がります。

5

★どんな集まりがいいか、企画段階から本人が参加するチャンスをつくろう！

● 集まりやすい場、話しやすい場ってどんなところ？周囲だけで企画してしまわずに、本人の意見を聞くことが肝心です。

● 一人からでいいので、本人に聞いてみると具体的な手がかりが、見つかります。

● 「うちの地域には、企画に加わるような人はいない」と決めつけしないで。地域の中に参加するチャンスを持っている人たちがいます。

● 地元の医療・介護の専門職員、家族の会の人、同僚や友人などに、誰かいないか、尋ねてみよう。

【例】地方の自治体の行政職員より

地域包括支援センターに声をかけてみたら、「ちょうど相談に来たばかりの人がおられる」とのこと。ダメもとでその人を企画の集まりにお誘いすることに。

「おっと話したい」と思われていたようで、案外くさることなく、

ぼつりぼつり、いめれることがとても参考になりました。

今では企画はミーティング当日の中心的存在です。

「これがきっかけで、元氣になった」と本人、家族に言われ、嬉しいです。



● 企画段階から本人が参加している地域



本人でないと気づけないアイデアが次々とでて、企画が具体的にになっていきました。

6

★トピックス (調査結果紹介)

トピックス
Topics

このガイドの作成に伴い、認知症の本人視点重視や本人調査についての調査を行いました。この調査は、全国自治体の実施に関する初めての調査であり、回収率は、概通府県が100%、市区町村は54.6%で、認知症の本人の視点重視の推進のあり方や本人調査への自治体の関心の高さがつかえました。主な調査結果を紹介します。

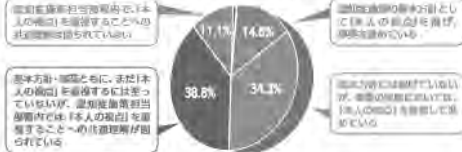
※平成29年度厚生労働省高齢者介護推進部等事務局「認知症の本人視点重視した生活支援調査」及び関係自治体、民間事業者、関係団体等との共同調査結果に基づき作成されています。

「認知症の人の視点の重視」(新オレンジプラン)について

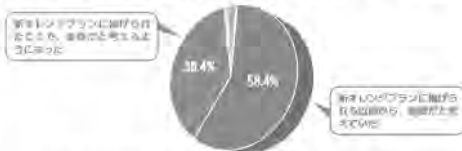
●都道府県では、68.1%が、認知症の人の視点を重視して事業等を進めていると回答(N=47)



●市区町村の約半数(49.1%)が、認知症の人の視点を重視して事業等を進めていると回答(N=950)



●市区町村では、ほとんど(92.8%)が、認知症の人の視点を重視することが重要と回答(N=950)



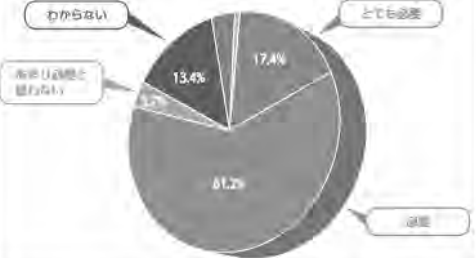
○新オレンジプランに盛り込まれたことは知っているが、それは重要だと考えていない: 0.6%
○新オレンジプランに盛り込まれたことと知らない: 2.3% ○その他: 0.1%

本人調査実施を通じて、市民や支援関係者、認知症の本人・家族の変化(市区町村)



施策・事業を進めていく上での本人調査実施の必要性(市区町村)

●市区町村の8割弱(78.6%)が、本人調査を必要だと考えている。(N=950)



平成28年度 老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）
認知症の人の視点を重視した生活実態調査及び認知症施策の企画・立案や評価に
反映させるための方法論等に関する調査研究事業

報 告 書

発 行 一般財団法人長寿社会開発センター
平成29（2017）年3月
